

〔夷事輯録〕

江戸來狀

去ル十八日夕八半時分海防懸御日附様方 此方様初内海御警衛之御方々不殘御城中に御呼出しニ相成昨十七日渡來蒸氣船之亞墨利加國之船ニ而小柴沖へ碇泊致候ニ付爲心得申達候魯西亞船も跡方可致渡來候へ共至而平穩之事ニ付御備場向先是迄之通りニ而増詰等ニ不及候將又英吉利佛蘭西船も可致渡來儀も可有之共段も爲心得相達候との儀御徒目附組頭田中勘左衛門殿を以被仰渡候ニ付御陣屋に早打を以中向ニ相成候事

六月十八日露使神奈川に來着す幕吏永井玄蕃頭堀織部正等應接の爲め出張す

〔形勢雜記〕 (六月十八日の事なり、最後に)

一魯西亞使節神奈川に乘入候ニ付爲應接永井玄蕃頭堀織部正津田半三郎等觀光丸ニ而彼地に罷越候處魯西亞使節江戸參府登城拜禮相願候よし其外應接之義者彦根佐倉上田三家之一條其外江戸表御混雜故見合罷在候趣ニ候よし

六月十九日幕府勅許を待たずして米國と修交通商條約十四條貿易章程七則を締結す

〔江戸自筆狀〕

以別紙申達候長崎表に先月廿七日阿蘭船壹艘致入津同晦日亞國蒸氣船渡來欠乏之品乞請度由申立先達而渡來之類船ニ而疑敷儀も相聞不申段御達も有之候處兩艘之船將より應接之次第御出入檣林榮左衛門より至密言上之趣青地源右衛門方相達諸番之軍艦一ト先長崎に渡來可致哉も難計左候而江戸近海相廻公邊之御扱次第ニ之忽炮發之時ニも相成可申哉右之注進御承知有之候而ハ相州表を初御人數少ナニ而上々様御立除等安シ被兼候付先御番方一組ニても可被差登哉ト一旦被仰談候得共公邊之專ら無事ニ御仕成傍ニ之京都之御一件杯御評議を被擬候折柄御國許より御人數被差登候儀御隣國ニ相響萬々一人氣動搖之端共相成可申哉諸事公邊之御議定ニ被應候事ニ付此元より御左右無之候ニ御人數被差越

六月十八日
日岩瀬肥
後守神奈
川に趣く

候儀都合何程ニ可有之哉其上榮左衛門一人之口舌を以被及御取計候儀も如何ニ付先ッ其儀者御見合ニ相成候間此元ニ而も手を廻シ御人數等不被差登候而難叶筋候ハ、猶早便を以中向候様其内長崎表之模様ニ應ら候而ハ此元より之御返事を不被待其御取計被及候儀も可有之哉尤當秋相州交代之御中小姓并大筒手急速ニ被差立旨被及御内意候由ニ而前條源右衛門方之來札等被差越委曲被仰越趣具ニ致承知候今度之亞國船二艘去ル十三日下田表に致着船申立之趣有之候付同所御奉行様方種々御取扱ニ相成候へ共納得不致同十七日一艘神奈川沖に乘入致碇泊候段追々注進申來候然處御承知之通京都表之御模様も有之如何様之御取扱ニ相成候哉甚以懸念ニ有之候付翌十八日岩瀬様は不取敢藏人儀相伺候處夕刻罷出候様被仰聞候付見合罷出候處最早蒸氣船ト神奈川表に御出張ニ付御用人に應對いたし候處岩瀬様方段々被仰付置候趣も有之熱談之末方一御手切レ之御沙汰筋ニも成行候ハ、前以極密御知せ被下候様重疊申談置候處同十九日別番之通岩瀬様御用人方申來御留守居之御老中様御手筋且奥御右筆組頭業様種々手寄を以相覽候處從來京都表ハ方今洋外國之事情一切御不案内之儀ニ候へハ被方方被仰付越候筋合を盡く被取用候而ハ第一皇國之御爲不宣徳川様御一家ハたとへ御滅亡ニ相成候而も被成方ハ無之候へ共皇國之御危難ニ致關係候事柄ニ付開港貿易等權衡いたし候へハ輕重大ニ異と申説有之夫等之處方御談判ニ相成候哉之由相聞亞船案外速ニ了解いたし下田港に引取申候是迄之行並之京都表に重疊御懇切被仰立得斗御熟議之上諸事御取扱ニ相成候趣ニ有之候へ共興廢存亡之機ニ臨候事ニ付征夷御委任之立場ニ御見込ニ相成申候との儀竊ニ承中候魯西亞も一艘一昨廿日渡來追而英佛渡來いたし候とも右之通ニ御扱故平穩之御見込之由ニ有之是等之趣且此節被仰越候次第逐一奉達御内聽候處若殿様御出府之第一條之儀之公義御格台も有之將又御備手御人數一件被差登機會之儀ハ此元ニ而無之而ハ相分不申方一此表ニ而ハ案外之時節ニ仰山有之而ハ公義之御間且人氣之動搖ニも相係候付從是被仰付越無之内之被爲在御出府候ニ不被爲及御人數も同様被仰付越無之内ハ不被差登候様ニと被仰出候間左様御承知候様尤今度ハ先ッ無事ニ歸帆いたし申時ニも至可申候得共夷情難計油斷之決而難相成以往之處彌以實地ニ御備等相立候様有之度前條之通公邊之御模様相分候上之早速履差立可申と囑合居候内一昨廿

安政五年

一五五

日之夜其御地より之雇到來いたし一應爲御安心御報取東東海道三日半限之雇差立申候事ニ御座候以上

安政五年也 六月廿二日

三 淵 志 津 摩
溝 口 藏 人

長 岡 佐 渡 殿 有 吉 頼 母 殿
大 木 舍 人 殿 小 笠 原 備 前 殿
朽 木 内 匠 殿 有 吉 市 左 衛 門 殿

向々兵糧之儀先ッ壹万五六千俵早々積廻候様との儀一昨廿日大坂に及達せ候事ニ御座候以上

以手紙啓上仕候爾後益御清寧被成御勤仕珍重御儀奉賀候然之肥後守儀神奈川表御用濟ニ而昨十九日夕刻被致歸府候付
一昨夕兼而被仰聞御座候件々逐一申聞候處委細被致承知候右亞米利加船之儀之昨日談判申濟候一付最早今晚頃之出帆
之筈ニ御座候間御人數等御配意之義之無御座様と被奉存候且又此後下田港ニ碇泊之魯西亞船參候共彌張同様平穩可有
之と被存候猶委細之儀之面上可被申述と被奉存候間左様御承知可被下候此段自共宜得貴意旨肥後守被申付如斯御座
候以上

六月廿日

岩瀬肥後守内

太 田 耕 作
市 川 渡

溝 口 藏 人 様

〔形勢雜記〕 (前文は六月十八日 日の節に出つ)

一亞表使節假條約調印之義ニ付期日相延候得共當節彼國并魯西亞船等下田湊に入津其上英吉利佛蘭西兩國共外同盟之國
々清國と爭戰之義蠻夷之方勝利を得清國必然と當感致し無是非十分之條約取究既及和平其形勢を以勇氣瀟々ト洋中を

通艦致し 皇國に渡來致し去々條約書取極之應接ニ及び候積右ニ付而ハ諸事談判六ヶ敷被是差支多可有之候間右等之
廉々使節も乍蔭甚々心配至極ニ付彼等申立候假條約之義無別條調印相濟入手致候ハ、不日ニ英佛兩國等之軍艦數十艘
渡來何様之義申出候共程能く取扱手荒之所置ニ之決して不爲致平穩之次第一可及示談旨其外品々算へ立利害及含兵威
其振ひ申立候付是又差湊候義不容易次第故於 柳營夫々役々相論評議之處備中守殿伊賀守殿所存ニハ何分使節深く存
タクラミ候大事ニて此上調印延引相成候而ハ忽チ英佛等に内談ニおよひ何様之形勢ニて入津重大之事件申立候而ハ應
接も六ヶ敷自然手切等之次第ニ相成候而ハ以之外大亂之基ニ付井上信濃守岩瀬肥後守程能く爲相合精々相宥め調印之
義ハ延引ニて一旦下田に引退候様及示談候方可然哉尤兩人何様相宥め申論し候とも万々一使節不聞入張而調印之義申
聞候半々無是非次第候へ左候ハ、兩人心得を以無餘義調印致し候方ニも可有之旨被申聞掃部頭殿所存ニ之夫ニ而
之第一京師に奉對次ニ者御三家以下諸大名之所存も如何ニ候精々於神奈川利解申論し何れニも一日下田に爲引込候而
決而調印ハ不致方可然旨被申聞則右之次第列座ニ而信濃守肥後守にチク一示談被致致兩人義も承伏いたし一身及抛
チ及應接調印は致聞敷旨申聞外老中も同様之旨被申聞列座相濟候上備中守殿伊賀守殿兩人外御用有之旨ニ而別間ニ而
信濃守肥後守相招下田表御用談有之畢而先刻列座ニて示談ニハ候得共亞表使節不容易人物其上無程英佛兩國不依多少
渡來いたし候節何様之密談ニ可及も難計旁以一大事ニ付成丈ケ平穩ニ申談候儀ハ當然ニ候得共前文之次第故万一領掌
不致候砌者連も無異下田に戻候譯ニ之至間敷候間内々本紙相渡候間於彼地臨機應變之取計之勿論ニ候段密々兩人に申
聞本紙被相渡候間信濃守肥後守も委細承知之段申述退出之上直様支配向も相論罷在候間船路を神奈川に罷越使節と種
々談判致候得共中々剛情申張聊承伏不致候間備中守伊賀守内意も有之事故終ニ承引之上當月十九日於神奈川横濱調印
致使節に相渡其後双方無別條使節者下田に引戻り信濃守者江戸に歸帆致し候由

〔安政五年々觸狀扣〕

文久二年迄 亞墨利加國條約并稅則

安 政 五 年

帝國大日本大君と亞墨利加合衆國大統領と親睦の意を堅くし且永續せしめんために兩國の人民貿易を通ずる事を處置し其交際の厚からん事を欲するがため懇親及び貿易の條約を取結ぶ事を決し日本大君は其事を井上信濃守岩淵肥後守と命し合衆國大統領ハ日本に差越たる亞墨利加合衆國のコンシユルゼ子ラール官トウンセント・ハルリス名と命し

双方委任の書を照應して下文の條々を合議決定す

大統領落職マ、

第一條 向後日本大君と亞墨利加合衆國と世々親睦ふるへし日本政府ハ華盛頓に居留せる政事に預る役人を任し

又合衆國の各港の内に居留する諸取締役人及び貿易を處置せる役人を任まへし其政事に預る役人及び頭立たる取締の役人ハ合衆國に到着の日より其國の部内を旅行まへし

合衆國の大統領は江戸に居留するヂプロマチーキアгент名を任し又此約書に載たる亞墨利加人民貿易のため開きたる日本の各港の内居留するコンシユル官又はコンシユライルアгент名等を任まへし其日本に居留せるヂプロマチーキアгент并コンシユルセ子ラールは職務を行ふ時より日本國の部内を旅行せる免許あるへし

第二條 日本國と歐羅巴中の或る國との間若障り起る時は日本政府の囑應し合衆國の大統領和親の媒とふりて扱ふへし

合衆國の軍艦大洋にて行遇たる日本船へ公平なる友睦の取計らひあるへし且亞墨利加コンシユルの居留する港に日本船の入る事あらハ其各國の規定より友睦の取計らひあるへし

第三條 下田箱館の港の外次いふ所の場所を左の期限より開くへし

神奈川 午三月より凡十五ヶ月の後より

西洋紀元千八百五十九年七月四日

長崎 右同斷

同斷

新潟 同斷凡二十ヶ月の後より

千八百六十年一月一日

兵庫 同斷凡五十六ヶ月の後より

千八百六十三年一月一日

若新潟港を開き難き事あらハ其代りとして同所前後より一港を別と撰ふへし

神奈川を開く後六ヶ月として下田港ハ鎖まゝし此條の内に載たる各地は亞墨利加人居留を許まへし居留の者ハ一箇の地を價を出して借り又其所に物あまは是を買ふ事妨なく且住宅倉庫を建る事も許まへしといへとも是を建るに託して要害の場取を取建る事ハ決して成さるへし此掟を堅くせんために其建物を新築改造修補ふとせる事あらん時は日本役人は是を見分する事當然たるへし

亞墨利加人建物のために借り得る一箇の場所并に港々の定則は各港の役人と亞墨利加コンシユルと議定まへし若議定しかたき時は其事件を日本政府と亞墨利加ヂプロマチーキアгентと示して處置せしむへし其居留場の周圍に門塔を設け出入自在まへし

江戸 午三月より凡四十四ヶ月後より

千八百六十二年一月一日

大坂 同斷

千八百六十三年一月一日

右二ヶ所ハ亞墨利加人只商買を爲す間との逗留せる事を得へし此兩所の町におる亞墨利加人建家を價を以て借るべき相當なる一區の場所并に散步まへし規程は追而日本役人と亞墨利加のヂプロマチーキアгентと談判まへし

双方の國物品物を賣買せる事總て障りなく其拂方等については日本役人まを立合ハす諸日本人亞墨利加人より得たる品を賣買し或ハ所持せる俱々妨なく軍用の諸物ハ日本役所の外へ賣へらす尤外國人互の取引は差構はる事ふし此條は條約本書取替せ濟の上ハ日本國內へふれわたすへし

米并小麦ハ日本逗留の亞墨利加人并ニ船々乗組たる者及び船中旅客食料のため用意ハ與ふとも積荷として輸出せる事を許さす

日本産する所の銅餘分はらハ日本役所にて其時ニ公けの入札を以て拂ひ渡せし

在留の亞墨利加人日本の賤民を雇ひ且諸用事ニ宛る事を許せし

第四條 總て國地ニ輸入輸出の品々別冊の通日本役所へ運上を納むへし

日本の運上所にて荷主申立の價を好むりと察する時は運上役より相當の價を付其荷物を買入るゝ事を談まへし荷主もし是を否む時は運上所より付ふる價ニ從て運上を納むへし承允する時は其價を以て直ニ買上へし

合衆國海軍用意の品神奈川長崎箱館の内ニ陸揚し庫内に藏めて亞墨利加番人守護するものハ運上の沙汰に

及ず若其品を賣拂ふ時ハ買入る人より規定の運上を日本役所ニ納むへし

阿片の輸入嚴禁たり若亞墨利加商船三斤以上を持渡らハ其過料比品ハ日本役人は是を取上るし

輸入の荷物定例の運上納済の上ハ日本人ハ國中ニ輸送せとも別ニ運上を取立る事ふし

亞墨利加人輸入する荷物は此條約に定めたるより餘分の運上を納むる事ふく又日本船及び他國の商船にて

外國より輸入せる同じ荷物の運上高と同様たるへし

第五條 外國の諸貨幣ハ日本貨幣同種類の同量を以て通用せし

双方の國人互ニ物價を償ふに日本と外國との貨幣を用ゆる妨ふし

日本人外國の貨幣に償ふにされハ開港の後凡一ケ年の間各港の役所より日本の貨幣を以て亞墨利加人願次第

引替渡せし向後鑄替の金銀分割を出す及ハす

日本諸貨幣ハ銅錢を除く輸出する事を得并ニ外國の金銀ハ貨幣に歸るも輸出せし

第六條 日本人ニ對し法を犯せる亞墨利加人ハ亞墨利加コンシユル裁斷所にて吟味の上亞墨利加法度を以て罰するし

亞墨利加人へ對し法を犯したる日本人ハ日本役人糺の上日本の法度を以て罰するし

日本奉行所亞墨利加コンシユル裁斷所ハ双方商人通債等の事をも公けに取扱ふへし

都て條約中の規定中ニ別冊ニ記せる所の法則を犯せしおるハコンシユルへ申達し取上品并ニ過料ハ日本役人へ渡せし

兩國の役人は双方商民取引の事ニ付て差構ふ事ふし

第七條 日本開港の場所ニおる亞墨利加人遊歩の規程左の如し

神奈川 六郷川筋を限とし其他ハ各方へ凡十里

箱館 各方へ凡十里

兵庫 京都を距る事十里の地へハ亞墨利加人立入さる管付其方角を除き各方へ

十里且兵庫に來る船々の乗組人ハ猪名川より海陸迄の川筋を越へからず

都て里數ハ各港の奉行所又ハ御用所より陸路の程度なり 本の一里ハ亞墨利加の四千二百七十五ヤートルト日

長崎 其周圍に在る御料所を限とす

新潟は治定の上境界を定むへし

亞墨利加人重立たる惡事ありて裁斷を受又ハ不身持て再び裁許ニ處せられし者は居留の場所より一里外

ニ出へらさず其者等は日本奉行所より國地退去の儀を其地在留の亞墨利加コンシユルに達せし

其者とも諸引合等奉行所并ニコンシユル糺濟の上退去の期限猶豫の儀はコンシユルより申立に依而相叶ふ

第八條 日本に在る亞墨利加人自ら其國の宗法を念し禮拜堂を居留場の内に置も障りふし并ニ其建物破壊し亞墨

利加人宗法を自分念するを妨る事なし

亞墨利加人日本人社堂宮を毀傷する事ふく又決して日本神佛の禮拜を妨げ神佛像を毀る事あるをらさず

双方の人民互に宗旨に付ての争論あるべからず

日本長崎役所におりて踏繪の仕來りは既し廢せり

第九條 亞墨利加コンシユルの願に依て都て出奔人并に裁許の場より逃去しものを召捕又えコンシユル捕へ置たる罪人を獄に繋く事叶ふへし且陸地并に船中にある亞墨利加人より不法を戒め規則を遵守せしむるためにコンシユル申立次第助力をへし右等の諸入費并に願よつて日本の獄に繋きたる者の雜費ハ都て亞墨利加コンシユルより償ふへし

第十條 日本政府合衆國より軍艦蒸氣船鯨漁船大砲軍用器并に兵器の類其他要需の諸物ヲ買入を又は製作を誂へ或ハ其國の學者海陸軍法の士諸料の職人并に船夫を雇ふ事意の儘たるへし却て日本政府注文の諸物品は合衆國を輸送し雇入る亞墨利加人ハ差支ふく本國より差送るへし合衆國親交の國と日本國万一戦争ある間は軍中制禁の品々合衆國より輸出せず且武事を扱ふ人々ハ差送らさるへし

第十一條 此條約ニ添たる商法の別冊ハ本書同様双方の臣民互に遵守せしむるへし

第十二條 安政元年寅三月三日即千八百五十四年三月三十一日 神奈川ニおりて取替したる條約の中此條々ニ翻歸せる廉ハ取用す同四年己五月廿六日即千八百五十七年六月十七日 下田ニおりて取替したる約書は此條約中に悉せるに依りて廢すへし

第十三條 今より凡百七十一ヶ月の後即千八百七十二年七月四日ニ當る 双方政府の存意を以て兩國の内々壹ヶ年前に通達し此條約并に神奈川條約の内存し置ケ條及び此書ニ添たる別冊とも双方委任の役人實驗の上談判を盡し補ひ或ハ改る事を得へし

第十四條 右條約の趣ハ來る末年六月五日即千八百五十九年七月四日より執行ふへし此日限或ハ其以前よりても都合次第日本政府より使節を以て亞墨利加華盛頓府におりて本書を取替せしむる若無餘儀子細ありて此期限中本書取替し済すとも條約の趣は此期限より執行ふへし

本條約ハ日本よりハ大君の御名と奥印を署し高官の者名を記し印を調して證とし合衆國よりハ大統領自ら名を記しセケレターリスフハンスタート名とも自ら名を記し合衆國の印を鈴して證とすへし尤日本語英語蘭語にて本書寫ともニ四通を書し其譯文は何とも同義ありといへとも蘭語譯文を以て證據とをををし此取極のため安政五年午六月十九日即千八百五十八年亞墨利加合衆國獨立の八十二年七月廿九日 江戸府におりて前ニ載たる兩國の役人等名を記し調印せるもの也

井上 信濃 守花押
岩瀬 肥後 守同

税 則

日本開きたる港々におりて亞墨利加商民貿易の章程

第一則 日本開港の場所へ亞墨利加商船入津次第二十四時中即千八百五十八年四月十八時より船司又は頭立たる者より日本役所へ亞墨利加コンシユルの請取の書付を差出せしむる

此請取書ハ亞墨利加國の檢通認たる船目録其外の書類を亞墨利加コンシユルへ預けたる受取書あり并に其者とも其船の差出書を出すへし

右ハ入津の船の名其船乃仕出し場の湊の名噸數船司或は頭立たる者の名乗來る旅人の名乗組有之節一船の乗組人數を認たるものとして書面の通相違無之旨を船司或は頭立たるもの奥書いたし證據として當人の名前を認入たるものあり
同時ニ其船積荷の告書を役所ニ預くへし

右者其荷物の譜牒并ニ番付且其入目斤數等を送狀ニ認し通一寫し荷物引受先の人々の名を記せるもの

船中用意の品物の目錄も告書へ加ふべし

但船中用意の品も書面之通相違無之旨船司又ハ頭立たるもの奥書し其名前を記せし

此告書の文面相違の廉日本十二時但日曜日を除くの申一心中附き改る一おいては過料の沙汰一及とす若其

期限後一至り書改る敷又は告書一書入ををる一おいては八十五ドルラルの過料を日本役所ニ納むべし

積荷惣目錄告書中ニ載さる品を陸揚せる一おいては其品二重の運上を日本役所に納むべし

船司或は頭立たるもの入港の手續納方前書の期限一後る一時は過料として一日怠るゑとに六十ドルラルの

過料を日本役所ニ納むべし

第二則

日本政府より其港内入津の船々軍艦を除く運上方改の役人乗組まざる儀當然たるべし

乗組のものとも右役人一對し不敬無之丁寧一取扱いたし船中可成丈相當の用便をふすべし夜中ハ日本役

所ニ許しふくして荷卸せざるべし

荷揚前船々出入口荷物仕舞置戸ロペリ口とも夜中ハ日本役人錠を卸し或は印封し夫々の取締をふし置へし

万一許ふく是を開き又は錠印封を破り品物を引出等のものハ其犯せる人毎に六十ドルラルの過料を日本役

所ニ取立へし

日本役所へ當前の差出書を出さずして荷卸いたし或ハ其事を謀れる品々ハ次のケ條ニ定たる通取押へ日本

役所に取上るべし

荷物の中積荷目錄ニ載さる品々を取隠し置收納を減せんと仕組たる者は其品を日本役所ニ取上るし日本の

開、二千	ラ、三、百	佛、五、千	ル、一、百	魯、一、百	デ、一、百	蘭、一、百	佛、一、百	魯、一、百	デ、一、百	蘭、一、百	佛、一、百	魯、一、百	デ、一、百	蘭、一、百	佛、一、百	魯、一、百	デ、一、百	蘭、一、百	佛、一、百	魯、一、百	デ、一、百	蘭、一、百
------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

ルラルの過料を納むべし

修復のため入津の船々ハ運上ふく積荷を陸揚し日本役所へ預るべしといへども藏鋪作事并常人等の諸入用

ハ相當の價を出すべし若其荷物の内を賣拂ふ時は其荷物丈ハ規定の通日本役所ニ運上を納むべし

積荷を同港内の他船へ移す時は日本役人見分の上事情明白ニ相分り免状を受る上之定の運上ふし

阿片の輸入嚴禁たり然るに密商し又之事を謀る輩は阿片一斤ことに十五ドルラルの過料を日本役所ニ納む

べし其組合の人数の多少ニ拘らず此法を以てせし

第三則

品物を送る荷主又ハ引受先の者ハ入津の荷物を陸揚せんとする者は其積荷の差出書を日本役所ニ出さへし

此書面は荷主又ハ引受人の名前積送たる船の名前物の譜牒番付其積荷の斤數石高毎品の代料を認め其總

額高を其書付の末ニ認むべし

都て此差書出付は持主又引受人認たる偽なき價を申立る書面にて日本役所の規定ニふれたる隠し荷物なき

證據として銘々名前を記せし

右の通積荷目錄差出等の書類日本役所に差出右書付引合せ積荷用意品々等取調済迄ハ品物とも日本役所の

預りたるべし

日本役人右の通差出たる荷物の内或は惣躰を定式ニ通改むべし

若運上役所ニ引上げ改る事ある時は輸入人の失費相掛す可成丈品物の損せざる様一いたし改済の上は素の

如く取始末をへし尤取調方格外時日を費さるべし

荷主或は輸入人銘々持受の品改済役所ニ引渡さるる以前輸入の途中日本役所へ差出さるる破壊損傷の品々心附

ときは常人より其段運上役所ニ申立其品取扱ふ職業の廉潔ふるもの兩人以上出會直組いたさせ其荷物ふと

に損し高を歩割一記し其譜牒番數とも一證書ニ相認込めし尤日本役人立合一て直組人等名を記せし右の

五百五十	三百五十	二百五十	四百五十	三百五十	二百五十	四百五十	三百五十	二百五十	四百五十	三百五十	二百五十	四百五十	三百五十	二百五十	四百五十	三百五十	二百五十
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

證札兼て持参の差出書へ添惣高の内を引落せし尤條約第四ヶ條の取極の通運上役所にて取扱ふ事故障あるをららす

諸運上納済の後運上役所を陸揚苦らさるる段免許狀を渡せし品物渡方ハ運上役所にても船中にても其者の願を任せし

輸出に極りたる荷物ハ船に輸送せる前廣く運上役所へ船名荷物の譜牒番付入高斤數量目性合併し代料を記せる差出書付を出し書面の通聯偽なき由を輸出人等證據として其名前を認むへし

運上役所へ差出し以前船中へ積込たる荷物并運上役所へ差出済の上禁制の品を竊し荷積の内へ入有之ハ改の上日本役所より取上せし

第四條

船中常用の品又は乗組旅客の常用衣類等は運上役所より差出さるるへし
出港手数を願ふ船々ハ日本十二時亞墨利加前二十四時運上役所へ申立へし此期限内に右手数遅々せざる様取扱ふハ勿論たるへし右手数差止る事あらは日本役人より船司又ハ頭立たる者并其船荷の取引人等へ其段申渡し亞墨利加コンシユル申達せし

合衆國軍艦は入港出港運上筋の手数及ハす運上役人并番兵等差構ふ事なし合衆國飛脚のための蒸氣船ハ入港出港の手数を一日にいたし日本に上陸せる旅客并品々の外ハ告書差出し書面の手数ふしといへとも何ヶ度ても入港の度ごとに出口の手数はいたすへし

薪水食料等用意のため入港の鯨漁船或は難船は其積荷の告書を出さすといへとも若其積荷を賣拂ハんと願ふ時は第一則の通定式輸入の手数をいたすへし

税則并條約書中に船と唱ふるものはシキツ、バルク、ブリツキ、スクー子ル、スルーフ蒸氣船等を總ていふなり(佛國との取極はナライル、バルク、ブリツキ、ゴウエレット、スルー、ワツベル等とあり)

關、三百八十
ル、二百七十
ト、五十七
魯、百六十
佛、百六十
ラ、五十七

第五則

日本運上役所の規則に違ひたる偽差出し積荷日録を出し并證書に名前を記せる等は其犯をふとに百二十五ドルの過料を日本役所より納むへし

第六則

順税は日本開港の場所におひて亞墨利加商船より取立をといへとも左の規定の通り其地々々の運上役所より納むへし

壹船の入港手数付 十五ドル

(關、三十八ギユルデン二十五セント
佛、八十一フランク
魯、二十一ブル二十コビーキス)

壹船の出港手数付 七ドル

(關、十七ギユルデン八十五セント
佛、三十七フランク八十サンチム
魯、十ル一ブル)

夫々の免狀付 壹ドル半

(關、三ギユルデン八十二セント半
佛、八フランク十サンチム
魯、二ル一ブル二コビーキス)

場所々々健固狀付 壹ドル半

(佛、八フランク十サンチム)

其外の各書付 壹ドル半

(關、三ギユルデン八十二セント半
佛、八フランク十サンチム
魯、二ル一ブル二コビーキス)

第七則

惣て日本開港の場所へ陸揚せる物品は左の運上目録に従ひ其地の運上役所より租税を納むへし

第一類

貨幣に造りたる金銀并造らざる金銀常用の衣服 家財并商買のためよせざる書籍何をも日本居留のため來る者の所持の品に限るへし

右の品々は運上なし

第二類

凡て船の造立調具修復或は船装のため用ゆる品々鯨漁具の類 鹽漬食物の諸類 パン并にパンの粉 生たる鳥獸類 石炭 家を造るための材木米糠蒸氣の器械 トタン鉛錫生絹

右の品々は五分の運上を納むへし

第三類 都て蒸溜或は釀し種々の製法にて造りたる一切の酒類

右ハ三割五分の運上を納むへし

第四類 凡て前條に舉ざる品々ハ何れも寄らす貳割の運上を納むへし金銀貨幣并ニ棹銅の外日本産の物積荷として

輸出する時は五分の運上を納むへし

右は神奈川開港後五年に至り日本役人より談判次第入港出港の税則を再議せし

安政六年己未六月

(以下別紙) 芝神明前

内田屋嘉七

日本橋通貳丁目

須原屋新兵衛

馬喰町貳丁目

菊屋幸三郎

日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

日本橋通貳丁目

山城屋佐兵衛

横山町三丁目

和泉屋金右衛門

芝字田川町

和泉屋吉兵衛

下谷池之端仲町

岡村屋庄助

本石町十軒店

播磨屋勝五郎

浅草茅町貳丁目

須原屋伊八

〔秘史〕日米外交の真相附録

日本内地に於て開鎖の論戰轟々たる間遽然一大警報は来れり時は七月廿三日(我六月十三日)米船ミスツビー號は下田に到着しハリスに報告して曰く「今や英國は印度に於ける土人兵の叛亂を征服し英佛聯合軍は新たに支那軍を敗り

て白河の砲臺を占領し有利の講和條約を締結したる餘威に乘じ更らに聯合艦隊を組織して日本に來航しつゝあり」と超へて廿五日提督タトナーは軍艦ボウハタン號に搭乘して下田に來り前記の事實を報告したればハリスは刻下の形勢一日を緩ふすべからずとふし直ちに結束ボウハタン號に同乗して神奈川に赴き廿七日午後一時同港に投錨すると同時に廿四日起草したる聯合艦隊來航の警報を幕吏に交附したり

此時に當り幕閣の首長に剛毅果斷の井伊大老ありハリスの書を得て事態容易ならずとふし即ち調印斷行の廟議を決し先づ井上岩淵の兩委員を神奈川に簡派しハリスに折衝せしめんとしたり兩使便ち汽船に搭乘して神奈川に赴きボウハタン號の近傍に投錨したるは實に七月廿八日の深更より然るにタトナー提督は日没後は祝砲を發射せざる制規なるにも拘はらず特に兩使の來訪を驪迎するの意を表せんが爲めに十七發の祝砲を發射して之を迎へたり兩使は私人の資格を以て直ちにボウハタン號を訪ひハリスと會見し先づ彼が逸早く斯る重大なる警報を幕府に通知せられたる好意を謝し且つ曰く「條約調印期は過般貴下との交渉の結果來る九月四日(日本陰曆七月廿四日)を以て斷行すべきことを約し之を諸大名に通告したれば未だ其期限の來らざる今日に於て調印するは不測の變亂を招くの恐れあり徐ろに期限の到來を待つは康寧なるに如かず」とハリス答へて曰く「余は敢て過般の契約を無視して調印期の短縮を強要せんが爲めに來りしに非ず唯だ今日の事一日を緩ふせば一日早く日本の爲めに危険を招くべきを憂へ寧ろ英佛聯合艦隊の威力を以て其支那に對して試みし如き屈辱的條約を日本に強ゆるの危険を未然に防止せんと欲するの老婆親切に出てしのみ故に若し貴官等にして前約の如く調印期を來る九月四日迄延期せんとふらば余亦た毫も反對するの意あらず直ちに下田に歸りて靜かに時機の到來を待たんと欲す」と茲に於て岩淵肥後守はハリスに向ひ今日直ちに日米條約に調印する以上近く英佛聯合艦隊來航の曉には右兩國とも日米通商條約以外新たなる要求を提出せざらんことを保證し若し萬一右兩國が苛重なる要求を提出したる場合にはハリスが仲介者として之が緩和に盡力すべき旨老中に通告せんことを要求したりハリスは之を謝絶したりと雖も別に老中に一書を裁して英佛兩國は多分日米通商條約を以て満足すべく

従つて是れ以上苛重なる要求を提起することなきを信ず若し萬一右二國と日本の間に困難なる問題の發生したる場合にはハリスは友誼上仲介者として是れが解決に盡力すべき旨を通告するを諾したり此提議は日本全權の容るゝ所とふり直ちに前記の意味に於て書かれたる老中宛ハリスの手紙を得て一日其乗船に歸り之を日本文に翻譯研究したる後其完全なるを見るや午前三時直ちに米艦に引返し日米通商條約に調印したり此時タトナー提督は特に日米兩國國旗を交又してボーハタン號に掲げ之に廿一發の祝砲を發射したり思ふに殷々たる砲聲靜寂ある神奈川港頭の曉霧を破りし時多年心血を瀟きし條約が初めて其生命を與へられたるハリスの心耳には恰かも微妙の音楽を聞くの感ありしふるべし時に千八百五十八年七月廿九日邦曆安政五年六月二十四日(六月十九日)より超へて八月二日(我六月廿三日)ハリスが香港のサー、ジョン、ボーリングに與へし書中「英國艦隊司令官エルデン卿及佛國艦隊司令官グロス男爵は今や日本に來着するに當り其目的の全部は既に余の手に依りて貫徹せられ其率ゐたる大艦隊は何等の要なきを見るべし」と彼が得意満面の狀想見すべきに非ずや斯くて英佛露の強大なる艦隊其後續々來航して各自我國と通商條約を締結せしが何れもハリスの條約を基礎とし之に少修正を加ふるに過ぎざりき

六月某日本藩警備地守兵の配置及び駐屯地等に關する事情を幕府に具申す

〔相州御備場一件〕

海岸御懸

堀田備中守様

越中守相州御備場御用相動候ニ付而諸般之手當大造之事ニ而人數之儀ハ不斷交代遠國往來之遣用詰内擬作糧物等ニ至迄連々之出方夥敷乍然格別之御用相動候事ニ付相厭候譯ニ者無御座候得共いまた事ニ臨不申内國力及疲弊候場合ニ茂相成諸事仕法を附非常之覺悟行届候様不仕候而者難相成種々工夫を凝心配仕居申候最前國許之人數呼寄警衛爲仕候處段々平穩之御取扱ニ相成候付而者兼而國者共偏固之生質ニ付異國船渡來之節苛察之及取計萬一後患を引起候様之儀茂

可有之哉と深く懸念仕江戸表定詰之者ニ候得者都會ニ生立辨別有之候付平常者定府之者重ニ差遣國許之人數者御當地に引附置非常之節急速ニ出張仕度との趣松平伊豫守様浦賀御奉行御勤役中御内意申上其通御差圖相濟候付定府之者差遣國者ハ過半御當地に引付置申候然處越中守居屋敷を初所々屋敷共至而手狭ニ而住居向者勿論家來共差置候長屋等茂及不足身分柄之者茂多分相小屋いゝし兼々困窮之上右引付置候者共之居所猶更無之旁以及混雜候付少々者國許に差下相殘候分込台罷在就而ハ年中温疫等茂絶不申上下共大ニ迷惑仕候屋敷手狭付而者相應之場所拜領之儀奉歎願置候得共何之御模様茂無之又外夷之儀者平穩之御取扱中ニ御座候處前文之通年々費用茂相嵩候上居處等品々難澁之次第茂御座候事ニ付引付置相殘居候者共も先國許に差遣自然之節呼寄候様仕候得者彼是少ハ廿ニ茂相成候間平穩之御取扱中右之通仕度奉存候尤段々事馴候茂有之候付定府之者共と縁替差遣候儀茂可有御座候此段茂申上置候以上

細川越中守家來

吉 田 平 之 助

御備場手當人數之内御當地に引付置候者共國許に差遣置申度段委細別紙ニ申上候通御座候然處格別遠國之事ニ付若異船御打拂之御模様茂御座候節ハ御別段を以至密ニ早々御沙汰被成下候様仕度左候得者急速ニ申遣人數呼寄候様可仕候間此段分而御内意奉願置候以上

細川越中守家來

吉 田 平 之 助

六月廿一日井上清直岩瀬忠震登營して神奈川條約調印の始末を報告す

〔形勢雜記〕 (前文は六月十九日(日)の條に出つ)

一六月廿一日信濃守肥後守登 城之上於神奈川表假條約調印等之始末委細掃部頭殿始夫々列座之節申立候付掃部頭殿以外立腹之躰ニ而右様内々木紙相渡無餘義兩人調印致候上之今更無餘次第右調印相濟候譯柄具ニ京都表に早速申遣程

安 政 五 年

一七一

能く奉達 假聞候義ハ勿論次ニ御三家諸大名にも夫々申達置不申候而ハ相濟申聞敷手續いたし奉書を以 奏達致候儀之餘り輕卒ニ相聞候得共差掛り無是非次第 假慮之不及申上堂上之向々所存も可有之哉心配之旨被申聞候得共延引致候譯ニハ無之候間奉書等取調られ早速宿次を以被差出右ニ而亞夷假條約一件之一旦相濟候事

六月廿一日幕府宿次奉書を以て通商條約調印の旨を朝廷に上申す

〔昨夢記事〕

一、京都へ幕府へ被仰上候爲之奉書等左之通ニ右之候

一筆致啓達候外國御取扱方之儀ニ付御使備中守被差登委細之事情及言上候處 勅答之趣も有之候ニ付猶又御三家以下諸大名へ御尋有之追々差出候御答書等入 假覽其上御處置可有之思召之處最早亞墨利迦條約御取結無之而ハ難相成場合ニ至り實ニ不被爲得止事次第ニ付再應被仰進候日合も無之無御餘義御決着ニ相成候は深く御斟酌思召候得共先般被仰進候趣を以今度條約爲御取替有之候右無御餘義次第委細別紙之通ニ候此段先不取敢宜有 奏聞旨被仰出候恐惶謹言

脇坂中務大輔

安宅判

内藤紀伊守

信親判

久世大和守

廣周判

松平伊賀守

忠固判

六月廿一日

堀田備中守
正陸判

廣橋大納言殿

萬里小路大納言殿

亞墨利加條約之次第先達而別段御使を以被仰進候處深く被爲臆 假慮候御次第被仰出候段御尤之御儀ニ付再應御三家已下諸大名へ赤心御尋ニ相成今少々ニ而存意書も揃候間其上篤と御勘考之上御決定可被遊思召ニ而精々御差急被爲在候折柄今度魯西亞亞墨利迦兩國之船渡來申立候趣を以英吉利佛蘭西之軍艦近日渡來可致尤清國ニ十分打勝其勢ニ乘し押懸候事ニ付應接方甚御面倒ニ可相成と御案思申上候併假條約之通御承知相成調印も相濟候ハ、英佛へハ如何様ニも申論御迷惑ニ相成不申様取計可申旨亞國使節申立候ニ付御勘考被遊候處如何程御迷惑相成候とも 朝廷へ御申上濟ニ相成不申候而は御取計難被遊御儀乍去忽争端を開萬一清國之覆轍を踐候様之儀出來候而は不容易御儀ニ付井上信濃守岩瀬肥後守於神奈川調印致し使節へ相渡候誠ニ無御據御場合ニ付右様之御取計ニハ相成候得共 朝廷ニ而御配慮之段ハ實以御尤之御儀ニ付此後之御取締方沿海御手當等充實ニ相成被爲安 假慮候様可被遊思召ニ候委細之儀は猶追々可被仰進候得共先此段可被達 奏聞候事

六月廿一日幕府諸侯に京都及び沿海各地の警衛を命す

〔相模國御備場御用一件〕

細川越中守

上總國富津御備場御用立花飛騨守堺表海岸御警衛被仰付右代丹羽左京大夫に被仰付諸事嚴重申付候様相達候間得其意可被申合候且又松平大膳大夫松平内藏頭儀大坂並兵庫海岸御警衛被仰付是迄之御備場ハ先づ當分代ハ不被仰付候此段爲心得相達候

相模安房上總國御備場御用相勤候而々此度持場替被仰付候得共其方持場之儀者内海之咽喉格別要衝之地ニ而御備向手賦も追々居合候間持場替等之御沙汰ハ無之候間此段爲心得無急度相違置候事

〔相州御備場一件〕

以別紙申達候昨廿一日諸家様東西御受持御所替被仰出則別紙之通ニ而此方様は之昨夕堀田様方御留守居御呼出ニ而是又別紙書付御用人を以御渡ニ相成候右之今般京都方京極邊御警衛之儀被仰出候方之儀ニ可有之候得共相州御一手持之儀ニ付而之萬冬方手寄を以薄々伺居候事有之御相備御三方共ニ追々御通を勝手之儀而已有之兎角公邊之御趣意被奉候儀薄く大小銃共一向御研究無之稽古等茂忘り勝ニ而廻返ニ御役人様御出役之節間ニ之發炮十分ニ出來兼程之事茂有之由其外様ハ去年來異人御取扱ニ種々被戻候儀茂有之且京都に御内訴之唱も有之御向々御名前相見京都之儀之御譜代家ニ無之而之難相成可有之是ハ御別段より可有御座右之外ハ何れニ御陰調と被考中候事ニ御座候京攝之間ニ有之候ハハ御國より道程も近く便利之様ニ相見候得共開港ニ相成候ハハ諸蕃之船幅渡之時節ニ相成候ハ、片時茂難安其上御陣屋茂堡寨同様ニ無之候而之相成間敷諸事嚴重可有之何事茂新規之御造營ニ相成且又江戸御國方懸持之出來兼候付是非御役所を初メ一ト御世帯之立不申候而之相成不申諸藩臣相詰御取成ニより候而之御家老御備頭等を初詰方可有之御中小姓御家人位ニ而之相濟申間敷左候ハハ新々之御出方のみならず性々御出方御幅増莫太之事ニ有之其上ニ當時迄相州ニ付而之御事御出方共ニ宜敷相成り増御預所も頓斗之無益之事ニ相成申候必定此方様何事も被奉御趣意御手厚處方各別御心持相伺既ニ御書付之内御備向手賦茂追々居合有之暗ニ被賞候御趣意ニ可有御座且當時之處ニ而之實ハ各別要地ニ無之儀ハ相分居候得共兼而御頼切又ハ各別との儀之伺居候ハハ江戸近く御請持ニ御座候ハハ此砌り御心強き申意味も可有之哉誠ニ御面目之御讓ニ奉存候間強以諸事御手厚御武備大小銃共ニ熟練有之度御所替之御向々ハ殊之外當惑

ニ而御留守居杯之殿中ニ而不怪羨之候由御家來中之十方ニ暮御國脉ニ差障り候程有之別而柳川家杯之今度之御所精旁御小身之御獨立如何相成候哉と相唱候由ニ御坐候右之趣爲御承知得御意申候以上

六月廿二日

三淵志津摩
溝口藏人

御家老宛
御中老宛

〔嘉永風説帳〕

一安政五年六月廿一日左之通江戸表方書付差廻來候事

松平讚岐守

京都表御警衛之儀猶又御手厚ニ被成度旨被仰進候趣茂有之候付其方儀茂御警衛被仰付候松平出羽守松平越中守茂被仰付候間被申合是迄彼地御固之面々ニ茂諸事申談御守衛筋厚く可被心懸候依之大坂表御警衛之儀ハ御免被成候

松平越前守

武州神奈川横濱邊御警衛被仰付候諸事嚴重可被申付候尤松平隠岐守可被申合候

松平相模守

大坂表海岸御警衛被仰付諸事嚴重可被申付候持場其外委細之儀ハ土屋采女正承合候様可被致候松平内藏頭松平土佐守も被仰付候條諸事可被申合候依之品川御殿山下御臺場御固之儀ハ御免被成候

松平越中守

京都表御警衛向之儀猶又御手厚ニ被成度旨被仰進候趣茂有之候ニ付其方儀御警衛被仰付候松平讃岐守松平出羽守も被仰付候間被申合是迄彼地御固之面々ニ茂諸事申談御守衛筋厚く可被心懸候

安政五年

攝州兵庫表海岸御警衛被仰付諸事嚴重可被申付候尤大坂堺表御固之面々并土屋采女正可被申合候依之相模國御備場之儀ハ御免被成候

藤 堂 和 泉 守

攝州表御警衛向之儀猶又御手厚ク被成度旨被仰進候趣も有之候付此度松平讃岐守松平出羽守松平越中守大坂表御警衛被仰付候間其方儀臨時出張之積を以京都口々之授兵可被心得候尤同所御固之面々可被申合候且又伊勢神宮御警衛之儀茂是迄之通相心得彌御手厚ニ可被申付候

丹 羽 左 京 大 夫

名代 丹 羽 越 前 守

上總國富津御備場御用被仰付立花飛彈守相勤候通相心得諸事嚴重可被申付候尤細川越中守并浦賀奉行可被申合候

松 平 内 藏 頭

大坂表海岸御警衛被仰付諸事嚴重可被申付候持場其外委細之儀ハ土屋采女正承合候様可被致候松平相模守松平土佐守被仰付候條事可被申合候依之安房上總國御備場之儀ハ御免被成候

松 平 出 羽 守

名代 松 平 佐 渡 守

京都御警衛向之儀猶又御手厚ニ被成度旨被仰進候趣も有之候付其方儀も御警衛被仰付候大坂表御警衛之儀ハ御免被成候

松 平 土 佐 守

大坂表海岸御警衛被仰付諸事嚴重可被申付候持場其外之儀者土屋采女正承合候様可被致候松平相模守松平内藏頭も被

仰付候條諸事可被申合候

立 花 飛 驒 守

名代 細 川 玄 蕃 頭

泉州堺表御警衛被仰付候諸事嚴重可被申付候持場其外委細之儀ハ土屋采女正承合候様可被致候松平相模守松平内藏頭も被仰付候條諸事可被申合候

右於御白書院縁類掃部頭老中列座伊賀守申渡之

六月廿一日大老井伊直弼將軍に謁し通商條約調印の顛末を告げ閣老堀田正陸松平忠優の免職太田資始間部詮勝の就職を決す

〔形勢雜記〕（前文は六月廿一日井上岩彌條）

一六月廿一日京都御警衛其外夫々要地防禦御手當被 仰付候ニ而銘々登 城有之則列座ニ而申渡相濟候後掃部頭殿始老若衆退出被致候處御用部屋ニて掃部頭殿之少々氣分惡敷候間聊之間休息致退出可致存候間各方ニ之無御構御退出被在之候様被申聞候付備中守殿始會釋之上退出相濟候上役々も無遠慮退出いたし候様被申聞候其後御用御取次を以 御逢之義奉願則 御直ニ備中守伊賀守取計振并於神奈川調印等迄相濟候次第委細及言上備中守伊賀守御手當之義其外跡加判之列等迄殘ル處去ク 御直ニ御内々申上猶 思召をも相伺都合三度御目通被在之萬端御内用相濟御用部屋に御引戻り備中守伊賀守等明廿二日登 城ニ不及候旨御差圖其外手續相濟候上退出被致候よし誠ニ以御大老の職ニ不耻人跡の事共也

六月廿一日日本藩は江戸に於て藩主急速出馬の制を定む

〔安政五年の觸狀扣〕

〔文久二年迄觸狀扣〕

安 政 五 年

覺

藤木津志馬に

江戸 御側備之儀近年精密之まらぬ致出來候得共先者式正之調候得者急遽之變ニ被應 御出馬之節御差支被爲在間敷
 者難申よつて是迄之まらぬ者式正之 御出陣ニ被備置別ニ急速 御出馬之まらぬ被 仰付度且時勢之變化古今之相
 違不得止時情概略を論候得之方今各國之形勢變革ニ付而者頻年異船渡來種々申立候趣有之 公義ニ茂中古御以來之御
 國典御沿革ニ相成候程ニ而誠ニ危急之御時節共可申哉當時彼を被待候御術寬猛二ツ有之猛ニ被處候得者禍急遽ニ起
 寛ニ被待候得者害遲延いたし可申併定而 廟堂ニ者御卓識有之太平之御良策可有之候得共近年洋外各國戰爭或者清
 國等之事情を以及熟考候得者實ニ夷情難計殊ニ英國之こと此者各國相惡山狗國ト唱既ニ印度地を并吞いたし其他兵革
 を以屬國等ニいたし候々所不少海賊同様之國ニ而近比廣東を奪候由此上者押而平素志願之
 (付札)、唐國戰爭之儀英佛得勝利其末和儀相整依之右戰爭中入費爲價唐國より銀七千貳百万トルラル相渡候筈之約
 定相決漸平和ニ相成候由此節風説書致到着候付爲承知付札用置候事

皇國を茂相親候様成行可申哉茂難計其上當時各國之形勢戰爭を以功利を競候風弊ニ而何時變事起來候哉茂難計且年を
 逐各國彌相開實戰ニ試候軍制器械日新精練いたし 皇國二百年之鎖國天正慶長比之古流之戰法傳聞迄ニ而我昔日之事
 を知て彼ら今日之強をまらぬ其上太平ニ浴候人物ニ付未だ深ク心を盡不致研究候而之實戰ニ臨必勝無覺東孫子ニ茂
 兵者國之大事死生之地存亡之道ト有之候得者誠ニ不易大事可恐理を解いたし候ハ、暫時茂等閑ニ押移候筋ニ之有
 之間敷上下一致ニ本心ニ基變ニ處之良策有之度事ニ候扱又古ハ漢土兵を賦ト唱候ハ軍役を國之物成ト割賦候故之儀ニ
 有之天子を萬乘諸侯を千乘ト申茂田地民戸より兵賦之多少を定萬事之制度を建候舊典有之 皇國之古法茂同様之儀ニ
 而兵之大事たる儀者不及申第一軍國之事出納之計制合不申而茂假令一旦得勝利候共終ニ之國力疲弊自殘之外無之因而
 田賦より割出候儀和漢共古之法制ニ候然處御國之儀といまた其制不委御先蹤ハ先ツ有馬御陣ニ而不日之落城且御隣國
 七里之海程ニ有之其餘之御先例者御記録不委候付當時江戸表千里外行軍之規矩ニ者合兼候有限御米銀ニ候得者初ニ其

制不被建置候而者萬一之事ニ應御米銀盡果可申假令御銀ト有之候共糧道を絶候ハ、看ノ、餓死ト外無之去連平穩中
 其御備十分いたし候儀者御國力之及候處ニ無之因而 御備御人數是迄之まらぬ別紙相添置候通御人數者惣御人數
 之三ヶ一茂無之御米銀之費大造之事ニ而右雜人之ため 上を奉始大切成御人數茂餓ニ及可申左候得者無用之人數者
 盡ク省不申而之難相濟事ニ候且又 上々様御立除ト申而茂萬一之節江戸中動搖いたし候ハ、無頼之者と茂致律徊近在
 長賜差ト唱候惡徒共居候由是等餓ニ臨慮ニ乘し貨財ニ心を懸候歟又者如何成不慮之振舞等いたし可申哉右之御警衛者
 無之而之難叶是茂平素其御備迄ニ之御手ニ及申間敷たとへ被備置候共御潛行間道杯ニ而者糶米相續兼可申左候得者當
 今之時節右變革ニ心付候而之片時茂難安當惑至極候右付而時勢不得止窮策申談候御別冊稜書を以相渡候間附屬之面々
 に茂得斗可被申談置候以上

六月廿一日

稜書(イは相州御
備置一件)

一米と銀と者軍國第一根本必用之重寶ニ有之候處有限物ニ候得者肝要之事ニ用無用之物ニ不費様有之度洋外各國之制た
 とへハ一艘之軍艦千人乗組候得者千人之働人ニ而陸に上候得者銘々數日之食糧なり且着替之衣類等背負兵器茂人々相
 携候得者雜人無用之米錢を費候儀ハ絶而無之由是千里外ニ軍を出候事不難譯ニ付當時兵家之法者雜人甚多別紙御米銀
 まらへ之通餘計之御失費數日御滞陣ニ茂相成候得ハ一切見込付兼申候付無用之雜費被省度事

一當今之勢何時變を生候哉茂難計候得者願曰之御國より御備組被召登御側備且上々様御立除等之御警衛有之候得之安心
 之次第ニ候處御國力限り有之候得者永く接續之見込無之去連如此時節此儘被押移かたく左候得ハ無用之人を減し有用
 之人を被備度是又諸役人等不得止向茂有之省候儀も難相成然處洋外各國一般ニ火器相聞ケ銃陣を以軍制といたし進退
 離合自在之勢を爲し未タ劍槍之場ニ不至内被か長技ニ誤候儀深可恐事ニ候依之諸役間之御役人茂平素御用之鐵炮稽古
 いたし萬一之節ハ内役も相働且第一上々様御立除之節御一部ノ、鐵炮を相携御警衛中上度壯年帶刀之族ハ下役より共

安政五年

一七九

兼而鐵炮修業いたし候様有之度事

但御家中家來ノ歩若黨ニ至迄兼而鐵炮稽古いたし萬一之節御用ニ相立候様心懸專用之事

一御宿陣之節御格之通御陣營懸方者勿論之儀ニ候得共警ハ相州に急連之御出陣等之節ハ御途中寺院職又者名主等之居宅に被遊御一宿惣御供者民家等ニ止宿いたし鎌倉寺院職大津御陣屋に被爲入候ニ而可有之敵合次第御都合懸敷候ハ、御陣營懸方可被仰付左候得ハ御作事手之御用者少々猶豫有之候付一日二日も御跡より可被差立哉萬一非常之事も起り候ハ、臨時之見切踏越等も可有之事

一無用之雜人雜具相省有用之内ニも寬急可有之急連之節ハ急成有用を主ニハムし寬成有用ハ跡ニ廻候様有之度小荷駄持夫等兼而御手當ニ相成居候得其他所者之儀ニ付餘計之人數急連駈付候儀無覺東既ニ本牧出張之節持夫摘兼候儀も有之候間旁以連人持夫とも可成丈省減いたし御側御物よりとも寬成物者翌日ニも可被差越哉左候得者寬急をまるし御物を御物奉行に引渡御物者願曰御手人より持運候様有之度事

但御家中も右ニ準し銘々名札ニ寬急を記置御物奉行に引渡可申事

一上々様御立除之儀ハ別紙まらへを土臺いたし是亦寬急を分寬成物者御跡仕廻之役々より引廻御跡を可奉慕事

但惣御女中者右御跡仕廻之役々より可致世話事

一御人數者少しニ而も多有之度ハ素より之事ニ候得共御國力限有之且不熟之生兵多よりも訓練之精兵少キ方却而勝を候理も可有之哉御在合之詰込ニ而彌以平素訓練有之軍制兵器和漢時勢ニ隨ひ變化有之洋外各國ハ日及逐實戰ニ試軍制火器等彌相聞ケ候事ニ付彼を知己を知之教ニ從ひ時々變化ニ應し軍制器械も漸を以折衷有之度事

但事變ニ應候而ハ御國許ハ御人數被召呼候儀者勿論之儀候得共平素ハ難被及御手候付本文之通有之度事

一火繩筒と雷擊銃との利用比較いたし候得ハ當時迄古流之筒短寸ニ而第一彈力遠近強弱大ニ異り強雨烈風之節者火繩筒者無用之器と相成且敵對ニ相成候得ハ晝夜火を付置候事ニ付足輕共迄用候火繩且持人等費用夥敷惣軍時勢ニ隨ひ炮器

を携候得ハ莫太之費用別紙之通ニ而万一急雨或者波川等ニ而濡候得者無用ニ相成候付旁手當見込も無之候付彌以雷擊銃を用度事

但御側備大炮之儀當時迄火繩ニ而火門ニ吹込を用來候處各國之野戰ニ者雷粉管を用亞國獻貢ホフト忽徹礮を被用度專ら人足之力を頼候器者得斗實用經驗有之度事

一御長柄之儀現實訓練ニ試足手繩レニ相成候付實戰ニ臨利用如何可有之哉鈴録ニ據候得者長柄者織田氏より始候兵器ニ而實者甲越等之古制ニ者無之よし相聞江戸ニ而之御人少ニ付御長柄之ものニ鐵炮を打せ且此隊ニ限是非劍付銃持せ候ハ、時ニ臨觸並まをま之形も出來兩様之利方も可有之哉先御長柄之者鐵炮稽古いたし候様有之度事

但右者堀内彈右衛門茂同意之儀ニ有之且御長柄之者ハ内藏等いたし候由ニ而稽古いたし候ハ、少々ハ筋を付被下候様之御仕法茂可有之哉之事

御出馬之節御惣御人數

一六百八拾四人 帶刀以上惣御人數

一五拾五人 諸間御役人

一四百四拾九人 銘々手人

一貳百九拾壹人 御手廻並荒仕子等

一 千五拾五人 御家中御借人 並御用物持夫

一 三百七拾六人 玉藥火繩等 日數十日分持夫

但此内九拾壹人者鐵炮壹挺ニ付一日火繩貳曲宛ノ十

六月

日分持夫「火繩數一萬五千六百三十曲」

ノ貳千九百拾人

一金七千五百五拾五兩

俱右貳稜之夫賃日數十日分

一米貳百九拾壹石

但惣御人數日數十日分飯米

以上

六月廿二日幕府米國と修交通商條約締結の旨を發表す

〔神庫文書密書三百七十二〕 (夷事輯錄、安津)

尙以御同苗右京大夫様に者別段不申上候間早々御國元に御送り方ニ相成候様御取計可被下候
今日於營中久世大和守と相達之書付寫御廻し申上候御落手之段可被仰聞候且又存念無之向者其段可申上哉藤堂和泉守
と田村伊豫守に相尋候處久世大和守に伺候處存念有之向者早々差出可申左も無之向者別段申出ニ不及段申聞候右爲御
心得申進候以上

六月廿二日

松平内藏頭

細川越中守様

(ソテニ張紙)
大廣間 席に

亞墨利加條約之次第朝廷に御伺ニ相成候處深く被爲惱 叡慮候御次第被仰進候段御尤之御儀ニ付再應各赤心御尋ニ相
成今少しニ而存意書も相揃候間其上篤々御勘考之上御決定可被遊思召ニ而精々御差急き被爲在候折柄今度魯亞兩國之
船渡來申立候趣者英佛之軍艦近日渡來可致尤清國ニ十分打勝其勢ニ乘し押懸候事ニ付應接方甚御面倒ニ可相成御案
思申上候併假條約之通御承知ニ相成調印も相濟候ハ、英佛に者如何様ニ茂申論御迷惑ニ相成不申様取計可申旨亞國使
節申立候ニ付御勘考被遊候處如何程御迷惑ニ相成候とも朝廷に御申立濟ニ相成不申候而者御取計難被遊御儀乍去忽爭
端を開萬一清國之覆轍を踐候様之義出來候而者不容易御儀ニ付井上信濃守岩瀬肥後守於神奈川調印致し使節に相渡候
誠ニ無御據御場合ニ付右様之御取計ニ者相成候得共朝廷ニ而御配慮之段者實以御尤之御儀ニ付此後之御取計方沿海御
手當等充實ニ相成被爲安 叡慮候様可被遊思召ニ候此度之御一條不取敢宿次奉書を以京都に被仰進委細之儀者追々被
仰進候事ニ候此後之御所置ニ付考意も有之向者無腹藏可被申聞候事(條約文は六月十
九日の條に出つ)

(夷事輯錄本文書ノ奥ニ「但堀田伊豫様は不決ニ而御登城候之」トアリ又本文ノ末ニ「以上」六月廿一日御老中加判トアリ)

〔形勢雜記〕 (前文は六月廿一日の條に出つ)

一六月廿二日前文於神奈川假條約調印相濟候次第京都表にも被 仰上候趣在府諸大名にも掃部頭殿一同列座ニ而申渡達
有之以後御内談被有之候付夜四半時頃迄諸向退出無之由

六月廿三日幕府閣老久世廣周に建儲係を命ず

〔御養君一途〕

六月廿三日

久世大和守

御養君御用掛

右於奥相濟

六月廿三日幕府太田資始間部詮勝松平乘全を老中に任じ老中堀田正陸同松平忠優の職を免ず

〔嘉永七年風説帳〕

一午六月廿三日御沙汰書之内書拔江戸表方差廻來候事

御座間

太田道醇

間部下總守

松平和泉守

堀田備中守

名代松平因幡守

加判之列
右於御前被仰付之

松平伊賀守
名代松平信濃守

思食有之ニ付御役御免帝鑑之間席被仰付之
右於御黒書院溜掃部頭老中列座大和守申渡之

太田道醇

御役相勤候内年々三萬俵ツ、被下之
右於奥相濟

太田道醇

外國御用御取扱

間部下總守

御勝手懸り

右於御前被仰付之

(備考) 太田道醇備後守と改名す

〔夷事輯録〕(午ノ九月十四日附)

一堀田様伊賀様御退役之儀ハ別紙相添に置候通外國一件御取扱中内場唱も有之又者 御養君之事申唱も右之堀田様御上京迄之一圖ニ御血統之 紀州様御願望之所御歸府後小石川方段々御手廻り當今之御時勢御幼年ニ而ハ無覺束一橋様御定被爲成度との儀ニ御泥ミ 京都に之紀州様一橋様と御兩所様を早打御伺ニ相成順之通思召不被爲在との趣ニ速ニ勅答爲被在を堀田様御手許ニ御押へ被成置候之御兩繁ニ而京都方之飛脚川支延着之振ニ御押移日數を経候ニ付尙又江戸方早打御催促之飛脚相立候而疾勅答之趣相達候儀相分り候ニ付掃部頭様方相滞居候趣堀田様に御察討ニ相成候

處其御 御養君之儀區々之論評ニて相決不申若御幼稚ニ而無心元方ニも評決ニ相成候而ハ 勅答之趣相違致し候間評決を相待御差出之積ニ被成御座候由御返答ニ相成候處其御取計之御一己之御處分候哉と御尋之處伊賀守申談取計候段御返答ニ付忽 思召之旨を以御役御免堀田様ハ御席下を茂被 仰付候哉之趣ニ茂相聞申候へ共兩條いつとも實否相分り兼候ニ付兩様相認メ置申候(以下は七月朔日の條に出つ)

〔全書〕

堀田伊賀兩公御退役ニ付御三方御老中被仰付候内太田様ハ珍敷事ニ而御隱居之御老中稀成事と奉存候尤御澤之時分小笠原様御隱居ニ而御老中被蒙 仰候由此御方畢付御燒棄被成候由其節ハ一万俵拜領之由此節ハ三萬俵無類之由且堀田様伊賀様杯ハ昨日一日御引入候付直ニ御役御免是以珍敷事ニ而此末如何程之儀可有之哉不叶ふら心痛仕居申候御事柄少しも相分不申候へ共何職一方ふらさる御立腹井伊侯の事之御儀被爲在候ニ付而之御事之由迄相唱申候(此件につき一日附吉田平之助提出の書取寫を参照せよ)

六月廿四日幕府閣老太田資始間部詮勝に外國事務取扱を命せし旨を達す

〔御同席觸寫大目付様御廻狀寫扣〕

安政五年筆記萬延元年九月迄

久世大和守殿六月廿四日同席觸

大 目 付 に
道醇下總守事外國御用取扱被 仰付候其段向々に可被達候

六月

覺

外國御用取扱月番之御用向當分道醇相心得候事

安 政 五 年

覺

太田 備前守

右名改候事

六月廿四日水戸齊昭父子尾張慶恕及び松平慶永違勅調印の事を以て大老井伊直弼を詰責せんが爲めに不時登城す

〔夷事輯録〕 江戸來狀（日附なきも七月頃のものならん）

外國御取扱 京都に御伺之一條諸侯方之内ニ茂御異服之向多 御同意被在候而ハ不宜趣水府老公御初御同心之御方杯より裏通りニ而内々京都に御文通有之候ニ付初發ハ無御異儀 勅答可被 仰出御模様之處俄ニ御様子打替候若關東方御目放ニ相成候而茂大諸侯之内ニハ一味有志之御向數多有之聊御頓着ニ不及趣を以殊之外六ヶ敷相成加之御時勢柄ニ付公儀御養君之儀も急ニ御定ニ相成候様被 仰出是又水府老公上御手廻り一橋様に御乗出ニ相成度との御内望之由被是内輪之御密策及露洩右役係り之御役人方を初追々御退役等被 仰付哉之由廿四日之御登城之至而差向候而之御發ト相見前以御伺茂無之當朝尾州様御乗切ニ而水府様に被爲入夫方直ニ御同道御登城掃部頭様に御逢度々被仰込候へ共御用繁ニ而御延引之御挨拶有之既老侯余程之御指撥ニ而御喘キ被成候得共御應對無之其内 御養君御弘ノ之御手數外向御觸達之儀迄夫々御仕舞之上漸八半時過ニ相成御應對ニ相成初發掃部頭様御伺被成度儀御座候ハ、今日之御登城御沙汰も無之殊ニ前以御伺茂無之御推參被爲成候儀ハ如何様之御心得ニ被爲在候哉ト御尋ニ相成候處此儀ハ不容易御事ニ付御目通御直ニ被 仰上候上御沙汰可有之候間早々 御目見被仰 付候様取計可申旨被 仰聞候處掃部頭様方乍俣推察仕候處此節外國御取扱之一條ニ付御不安意之儀を可被仰上思召ト奉存候右之儀御座候得之最早見も角も御條約御取結御調印迄も相濟申候上之儀ニ而今更被 仰上候速 御變約者難相成追々ト機ニ臨御不益筋之儀者其節ニ至り御斷

切ニ而何之子細も無之又可然筋ハ性々御取行ニ茂可相成哉既兵端を聞候際ニ至り御許容ニ相成候而者御國耻者申迄も無之候得共今渠カ尋常ニ希候處之物時勢ニ候處一旦被 仰出事空論を以假初ニ御違約ニ相成候而ハ以來天下之御政道ハ相立申間敷殊更戰爭之基ニ茂相成御役人共手ニ余り急迫之場ニ茂至り候ハ、素方御勝手ニ御登 城御爲筋被 仰上候ハ勿論之事ニ付其節之是方も思召奉伺候様可仕候得共御政休者御委任と申存不肖執權職も被仰付置專取扱中之儀ニ茂御座候間今何程異船渡來候とも分外之御方々様左迄御頓着被爲成場合とも不奉存不時御登城者前日御伺之上御沙汰ニ被應候儀御舊格ニ候を右之通 御歴々様御推參被爲在候而者差寄大勢之御役人共何事哉ト色を變驚愕仕候夫等之響方ハ天下一統之人氣動搖ニ相拘り不容易事ニ成行可申旁得斗御助考被爲在度旨被 仰上候處此節御觸達ニ御調印之儀差寄御奉書を以 京都に被仰上候趣相見右者不容易事御國制を被改候儀ニ付屹トいたし候御使者を以被 仰向度水府老侯方御沙汰之處追而ハ御使者も被差越候管ト申儀者御觸達ニ茂有之候通ニ而是等之儀も精々評議相伺候上緩急ニ隨相應之御下知可被爲在候間御心遣無之様ト職御受答ニ相成候處尾州様方御目見願ハ右迄之儀ニも無之當今不容易之御時勢 御養君御幼年之御方々ニ而ハ甚無心元外ニ御親類相應御年齢之御方も有之事ニ付人心安着致し候様之御人休ニ御定被遊候様有御座度其儀も御直ニ被 仰上度被仰聞候處最早紀州様ニ御定被遊既ニ明日御弘ノ之管ニ候段御返答ニ相成候處右之通ニ而ハ彌以御不安意ニ付明日御弘ノ之處御延引被遊候様有之度被 仰聞候處一統之御觸達も夫々仕出相濟何も思召之儀ニ御座候へ者今更可致方無之段御答ニ相成此儀ニ付而も尙御伺被成度儀御座候ハ、全体御血脉之儀ハ 神君御已來之思召ニ而先御願統被爲立候儀第一之御主意則 御幼稚等之御方被爲在萬事御不行届之儀御補佐被爲成候之水戸侯之御家筋ニ而御願統も無御構御定ニ相成候ハ、御補佐之御家ハ御無用ト申物ニてたとへ御願統を被閣御年齢御人才を以御定之儀思召被立候共屹ト御辭退ニ可相成儀御當然職ト奉存候其上右様不容易儀を被 仰上儀ニ御座候ハ、誰茂存不申様極御忍ニ而平川口方御登 城奥通ニ而御直ニ御諫言被爲成候儀御職掌職ト奉存候處重キ御格合ニ拘候儀も無構押而表より御登城異々敷被仰上候思召之儀乍俣御忠節ハ却而 台徳を御欠被爲成候形ニ相當被是掃部頭

ニおつてハ一圓難得其意自然 御日見之譯御尋ニ至申譯無御座候ニ付何分難奉伺其上昨今御不例ニも被爲在迎も 御日見之難被爲叶奉存候右兩條御爲筋深思召候一段之御家柄之儀と申改申上候迄も無之重疊御尤之儀ニて掃部頭も服心之御家來筋代々別段之 御鴻恩を奉蒙御爲筋ニ存候儀之乍譯御同然ニ而決而私情偏顧之取計者不仕候間其段ハ御安心被爲成下候而先今日之處ハ御退出被爲成候様有御座度被仰候處其儘御詰席ニ御引取之上越前守に者不時之無御伺御登城之段如何御心得被成候哉ト大目附様を以御察討有之候處恐入候儀ト思召御身分御伺有之候處先夫ニ不被及との御差圖ニ而御退出ニ相成候哉之趣ニ御座候

〔形勢雜記〕 (前文は六月廿二日の條に出つ)

一外國御取扱振ニ付六月廿四日水戸中納言殿尾張中納言殿水戸前中納言殿田安中納言殿徳川刑部卿殿等登 城掃部頭殿始老若衆其外役々談判有之 戊午六月下院密寫之

〔夷事輯録〕 (午ノ九月十四日附江戸來狀の一節)

一老公尾公押而登城之儀ハ一言西城之儀ニ不被及調印一許之事ニ而右之井伊侯之其座ニ而ハ一言も無之由然ニ江戸醉狂之輩ハ全く西ノ丸之儀ニ而御三家共ニ井伊侯カ一言もなく遣込ニ相成其末越前殿者何故ニ登城そやと井伊侯大音ニ而殿中響キ渡り候様ニ呼々れ候杯様々之滿言も御座候是等都而醉狂之中事の由 一京都邊に老公之御書付とて段々徘徊致し候之奸邪之手カ出候ニ而も可有之候へとも水戸の内カ社家本と慷慨家之思慮ふき面々々段々擬書いたし候由ニ而於水戸ハ大ニ御迷惑ニ相成居候由相違も無之事ニ相聞申候午ノ九月十四日

〔全書〕 江戸來狀(不附)

六月上旬書表約條調印ニ付三親藩御申合ニ而御登城ニ而御大老御應接被成度御申入之處井伊侯太田侯御應接ニ相成候

尾水ニ藩御間ニ外國調印ニ而者如何御處置ニ相成候成承度井伊侯答ニ日本者小國也四海萬國を引受獨立難成被野心有ニならず因而調印候との趣尾水ニ侯忽御忿激ニ相成 天朝之 報慮も永世長久後患無之様との御沙汰追々有之御重職征夷之大任を相穢 天朝之 報慮も不被爲叶是違 勅ト云もの也違 勅ハ朝敵也 天朝之命を奉るハ徳川家之任也此儀誓而御沙汰戻り有之度此段御直訴可申上と其座を御立被成候處公方様ニ者御不例之趣ニ而御對顔難叶深更迄御激論相成候との事又越前侯ハ欄欄君を一橋侯に御讓被成度當時英名も有之天下望を屬する所也此不容易時節ニ當て纒ニ二三歳之幼君を立て如何して天下ニ指揮せむ哉ト深更迄御論判ニ相成其後思召有之三親藩直ニ押隠居被仰付其罪狀不分明ニ方て尾水ニ家十人二十人中合御大老井伊侯へ主人之罪を問顯明被仰付度井伊侯に伺之爲江戸表へ赴候由方今不容易時節變態難測ニよりて彦根侯城中普請有之候其詞ハ京都之地至而御手薄一旦變故も於有之ハ守護も出來兼候間此城を修覆いたし置 今上を此城中ニ奉守護との由實ハ奉禁固計策ニ而此後ハ大老職カ京都御固メ之由京大阪江戸三都之中ニ而政事之得失衷情を唱候者凡て貴賤ニ不限幕府より問者を出して悉く束縛被致候由己ニ江戸之中ニて夷情天下之事を論る者五人を擲獄屋ニ下し候由其姦謀ハ水野土佐守より役人ニ申付いたし候由(本書双方姓名缺く)

六月廿四日土佐藩主松平豊信書を本藩主齊護に贈り米國と通商條約締結につき大老井伊直弼への建議に加盟せんことを勤告す齊護辭して應せず

〔江戸自筆狀〕

一筆呈啓仕候御剛健奉雀躍候然ハ別番建自今日伊達遠州方ニ而藤堂泉州井小生三人面會之上明日大老職に迄差出可申と決シ申候諸君御同意ニ御座候ハ、御連名可被成萬一御不同意御座候ハ、藤堂に御掛合可被成奉存候御名順之通早々御廻シ當夜中留り之御方カ藤堂へ迄御返投可被成候也致具

念四

細川 越中 様
松平 内藏 様
上杉 彈正 様
松平 安藝 様

松平 土佐

机下

此度御渡之書而篤く致拜見候所調印之義、於而ハ時勢不得止トハ奉存候得共前以朝廷に被仰上無之段御違勅之筋ニ相成乍憚難奉承伏責而ハ此已後被爲安寂慮候御所置迅速ニ御施行有御座度奉存候存意迄有之候得バ申上候様御沙汰ニ候得共追々建白仕候事故此外申上候義ハ無之候已上

月 日 (六月廿四日)

御返書

御廻章拜見仕候愈御安全奉恭賀候然之一昨日御達之趣付而今日伊達遠州方ニテ藤堂泉州貴兄御三方御申談之上明日大老威に被差出候答之御別紙被成御指廻御連名ニ相加候様萬一不同意ニ候ハ、藤堂に懸合候様委細御書付而之趣共夫々致承知候然處外夷一件付而之追々存意之趣建白仕置候事ニ而猶又此節申立候筋無之今度之御達付而之於殿中藤堂より田村伊豫へ相尋候處久世に伺候へハ存意有之面々ハ早々差出可申左も無之面々ハ別段申出ニ不及段申聞候由松内藏頭ハ通達有之其通相心得此節建白不仕含決議仕居候間御連名之所ハ御省被下度尤右之趣ハ藤堂にも申向候様可仕候御回章並御別紙共岡山に致願達候不具(此件につきては七月十一日附吉田平之助提出の書取寫を参照せよ)

六月廿五日紀伊宰相慶福將軍家定の嗣子となる

〔御養君一途〕

六月廿五日

御座間

紀伊宰相殿

〔全書〕

右 御對顔御養君被 仰出之御刀長光 代金貳百枚 御脇差來國光 代金百五十枚 被進之

久世大和守殿御渡候御書付寫五通相達候間被得其意御同列中并御嫡子方に茂不殘様無遅滞早々可有通達候答之儀者先々銘々不及挨拶各より遠山隼人正方に可被申聞候以上

六月廿五日

大目付

細川 越中 守殿
藤堂 和泉 守殿

右留守居

大目付に

御養君様御事 宰相様と奉稱候 御殿西丸ニ被 仰出當分 御本丸ニ御逗留被遊候 右之通可被相觸候

六月廿五日(外四通は之を略す)

六月廿七日通商條約調印に關する幕府の宿次奉書朝廷に達す尋て三家大老の中一人上京すべしとの勅命あり

安政五年

〔風説書等〕

午六月廿一日奉書廿六日相違廿七日披露御達左之通
去ル廿一日老中奉書を以 言上之儀ニ付三家并大老之内早々上京有之候様被 遊度旨 大樹公に被 仰進候事
此御書付八月六日宿繼着之由

六月廿七日關老久世廣周外國御用取扱を命せらる

〔安政五年筆起延元九月迄
御同席觸寫大目付様御廻狀寫控〕

紀伊守殿御渡六月廿七日

大 目 付に

大和守事外國御用取扱備後守下總守申合可相勤旨被 仰付候其段向々に可被達候

六月

六月廿九日幕府御勝手及び外國御用係三老中の月番を定む

〔安政五年筆起延元九月迄
御同席觸寫大目付様御廻狀寫控〕

六月廿九日久世大和守渡

覺

御勝手並外國御用筋之儀備後守下總守大和守月番を立取扱候間向々諸伺諸届等其心得ニ而差出可申候尤御勝手外國御
用共來月者備後守八月者下總守九月者大和守月番相心得候事

六月廿九日

右之通向々に可相達候事

七月朔日幕府奥右筆頭志賀金八郎勅書隱匿の責を負ひて自殺す

〔夷事輯録〕 (江戸來狀、前文は六
月廿三日の條に出つ)

扱又奥御右筆組頭志賀金八郎様去ル朔日之夜切腹之唱有之儀も前文 勅答之御書付堀田様御列御差圖ニ而手元ニ御留
置之儀相願候處方職又御三家方之内森計筋之事御大老御老中方に悉言上ニ相成候儘切腹有之忠義之儀も申唱も御座
候何共是以兩様事實得斗相分兼申候其外去ル六日若年寄本郷丹後守様御側衆石川土佐守様も思召ニ付御役御免ニ相成
是も 御養君之御事職之様ニ相唱候得共如何可有御座哉

〔公書〕 (午ノ九月十四日附
江戸來狀の一節)

一御右筆組頭志賀金八郎殿三藩之御辭令被仰付候處右ハ宜るる間敷と書付指上直ニ切腹と申儀實事ニ而候哉之事
此儀實事ニ相違も無之由俗説ニハ西丸之一橋紀州兩様ニ御伺ニ相成候處京都方紀州之御付紙ニ相成候然處ニ紀州ニ
而之連も天下治り中間敷と堀田侯右之御付紙を御押付ニ而志賀殿へ先ツ御預被置候由然る處其事跡達而露顯いたし無
申譯切腹ニ相成候との儀世上ニ申觸候是ハ土臺空言ニ而奸邪之流言と相聞へ候 (此件につきては七月十一日附吉田
七月二日幕府は露國使節に登營を許可せし旨を達す (平之助提出の書取寫を參照せよ))

〔尊攘錄皇武令〕

今度神奈川表に渡來之魯西亞使節出府登城拜禮被仰付候筈ニ候此段爲心得相達候
右之通向々に可被相觸候

七月二日也

今般魯西亞使節參府ニ付通行道筋屋敷々々立番差出ニ不及往來之者も平常之通通行爲致尤往來混雜之儀も有之候ハ、
取締出役之者より辻番所に申達制方爲致可申候其餘先達而亞米利加使節和蘭領事官出府之節相達候通可被心得候

安 政 五 年

右之通向々に可被相觸候

七月二日也

七月三日長岡監物書を西郷吉兵衛に贈り將軍建儲のこと及び長岡護美の輔導横井所説の取捨に關する所見をのぶ

〔先哲遺翰〕 (子爵米田家藏)

小子ハ別而文字ニ拙く無筆ニ近くうそ字あて字も可有之御推覽可被下候以上

一書拜呈先々頃日ハ久々ニ得拜話大慶不少候其後御旅中愈々御安健敬賀仕候暑中と云至急之御旅行別而御氣削と存候擬御密話ニ而方今之形勢能相分り疑霧ハ散候得共一段之愁を増朝暮案勞罷在候其節も御話合申候通事今日ニ迫り候而ハ所詮非常之處置ニ無之候へハ難救候處堀田侯杯善類ニ而ハ可有之候得共其器ニあらざればたし方も無御座只々祈候處ハ愈以越候爲天下御志を被勵此上ハ西城之一條天下安危存亡之機ある事列侯方に一々被仰談列侯舉而閣老に御願ニ相成閣老承引無之候ハ、御直ニ御願と申迄御力を被盡度固り紀州ニ落着いたし候へハ天下之大變ニ而方今越候なくんバ無力候へ共幸ニ越候乍被爲在一橋侯を不被得立してハ遺憾不淺而已職天下萬世其責を御免れ難相成儀と存候難治之病夫も醫之匕を投候ハ絶命之後ニ可有之一息存候間ハ是非治療之術を不可有不盡草野之微臣爲天下越候ニ奉祈候ハ右一條ニ而御座候此書御地ニ相達候迄事落着ニ不至候ハ、橋本に御話合可被下候勿論釋迦ニ説法たる儀ハ辨へ居候へ共身西國ニあつて獨り憂愁煩悶ニ堪兼候心情を盡し過言之罪を免し吳候様橋本に幾重ニも宜御頼申上候

一拜話之節申述置候都築四郎出府いたし候ニ付此書狀も託し候事ニ御座候此者ハ氣慨ある者ニ而物頭之長ニ而御坐候いさゝか御心を被置候儀ハ無之候尤少し淺露ニ御坐候間機密之事ハ御話し度ニ漏し不申様御一言とまぐさハ御打可被下候左御座候へハ其處ハ堅固ニ相守り決而氣遣無之候

一弊藩ニキマレ川に長子ニ被登居候公子有故被方引取ニ相成當夏世子一同歸國被致候此人ハ讀書茂出來頗る英明之主

相見御地發見前ニハ遺候御文章杯御覽りニ相成是も御答ニ文章被差出候由ニ御坐候天資ハ先非常とも可申候へ共弊藩當時之勢ニ而ハ輔導二人を得候杯申事も難成小子手を出候へハ愈以不宜誠ニ四居申候事ニ御座候因而是又越候方有折御書翰ニ而も被下候而志を御引立ニ相成自己と憤發被致輔導二人を得度儀を初めとして人才ニ近ゾキ彼是講習討論も有之度筋等直と幕君に軟弱被致候様之筋ニこび申度候夫等之意味越候能々御含被下候而漸々と御教示被下度奉懇祈候決而事を急迫ニ被成下候而ハ不宜右等之義も橋本迄不惡様御話合可被下候

一横井事ハ御時ニ而先ハ安心ニし候道々同人ノ同志之者に申越候趣を承候へハ誠ニ越藩ニ而非常之御取扱御懇篤之至於小子も深く難有奉存候段も吳々橋本に御傳聲御頼申候諸生教導を被任候儀ハ一旦ハ興起可致候へ共後年弊害ハ生じ可申候夫も君侯其説を御聞被成候而御取捨被爲在候ハ、必大ニ御有益も御坐候之んと相考申候非常之活見有之男ニ而是其人第一之長所ニ而御座候右等之事も御序ニハ橋本に御話し可被下候

七月三日

長

岡 拜

西 郷 君

尚例之亂毫御免可被下候以上

七月四日露國使節布恬廷江戸に着す

〔御同席觸寫大目付様御廻狀寫控〕

一左之御同席觸寫七月三日御留守居方被差出

久世大和守殿御渡候御書付寫登通相達候間被得其意御同列中並御嫡子方に茂不殘様無延滞早々可有通達候答之儀之先々從銘々不及挨拶各山口丹波守方に可被中間候以上

安 政 五 年

七月三日

細川 越中 守 殿
藤堂 和泉 守 殿
右 留 守 居

大 目 付

魯西亞使節明四日江戸着之事

七月三日

〔安津免久佐〕〔安政五年七月江戸〕
來狀之寫の一節〕

一亞墨利加魯西亞兩國之船六月初旬渡來ハムし候處近年願出候交易商館等之儀御免ニ相成調印於加奈川受取直々出帆仕候委細ハ別紙之通ニ御座候魯人ハ今以神奈川に碇泊仕四五日頃ニ使節初十人ハ江戸表ニ参り愛宕下何とか申寺に被差置近日登城仕候由ニ而江戸市中所々徘徊仕既ニ今日ハ辰ノ口御門前通行仕申候

七月四日英國使節ロード、エルチン修交通商條約締結の爲め軍艦三隻を率ゐて品海に入る

〔尊攘錄皇武令〕

大 目 付に

英吉利國之軍艦三艘昨四日品川沖に致入津候右者使節を差越し和親貿易之條約江戸ニおゐて爲取替致旨申立候ニ付役々出張追々應接之積ニ候此段爲心得相達候

七月五日

〔安津免久佐〕〔七月江戸來狀之寫露
使節府の條につゞく〕

イキリスも去ル四日四艘品川沖乘入當時御臺場之方に碇泊仕居申候是又近々上陸いたし可申跡船も五六艘参り可申との事ニ而いつを御難題奉願候事と相見に申候今迄ハ至而平穩ニ而一向御受場ニも御人數被差出候事も無御座候江戸中も大分異人ニホま合候故職異船ニハ格別恐を不申至而靜成事ニ御座候

七月五日水戸齊昭尾張慶恕及び松平慶永隠居謹慎を命せらる

〔安政五年四月
萬延元年六月迄御録記〕

七月五日夕七ツ五厘前御用番内藤紀伊守様より左之御封書御徒目附を以被差越御留守居吉田平之助受取之被差出御請文受取罷歸候管之所外様にも參候付御罷出可受取段御徒目附申述引取候由口達有之御切紙ニ而八折くる〔卷也〕申談儀候間只今早々可有登 越候以上

七月五日

細川 越中 守 殿

内 藤 紀 伊 守

右御封書早速差上 御請文左之通出来御用人御代見無程御徒目附受取として罷出候付平之助より引渡候

御封書致拜見候被仰談儀御座候間只今早々登 城可仕旨被仰下奉畏候恐惶謹言

七月五日

内 藤 紀 伊 守 様

細 川 越 中 守

一右ニ付即刻之御供揃ニ而 御登 城七半過 被遊候處段々及深更候而於御黒書院溜御大老井伊掃部頭様御用番内藤紀伊守様等御非番様方御列座久世大和守様ハ其外大目付様等御侍座松平讃岐守様御初御願々御出席此方様茂被遊 御出席候

安 政 五 年

一九七

處紀伊守様より今晚申談之儀之追付以書付相渡可申旨御演達有之一ト先御願々御退座猶又無程御列座等最前之通ニ而御登城ニ付而於御城御届之 御名札如左相認御用人入被見御留守居に相渡

大長半切
幅三寸計
小紙假包

依御連登
細川越中守

松平左京大夫様御列
松平讚岐守様御一列切
此方様
大目附 阿部伊豫守様
山口丹波守様

右御出席紀伊守様左之御書付御渡有之御請取 一通り御請之御 御退座 振替寫在たる御

松平越前守

思召御旨も被 爲在候ニ付隠居被 仰付之候急度備可罷在候

左之御書付茂右之御書付と一結して此方様に御渡

松平日向家老共

松平越前守儀隠居急度備可罷在旨被仰付之松平日向守に家督相續之儀被仰出候處日向守事未年若之事ニも有之家柄之儀ニ候得之家老共申合万端相候諸事入念可申付候

一右相濟 御退座之上御大老様御老中様々大目付様を以段々御内意之趣有之
越前守様御病強近來之別而御平常ニ無御座御様子ニ付甚御氣遣敷重疊御心附被遊何卒神妙ニ御慎ニ相成候様彌御懸念之趣等々御傳達有之たる御様子也

曉八時頃 御退出直ニ越前様は御先立而御供之御留守御家内ニ參候筈之處越前様御使御 阿部伊豫守様 福山侯也越前守大目附山口丹波守様御同道 御出被仰渡之趣被仰達御書付御渡御請茂相濟翌朝六時少過被遊 御歸殿候

但越前様は御出之上先御家老福山城 御日通申上候付御内意被仰合越前守様は茂御達被仰入候處御病氣之由ニ而御斷ニ相成候得共是非とも被遊御逢度猶被仰入無程 御對面段々御配慮之趣御諭し被遊候處最初之少し御口茂こゝく被爲在候得共被成御了解候哉體而御納得之御挨拶有之はとふく奥に御入被成候左候而表向御列座ニ而御達被遊候節ハ御病氣之被仰立ニ而御名代御家老奉拜承御請茂御家老を以被仰上候由

御請

一太守様御持歸被遊候御請書左之通
思召御旨茂被爲 在候ニ付隠居被 仰付急度相候罷在候様恐入奉畏候家相續之儀者同姓日向守に被 仰付難有奉存候此段御請申上候様越前守申聞候

右一通

越前守儀中暑下痢其上眩暈氣罷在押而茂出勤難仕ニ付以名代御請奉申上候

七月五日

松平越前守内
大道寺七右衛門

右大道寺書付如左認取差上聖朝内藤様は被遊御持參候

越前守御請之趣別番書取を以申上候通ニ御座候然處同人儀中暑下痢其上眩暈氣罷在押而茂難罷出名代ニ而御請相達申候事

〔同書〕

左之書付御坊主より差遣

一昨五日夜於 御城被仰渡并御列座左之通於御黒書院
松溜被仰渡

御列座
掃部頭殿
被仰渡 紀伊守殿
備後守殿

安政五年

一九九

下總守殿
和泉守殿
御奏者番
水野周防守
大目付
池田播摩守
遠山隼人正
田村伊豫守

右一通

御目付
鈴木四郎左衛門
繰出し
神保伯耆守
差引
黒川左中

七月五日

松平左京大夫
松平肥後守
丹羽左京大夫
名代丹羽越前守

尾張中納言殿御事思召御旨茂被爲 在候ニ付御隠居被 仰出外山屋敷ニ居住穩便ニ急度御慎可被在之候尾州家相續
之儀之松平攝津守ニ被仰付候此段左京大夫松平肥後守丹羽越前守相越尾張中納言殿ニ可相達旨御意ニ候
右於御黒書院御下段掃部頭老中列座紀伊守申渡之書付相渡之
別段達

中納言殿急連外山屋敷ニ被引移候様可被取計候且又中納言殿御近親之面々其外總而書通往復等無之様家老共始に急
度可申達との 御沙汰ニ候條取締方厚ク心附候様可被致候

一萬事攝津守殿竹腰兵部少輔成瀬軍人正無遠慮相伺宜様可被取計候
右之趣家老共ニ可申聞候
同斷

市ヶ谷屋鋪ニ被相越中納言殿に不及面談被仰出之趣竹腰兵部少輔成瀬軍人正其外家老共ニ被申含可相達之由被申聞
書付兵部少輔軍人正に可被相渡候御請茂右之者共罷出申達旨ニ候
一御請之儀之深更ニも可及候間三人共明朝登城之上可被申聞候

松平讚岐守
松平大學頭
松平播磨守

水戸前中納言殿事 思召御旨も被爲在候ニ付駒込屋敷に居住穩便ニ急度御慎被 仰出之右者兼々中納言殿御心添可
被成處御不念ニ 思召候此段松平讚岐守松平大學頭松平播磨守相越前中納言殿に可相達旨御意ニ候
別段達

水戸前中納言殿急連駒込屋敷に被引移候様可被取計候且前中納言殿附家來共ハ一同夫々被引替可被成候且又御近親
之面々其外總而書通往復等無之様家老共始に急度可申達との御沙汰ニ候條取締方厚ク心附候様可被致候
右於同席列座同前同人申渡書付都合貳通讚岐守に相渡之

上使 關部下總守 松平和泉守
松平攝津守

右尾州家相續之儀被仰出候ニ付被遣之
右一通

安政五年

〔安津免久佐〕(七月江戸來狀)

一紀州様西丸に御乗入ニ付去ル二日諸家様御歡慰御登城ニ相成申候然ル處去ル五日尾州様越前様御隠居水戸前中納言様押込被仰付大變之事差發り只々恐愕仕候此度西丸御立ニ付初發紀州様ト水戸前中納言様御七男一橋様御兩殿之内を御養君ニ被遊宮ニ而尾州様越前様方ニハ是非一橋様方を御立被遊度御願望之處御大老井伊様初御老中方ハ紀州様ハ先大御所様之御孫ニ被爲當至而御血脉も近ク被爲在候ニ付紀州様を是非御養君ニ可被遊との事ニ而兩端ニ分り度々大議論杯於殿中被爲在內輪ニハ様々煩敷儀も有之由風説仕候且又異船取扱之儀ニ付而も 水戸様尾張様越前様方ニハ初より專打拂之思召ニ而當時公義之御主意トハ表裏成事ニ而内實ハ水戸尾張兩侯々京都之方ニも御入りさしニ相成候段風説仕旁々ニ公義御惡ミ強如此御咎被仰付候事ト相見申候

〔夷事輯録〕(江戸來狀日附の一節)

此節之一條全井伊家之決斷ニ而土州別而御立腹之由ニて御同志之面々ニ被仰合書狀指廻ニ相成候由大老初之説ハ全小石川之奸謀を出候事而忠義之筋ニ而無之との事ニ而推而老公初御登城之節井伊公之論談烈敷有之候由井伊殿之英氣當今天下之安危此一人と相見申候異船杯之事ハ尤安ク見被居候趣ニ御座候實ニ公方様ハ右之通御養君之御年若唯々薄氷深淵之心地仕候

〔江戸機密間日記〕(七月五日内藤肥守より藩主齊護へ)

松平越前守家相續被仰付候跡相續方等之儀ハ勘考之上可被中間候事

〔衝談紀聞〕

此とた之落書 ひとよハ尾張大根に味附其つけ越前めしも喰へぬ世の中

松平日向守に

〔昨夢紀事〕

程本く公邊御徒日付を細川越中守殿阿部伊豫守殿大目付山口丹波守殿御指添御出ある由申來れり六日曉寅ノ刻比ふるへし右の御方々御出あり越中守殿先ッ師質を召出されて御内々仰ありけるハ御用の御次第御直達あらんにハ公兼而の御氣象故如何なる御請にや及はれんと御大老初殊之外懸念の様子にもある事ふれハ表立て御達のあらん前に御内々御對面ありて御相談ふされ度との御旨ふれハ其段公へ申上しかハ早速渡り御廊下ニおゐて御對面ありて御相談の上御直請ハ相止爲御名代御家老相山誠を被指出たり

七月六日將軍家定薨す

〔夷事輯録〕(江戸來狀日附の一節)

一公方様先月下旬比御水氣之御氣味ニ而次第ニ被爲差重俄ニ蘭法漢法他藩御抱之醫師戸塚靜海列四人被召出御療治被 仰付數多居候御ヒ業に之拜診茂不被 仰付由之處御醫師持り一旦ハ御宜敷御模様の處去ル六日之夕々職職ト被爲差重御苦痛甚敷多分之御下血等も被爲在候由ニ而内實ハ其夜御事切候哉ニ相聞申候處元來御ヒ之帳口關櫻仙院様御療治之處御藥達申唱ニ而前文之通俄ニ御醫師打替り同様ハ御ヒ被差除跡ハ半知職被下候而並醫ニ相續被仰付候由ニ御座候得共直ニ屋敷釘打内外張番嚴重ニ被仰付置候由何を前文本郷様石川様杯御退役之儀も右等之事之警ニも有之候職近日之恐入たる事ふから專毒中り一般ニ風評仕候右之外 御養君様召上り物之内ニも怪々事有之其儀之心付取下手ニ給せ試候處忽死致し候様子と密々相唱申候處此儀ハ不取締之巷説ニ而事實無覺束候得共同様嚴重之細方被仰付候儀之相違も無之且俄ニ御醫師持り等之儀を以相考申候得者甚不審敷事共ニ而云々

〔全書〕

一七月六日

松平薩摩守醫師	戸塚靜海
松平三河守内	遠田長庵
松平肥前守内	伊東玄朴
松平駿河守内	青木春岱

右被召出奥醫師被仰付三拾人扶持被下勤内貳百俵被下並之通御番料貳百石被下之

右之通俄ニ被 仰渡早速御城へ被召出 御容休奉伺御藥を御同人相談之上奉指上候由

但先達而以來被遊御配慮候故御時候中角ニ御不出來ニ付御病重も被爲在候拵と相唱候儀ハ全脚氣之御症ニ而既

ニ三日ニ之御寒キも被遊候由ニ而本文之通俄ニ被仰出其後ハ次第御快方と申内御不出來之由然ルニ奥醫師中不殘御

容休伺違之由公方様實ハ六日之夜御大切之由餘之諷評ハ以下來狀之内所々有之略ス

〔公書〕 (午ノ九月十四日附 江戸來狀の一節)

一温恭院殿奏去毒ニ御中り杯の評判ハ誠ニ流言之所爲と相聞へ實ハ脚氣之衝心ニ相違無之由

七月八日幕府吏員の機密洩洩を戒む

〔尊攘雜錄、夷事輯録〕 (イは夷軍側)

七月八日備後守殿下總守殿御直ニ掛り御役人ニ被 仰越候趣

異國船渡來候而人耳を立候時節ニ候處國持業を初メ御役人ニ與意取結事實之儀承度存意之者も有之哉ニ相聞如何之儀
ニ有之候全。徳川家御所置之儀ハ裏方等ニて承知致間敷儀ニて表向を觸候上之格別内輪之儀評儀事成行等前以相知候
趣ニてハ人心之障ニも相成事故以來表大名案にの附合之儀ハ勿論御譜代之業といへとも御用筋堅相漏を中間敷候

七月九日幕府は本藩相州守備兵の更迭糧食器械の輸送不便あるを諒し特に水運の便ある濱町に
邸地六千坪を附與す

〔七年風説帳〕

細川越中守

相州御備場御用精入相勤在府人數も相増候所一體屋敷手狭之趣ニ相聞候付備向手當之爲濱町水野河内守中屋敷之内六
千坪被下之御普請奉行可被談候

〔江戸機密間日記〕

七月九日

覺御小姓頭ニ

太守様今日依召御登城被遊候處相州御備場御用精入御勤在府御人數及相増候處御屋敷御手狭ニ付御備向爲御手當濱町
水野河内守様御中屋敷之内六千坪被遊御拜領奉恐悅候此段組支配方に可被達候以上

〔江戸自筆狀〕 (七月十三日海口三浦通名)

〔前略〕

一去ル九日濱町水野河内様御中屋敷之内六千坪被遊御拜領候段之御用狀之通ニ而重疊奉恐悅候今少過坪之御屋敷御内密

安政五年

被仰立置候得共當時實ニ御屋敷御手少脇様御屋敷を御引揚右丈クニ而茂被下置候儀之畢章此方様御備向等御手厚別段御行届之譯屹度貫通御役人様方格別之御取扱筋ニ相違無之類以御手厚御座度存候木挽町御屋敷四千坪餘之由八丁堀貳千坪餘と申事ニ付丁度兩御屋敷丈クニ而御座候以前濱町御屋敷御隣と相見大川筋ニ茂通り居申候表御長屋杯之近年新規御建方ニ相成中村勲農術と世間功熟之者ニ候處濱町邊一坪貳兩規矩ニ當り候由昨夕佐貳役は内話いたし候由河内守様方に割殘繪計相成候間彼方様御讓渡被成度昨日懸り來自然最安御手ニ入候ハ、無此上御都合ニ御座候可憐ハ水野様ニ而先年茂御引揚此節も右之通ニ御座候此方様ニ取候而之先之一稜之御議ニ御座候右一ト通り得御意度如是御座候以上

七月十日幕府蘭國と修交通商航海條約十條及び貿易章程七則を締結す

〔安政五年の觸狀扣〕

阿蘭陀國條約並稅則

阿蘭陀王と帝國大日本大君と兩國の親親且商賣の因みを廣くせん事を欲して阿蘭陀國王は其事を阿蘭陀コミサリリス・メーストルヤン・ヘン德里ツキドンクルキユルシユスニ命し日本大君は永井玄蕃頭岡部駿河守岩瀬肥後守ニ命し双方委任の書を照應して下文の條々を合議決定す

第一條 阿蘭陀國王は江戸に居留せるデプロマチーキアゲントを任し又此約書ニ載る阿蘭陀貿易の爲ニ開きある日本各港の内ニ居留せるコンシユル又はコンシユライルアゲント等を任せし其日本ニ居留せるデプロマチーキアゲント并コンシユルゼネラルは職務を行ふ時より日本の部内を旅行せる免許あるよし
日本政府ハ阿蘭陀都府ニ居留せる政事ニ預る役人を任し又阿蘭陀國の各港の内ニ居留せる諸取締の役人及び貿易を處置せる役人を任せし其政事ニ預る役人及び頭立ある取締の役人は阿蘭陀國ニ到着の日より其國の部内を旅行せし

第二條

長崎および箱館の港の外次ニ載る場所を左の期限より開くよし

神奈川 午五月より凡十三ヶ月の後より 西曆紀元千八百五十九年七月四日

兵庫 同斷凡五十四ヶ月の後より 千八百六十三年一月一日

此外西國岸ニおるて今より凡十八ヶ月 千八百六十年の一月一日の後より一港を開くよし其場所は開港以前ニ達せしし神奈川港を開く後六ヶ月として下田港ハ續きし此箇條の内ニ載る各地は阿蘭陀人ニ居留を許せしし居留の者ハ一箇の地を賃を出して借り又其所ニ建物あるハ是を買ふ事妨ふく且住宅倉庫を建てる事をも許せししといへともまを建てるニ託して要害の場所を取建る事ハ決して成さるへし此條を堅くせん爲ニ其建物を新築改造修補ふとせる事あらん時ニ之日本役人こをを見分る事當然たるべし

阿蘭陀人建物の爲ニ借り得る一箇の場所并ニ港々の定期は各港の役人と阿蘭陀コンシユルと議定せしむ若し若議定しかたき時は其事件を阿蘭陀デプロマチーキアゲントと日本政府ニ示して處置せしむへし其居留場の周圍ニ門塔を設けを出入自在ニせしむへし
阿蘭陀人日本語或は日本術藝を學び度望あらハ阿蘭陀高官の願によつて日本奉行所より人柄を撰ひ開きたる港ニ於て傳授せしむる事妨ふし江戸居留の阿蘭陀役人は等の望あらハ其高官申立の上日本政府より其人を撰ひて學べしむるよし

江戸 午五月より凡四十二ヶ月の後より 千八百六十二年一月一日

大坂 同斷凡五十四ヶ月の後より 千八百六十三年一月一日

右ニテ所は阿蘭陀人只商賣を爲す間のみ逗留せる事を得へし此兩所の町ニおるて阿蘭陀人建家を賃を以て借るべき相當なる一區の場所并ニ散步せしむる規程は追而阿蘭陀のデプロマチーキアゲントと日本役人と談判せしむるよし

双方の國人品物を賣買する事總て障りなく其拂方等にて付てハ日本役人をして立合ハす諸日本人阿蘭陀人より得たる品を賣買し或ハ所持する事ともに妨げふし此箇條ハ條約の趣執行ハ期限以前日本國內へ觸渡をへし

軍用の諸物は日本役所の外へ賣あらず尤外國人互の取引ハ差構ある事ふし

日本の米并ニ日本の麥ハ日本逗留の阿蘭陀人并ニ船ニ乗組る者及び船中旅客食料の爲の用意は與ふとも積荷として輸出する事を許さず日本産する所の銅餘分あをハ日本役所にて其時々公けの入札を以神奈川并ニ長崎ニ於て拂ひ渡をせし

在留の阿蘭陀人日本の賤民を雇ひ且諸用事ニ充る事を許さへし

第三條

總て國地ニ輸入輸出の品々別冊の通日本役所に運上を納むへし

日本の運上所より荷主申立の價を好ありと察する時ハ運上役ハ相當の價を付其荷物を買入る事を談せへし荷主若くを否む時ハ運上所より付たる價ニ從て運上を納むし承允する時ハ其價を以て直ニ買上るし

阿片の輸入は嚴禁たり若阿蘭陀商船三斤以上持渡らハ其過量の品は日本役人をして取上るし

輸入の荷物定例の運上納済の上者日本人ハ國中に輸送するとも別ニ運上を取立る事ふし若他の國人租税の高を減する時は阿蘭陀人も同様ニ處せらるへし

第四條

外國の諸貨幣ハ日本貨幣同種類の同量を以て通用をせし金ハ金銀は銀と量目を以て比較するをいふ

双方の國人互に品物の代料を拂ふに日本と外國との貨幣を用ふる事妨ふし

日本人外國の貨幣に慣えされハ開港の後凡一ヶ年の間各港の役所より日本の貨幣を以て阿蘭陀人願次第引渡をへし日本諸貨幣ハ銅錢を除く輸出する事を得并ニ外國の金銀ハ貨幣ニ歸るも歸さるも輸出をせし

第五條

阿蘭陀人へ對し法を犯せる日本人は日本役人紀之上日本の法度を以て罰せへし日本人ニ對し犯したる阿蘭

陀人はコンシユル裁斷所より吟味之上阿蘭陀の法度を以て罰せへし

阿蘭陀コンシユル裁斷所日本奉行所は双方商人通債等の事をも公けニ取扱ふし

都て條約中の規定并ニ別冊ニ記せる所の法則を犯せに於てはコンシユルへ申達し取上品并ニ過料は日本役人へ渡をせし

兩國の役人は双方商人取引の事に付て差構ふ事ふし

第六條

日本開港の場所ニおゐて阿蘭陀人遊歩の規程左の如し

神奈川 六郷川筋を限りとし其他は各方へ凡十里

箱館 各方へ凡十里

兵 庫京都を距る事十里の地へハ阿蘭陀人立入さる管ニ付其方角を除き各方へ十里且兵庫に來ル船々の乗組人に係名川より海邊迄の川筋を越あからず

都て其里數は各港の奉行所又ハ御用所より陸路の程度ふり

長崎 其町の周圍ニある御料所を限りとす

寺社茶店休息所之外臺場諸役所并ニ門ある所ニ到るあからず

阿蘭陀人重立たる惡事ありて裁斷を受又は不身持にて再び裁許ニ處せらるし者は居留の場所より一里外ニ出あらず其者等ハ日本奉行所より國地退去の事を其地在留の阿蘭陀コンシユルニ達をせし

其者とも諸引合等奉行所并ニコンシユル糺濟の上退去の期限猶豫の事はコンシユルより申立よつて叶ふへし其期限は決して一ヶ年を越あからず

第七條

日本にある阿蘭陀人自ら其國の宗法を念し禮拜堂を居留場の内ニ置も障りなし并ニ其建物を破壊し阿蘭陀人宗法を自ら念するを妨る事ふし

阿蘭陀人日本人の堂宮を毀傷せる事よく又決して日本神佛の禮拜を妨げ神佛像を毀る事あるをあらす
双方之人民互に宗旨に付ての爭論あるをあらす

第八條 阿蘭陀コンシユルの願に依て都て出奔人并に裁斷の場より逃去し者を召捕又はコンシユル捕へ置たる罪人を獄に繋ぐ事叶ふを且陸地并に船中にある阿蘭陀人不法を戒め規則を遵守せしむるためコンシユル申立次第助力をへし
右等の諸入費并に願に依りて日本の獄に繋きたる者の雜費は都而阿蘭陀コンシユルより償ふをへし

第九條 此條約に添たる商法の別冊は本書同様双方の臣民互に遵守をへし
外國人民に免許ある廉は悉く阿蘭陀人へも直に差許をへし此書面記載する事は其場所々々の規定に循ふをへし

安政二年乙卯十二月廿三日 千八百五十六年長崎におりて取極たる條約の内存をへきは存し同四年丁巳八月廿九日 千八百五十七年其附録として取替せし約書は此條約中悉せるによつて廢をへし

第十條 今より凡百六十九ヶ月の後 即千八百七十二年 双方政府の存意を以て兩國の内より一ヶ年前に通達し此條約并に長崎條約の内存し置箇條及び此書に添たる別冊ともに双方委任の役人實驗の上談判を盡し補ひ或は改る事を得をへし
右條約の趣者未年六月五日 即千八百五十九年 より執行ふをへし此日限或は其以前ても都合次第此本書を長崎に於て取替をへし若餘儀なき子細有之此期限中本書取替し済ますとも條約の趣は此期限より執行ふをへし
本條約は阿蘭陀よりハ阿蘭陀國王自ら名を記しセケレターリスフハンスタートとも自ら名を記し阿蘭陀

の印を封して證とし日本よりハ大君の御名と奥印を置し高官の者名を記し印を調して證とをへし
斯如く安政五年戊午七月十日 即千八百五十八年 江戸府に於て談判治定せり此證據として前記したる兩國の役人等名を記し調印せるもの也

永井玄蕃頭花押
岡部駿河守同
岩瀬肥後守同

税 則 (六月十九日の條に在る亞墨利加商民貿易章程と同じきを以て之を略す、
(但し文中亞墨利加とあるを阿蘭陀にかへ又米貨を關貨に換算せり)

七月十一日幕府露國と修交通商條約十七條貿易章程六則を締結す

(安政五年の觸狀扣)

魯西亞國條約並稅則

帝國大日本大君と全魯西亞國帝と懇親を厚ふし及び兩國人民貿易之規則を立て永久の基とし愈充全ならしめん事を欲して條約を取結ぶを決し日本大君は永井玄蕃頭井上信濃守堀織部正岩瀬肥後守津田半三郎に命し
魯西亞國帝はエフミューズプーチヤチンに命して次の條々を議定せり

第一條 安政元年寅十二月廿一日 即千八百五十五年第一下田にて定めたる約書ハ此條約と共に存し置同附録並に安政四年己九月七日 即千八百五十七年二月廿六日第二下田にて定めたる追加約書は廢をへし
第二條 向後日本政府者サントベートルビユルダに在留せる政事に預る役人を任し又魯西亞國の各港の内居留せる諸取締の役人及び貿易を處置する役人を任すをへし其政事に預る役人及び頭立たる取締の役人は魯西亞國に到着の日より其國の部内を旅行をへし魯西亞國帝は江戸に居留せるデプロマキアアグメント及びコンシユル

ルゼ子ラールは其職務を行ふ時より日本國の部内を旅行する免許あるへし

第三條 下田長崎箱館港の外次いふ處の場所を左の期限より開くへし

神奈川 午七月より十一月の後より 即千八百五十九年七月一日

兵庫 同前凡五十二ヶ月の後より 千八百六十三年一月一日

その外日本西海岸に於て凡十六ヶ月之後千八百六十年一月一日より一港を開くへし其場所の名は開港以前に魯西亞コンシユルに達せし

神奈川を開きし後六ヶ月にして下田港は鎖せし

第四條 魯西亞政府は日本開港の場所の内コンシユル或はコンシユライルエージェント等を任せし

日本政府は其場に於てコンシユル并コンシユライル役所附屬のもの及び夫に屬する學校病院等取建へべき堂々の場所を貸渡せし

第五條 前文五港の場所に於て魯西亞人連綿在留又は一時逗留をせし其等の等は一箇の地を價を出して借し其所に建物或は是を買ひ或は賃を出して貸し又新に社家屋倉庫等を建する事も許しといへとも是を建るに托して要害の場所を取建する事は決して成さざるへし此掟の爲に其建物の其新築改造修復の節々日本役人こそを見分せし魯西亞人建物の爲借得る場所并港々の定期は各港の役人と魯西亞コンシユルと議定せし若議定しむときは其事件を日本政府と魯西亞チブロマチキエージェントに示し處置せしむへし

第六條 魯西亞人唯商賣をなす爲にのみ江戸並大坂に逗留する事を得へし

江戸 午七月より凡四十六ヶ月の内より 千八百六十二年一月一日

大坂 同前五十二ヶ月の後より 千八百六十三年一月一日

此兩所の町に於て魯西亞人建家を價を以借るべき相當なる一區の場所并散步せし規程は退て日本役人と

魯西亞のチブロマチキエージェントと議定せし

第七條 日本に一時或ハ連綿在留の魯西亞人家眷を携る事を免し且自ら其宗旨を念し宗法を條する事を得へし長崎

に於て踏繪の仕來は既に廢せり

第八條 日本開港の場所に於て魯西亞人遊歩の規程左の程し

箱館 各方へ凡十里

長崎 其町の周圍に於る御料所を限りとす

神奈川 江戸の方より六郷川と品川の間に於てを限りとし其他は各方へ十里

兵庫 京都を距る事十里の地を除き各方へ十里兵庫に來る船のり組人ハ兵庫と大坂との間に於て海路に合する猪名川の川筋を越ゆへからす

都て其里數は各港の奉行所より陸路の程度より其里數は魯西亞尺度にて三フエルステン三百三十二サツセに即ち一万四千七百七十五フート西海岸に於て追て開くべき一港歩の規程は日本役人と魯西亞チブロマチキエージェントと議定せし

魯西亞人重立たる惡事ありて裁斷を受又は不身持にして再び裁許し處せられしものは居留の場所より一里の外に出るをへらす其者等ハ日本奉行所より國地退去の事を魯西亞コンシユルに達せし其者共諸引合等コンシユル執濟の上退去の期限猶豫の儀相叶へし尤其期限は決して壹ケ年を越ゆへらさず

寺社及び休息所を除くの外凡て城壁役所及び門ある所へ招なくして來り訪へらさず

双方國人品物を賣買する事總て障なく兩國の役人は立合ハモ諸日本人魯西亞人より得たる品々を賣買し或は所持し用ゆること妨ふし此條は條約取行ふ時國中に懸渡すへし

第十條

總て國地ニ輸入輸出の品々別冊の通日本役所へ運上を納むへし
日本の運上所より荷主申立の價を好むりと察する時は運上役より相當の價及び其荷物を買入る事を談
へし荷主若これを否む時は運上役人より付けたる價より從て運上を納むへし承知する時は其價を以直買上
へし

輸入の荷物定例の運上納済の上は日本人より國中に輸送するとも別運上を取立る事ふし

高税目録に定めたる運上高日本船及び他國の商船より外國より輸入せる同じ荷物の運上を減する時は魯西
亞も同様と處せらるるし

第十一條

魯西亞政府海軍用意の品神奈川長崎箱館の内陸揚し庫内に藏めて魯西亞政府番人守護するものは運上の
沙汰及ぶず其品を賣拂ふ時は買受る人より規定の運上を日本役所に納むるし
阿片の輸入は嚴禁たる若魯西亞商船三斤魯西亞量日四ポント三以上を持渡らハ其過料の品は日本役人これを
取上り魯西亞人日本におひて阿片商賣に付て罪狀ある時は其品取上一斤に付二十ルーブルの過料を日本
役所へ納め本國嚴禁の掟を以罰せし

第十二條

軍用の諸物は日本役所の外へ賣ふるは尤外國人互の取引は差構ある事ふし
米并麥は日本逗留の魯西亞人及び船乗組たる者又は船中旅客食料の爲め用意は否みふく與ふとも積荷と
して輸出せる事其許さず産する所の銅日本要用の餘分は其時々日本役所より公けの入札を以拂ひ渡
へし

第十三條

外國の諸貨幣は日本貨幣同種類の同量を以通用せし金は銀は銀と量日双方の國人互に品物の代料を拂ふ
日本と外國との貨幣を用ふる事妨ふし開港後凡一年の中各港の役所方日本の貨幣を以魯西亞人額次第引
替渡せし日本諸貨幣は銅錢輸出せる事を得并外國の金銀は貨幣に歸るも歸さるも輸出せし

第十四條

双方國人の爭論ある時は兩國の役人吟味を遂げ日本人罪ある時は日本役所よりこれを罰し魯西亞人罪ある
時は其國のコンシユルよりこれを罰する事都て下田條約に定めし如し
法を犯せる魯西亞人の事に付てはコンシユル願ふ依て扶助せし其雜費は事毎に魯西亞コンシユルより相
當の價を出するし

魯西亞コンシユル居合さる港より犯法の魯西亞人は日本役人取押へ最寄のコンシユルに達しこれを處置せ
しむへし此條約中の規定并別冊に記せる所の法則を犯せし於てハ魯西亞コンシユル裁判所へ申達同所より
吟味の上取上品并過料は日本役所へ差出せし

第十五條

追て日本と魯西亞との條約を改め又は加入せんとする時は兩國政府再檢する事當然たりといへとも此條約
調判より凡十四年を通る後兩國の内より一ヶ年前より通達せし

第十六條

此後他國のものに許容せる處は斷續なく魯西亞國へも免せし
魯西亞國に於ての日本人も同様たるへし

第十七條

此條約の趣は未年六月二日即千八百五十九年七月一日より執行ふるし本條約は日本大君の御名と奥印を著し若中供一名
を記し魯西亞の方よりハ國帝自ら名を記し高官のもの俱に名を記し國印を鈐して以證とせし
此本書は未年六月二日即千八百五十九年七月一日迄の内成は其以前よりハ都合次第江戶又はサントペートルビニユルタにおひて取
替へし此條約書は日本諸魯西亞語は双方の全權各本國の文に調印し和蘭譯文は双方通稱名を記し是を添て取替
せし

安政五年戊午七月十一日

永井 丹 玄 藤 國 花押
井 上 信 濃 守 花押

堀	織	部	正	花	押
岩	瀬	肥	後	守	花
津	田	半	三	郎	花
					押

税則(六月十九日の條に在る亞細亞通商民貿易章程と同じきを以て之を略す、
但し文中亞細亞とあるを亞西亞にかへ又米貨を貨貨に換置せり)

七月十一日日本藩江戸留守居吉田平之助は相房警備の變更、閑老の退職、尾水越三藩主の不時登營、土佐藩主の建言等に關する探索書を提出す尋て在府老臣之を藩政府に移牒す

〔江戸自筆狀〕

以內狀得貴意申候御老中堀田様伊賀守様御退役之儀之先便申達置候通ニ而内輪之御様子兩端ニ有之段委曲吉田平之助書取之通ニ而御人之被替候得共諸事御振合且外國御取扱筋之公邊之御模様最前之御處置通御相替申儀無之三都御備御手薄且列藩困窮人情情弱ニ有之一大沿革無之而之難被用暫事を寛ニして追而之御大謀有之哉ニ相聞候處越前様其外藤堂様土州様就鴨伊達様之水戸老公方ニ而第一京都御立既ニ今般外國約定御調印之一條御違勅之筋ニ相當御承伏被難成太守様不被爲在思召候ハ、御連名を以御上書被爲成度旨土州様より御直書到來右之藤堂様伊達様方被仰合御取調越前様も勿論御同服御並様之事ニ付不怪被遊御配慮候得共別紙寫之通ニ而押立候御趣意も無之御並様御一統之被仰合申儀ニ茂無御座何様煩敷御意味可有之旁以御連名御断切ニ相成實ニ近來清水之有様ニ御座候處去ル五日晝七時前御申談之儀有之只今之内被遊御登城候様内藤様御切紙御到來即刻御登城之處同夜四時比迄奥大御廣間御打合申事ニ而一切御城之御模様不相分甚懸念仕候處越前様御事思召御旨茂被爲在御隠居被仰出御候申儀漸相分右御書御持參ニ而同夜八時半比常盤橋に御出御通達被是御手間被取御歸殿之明六ツ時過ニ而御座候尾州様水戸老侯被仰付之趣等之他筆御用狀之通御座候此節之御一件越前様御氣貫太守様よりハ被爲行届間敷跡之御教示等御大老様御初御頼談有之今

以被遊御世話不一方被遊御配慮奉悉入候次第ニ御座候土州様藤堂様并此儘ニ而之相濟間敷候唱及御座候當時一赫此元之形勢等爲御見耳前文吉田平之助より相達書取寫之別冊并書付ニ通差進入御披見申候(七月九日の條に出つ)

七月十三日(日附は白筆)
狀控に據る)

三	淵	志	津	摩
溝	口	藏		人

御家老中宛様
御中老中宛様

尚々吉田平之助の差出候書取之以御序若殿様御内覽ニ茂被入置候様此許ニ而唯合申候間可然御取計候様存候以上

〔公書、内密聞取書〕

書取寫(内密聞取書ニ付札之内朱丸印用置候者七月十一日御
内意仕候以後探索仕候様々ニ而御座候)としるしあり)

今般相房御相備之御方々様御持場替并閑老御退役一件去月廿四日水府老公を初押而御登城之一條且公方様御大切之儀等極密承込候次第左ニ申上候

一御相備外御三家様方御請持替ニ而此方様迄御動不被爲在儀差寄相考候處ニ而之御替り之御方々者御白國近ニ相成殊ニ繁昌之所柄等ニ而旁辨利之筋哉と相羨候向も可有之候へ共内實ハ御替り之御方々ハ御陣屋を初炮器并用船等總而御備向御自助を以新規出來御人數も都會之事ト申又ハ開港之場所ニ候へハ誠實之御備不被立置候而ハ難相成被は大造之御物入も相應り候上是さて邊車之所柄と違詰方之面々風儀之弛ニ茂相成諸御願筋等ハ都而京大坂之御役方を經江戸表御手邊ニ相成候付面ハ悉而働主意貫兼候事而已ニ可相成旁以今度被蒙仰候御向々之殊外御當惑之御様子ニ相聞申候畢竟此方様ニ之木牧御固被仰付候御以來急速之御手當各別御手厚引續相州御備場被蒙仰候付而ハ大造之御物入を以炮器等新規御出來御人數も他ニ勝大勢被差登大小炮打方を初御備筋も御相備之御向々ニ比候へハ別段御調之段之公邊御役人方追々御見聞も有之其上兼而諸御達筋御願向々等も多御爲筋ニ拘り候事而已ニ付萬端御手厚之處於公邊も深御感心

自然之節御頼ニ被思召候ハ先此方様ニ限り候ト權門之御方々專御時有之程之御儀ニ而是迄廉々不容易御願筋相濟候儀も全公邊之御通り御宜敷所方之御儀ニ而御相備之御方々之蒙而御通之事而已ニ心懸居候故歟御備向等之儀諸事弛せニ有之以外公邊向之聞不宜隨而御願立之筋も相濟不申事多段々之現證も顯然仕候事ニ御座候殊更今般京大坂を初所々御警衛向之儀も差發候付旁右御三家者御所替爲被仰付哉之趣ニ而此方様ハ之格別御手厚ニ付御願切之譯を以已來長州様之御跡之取潰ニ相成御一手持ニ朱丸印付札○本行御一手持之儀長州様御受之御儀場々々并御屋御岸等ニ至迄若も御引受ニ相之御受場者外海同然手廣之所柄ニ付程ニ寄候ハ、御儀場々々を始海岸御手當之筋者御儀ニ相成御受持者不被御預所之儀者此方御便利ニ相成御願ニ相成候ハ、其意迄御評議ニも可相成哉ニ候得共別段御手當之儀者決而心遣イ不致御願門之御役々々御密承候間爲念附相成候哉之御模様ニも相聞全御動無之儀ハ深キ御主意も有之事之由依而此節別段御結納之御屋敷(この下に付札あり七月九日の條)をも被遊御頂戴乍恐御規模之御儀ト奉存候殊ニ公義ハ之格別被爲蒙御鴻恩候御家柄之儀ニ被爲に出つ茲には之を略す)を在候ハハ豐如何様之動亂有之候とも彌以無ニ之御忠節を可被爲盡儀之勿論之事御座候得共萬一之節外ニ御受持替ニも相成候様御座候而ハ江戸表並御國御警衛向共三方之御備配ニ不相成候而ハ難叶然ニ相州迄之儀ニ御座候ハハ江戸表之御警衛筋も御最寄ニ而双方相通兩辨之御手配等如何様ニも相調就而者御物入茂御手輕相濟自然之節之御爲ニも御手厚授兵後詰等之應變も迅速ニ被行可申哉ト治亂共一稜之御儀ト奉存候

一 外國御取扱筋京都に御伺之一條諸侯方之内ニも段々御異服之向多御同意被爲在候而之不宜趣水府公御始御同心之御方杯よ裏通りニ而内々京都に御文通有之候付初發者無御異儀動答可被仰出御模様之處俄ニ御様子打替り若關東方より御見放ニ相成候而も大諸侯之内ニハ一味有志之御向敷多有之聊御頼着ニ不被及趣を以殊外六ヶ敷相成加之御時勢柄ニ付公義御養君之儀も急ニ御定ニ相成候様被仰出是又水府老公御手廻り一橋様に御乗出ニ相成度との御内望之由彼是内輪之御密策及露洩右役カマ係之御役人方を初追々御退役等被仰付哉之由密々承込候趣ハ其節々御内意申上置候通ニ候處先月廿四日土州様御直書ニ而此節外國之御取扱假條御調印之一段者御遠勅之筋ニ相成何分御承伏難被成責而ハ已後被爲安復慮候様迅速之御處置有御座度との御上書御意様伊達様共被仰合御取調ニ相成思召不被爲在候者太守様ニ茂可

被爲成御連者様萬一御不同意も被爲在候ハ、幕儀に其旨被仰上御連者之當り之御向に御通達之儀被仰進候一條御座被遊御斷切候ニ付札、本行御斷切之儀此方様外御同席様ニ者上杉様豐州様者御同席之由ニ相聞候得共其餘之付而之御同席御方々様之内御前様丹羽様并土州様ハ御二御せり付ニ而無御同席意ニ相成候哉ニ承申候事付而之御同席御一列被仰合之御儀殊之外被遊御心痛且之其御堀田様伊賀様俄ニ御役御免ニ相成并伊様者京都御警衛向被成御勤諸事御通り茂宜敷御向之由ニ而前文御遠勅之筋ニ相成候一段如何之御胸腹ニ可有御座哉其上當日之水府御老侯御父子尾州様越前様ニ不時御登城も被爲在旁不容易御模様ニ而右御斷之御一條朱丸印付札○本文御一條之外ニも伊達様土州様ハ水戸御有之たる趣ニ而御事柄ハ巨細分發申候得共段々公邊之御書あしく相成御内沙汰之未伊達様は御國居ニ相成候而者土州様ハ御六ヶ敷當時御國居之御出居候哉ニ而阿州様も御同席哉ニ相聞御元許ハ哉ニ御家老并罷登専心配最中之由相聞申候右ニ付御役失有之哉ニ而大御目付山口丹波守様も西丸御留守御二御轉し如何可有御座哉深御家旁被爲成候付私心得を以兼而御別懇を蒙居候御相成候由此段其後之成行相承込候御向付紙を用置候事如何可有御座哉深御家旁被爲成候付私心得を以兼而御別懇を蒙居候御勘定奉行土岐攝津守様ニ罷出朱丸印付札○本文土岐様は罷出相向候一條は既ニ廿四日之夕土州様ハ至急ニ御題又遊御同席有無合ニ而無之右射候儀者品ニ追々御願等之御儀合も有之其上御老方も堀田様始御打替り御三家様方臨時御登城被是不容易御儀ニ候得共御密筋も相分不申旁無ト御願意之御向に罷出本文御斷切一條を以不案意筋等御伺候ハ、自然内輪之御模様も相分可申哉ト御内意之趣ニ付翌廿五日ニ至リ土岐様は罷出相向候御内話ニ而内輪之御模様伺取候ハ、乍恐上ニ茂御安慮可被遊大略本文之通御事情相分候儀ニ御座候此段最御認渡候ニ付付紙を用置候事内輪之御模様伺取候ハ、乍恐上ニ茂御安慮可被遊哉ト御内意之趣ニ付土州様方之御狀寫並御斷之返翰御草稿持參土岐様御逢相御密を以彼是之模様相伺右之御下書茂入御内見申候處右之不容易御事柄深被爲用尊慮御斷切之段誠ニ御忠節入々御感心被成候付而之太守様御安慮之たま且之公邊政府之心得ニ茂相成候御事柄旁右之御書付之まハらく御借受被成度掃部頭様御始御老中様方に茂内密申達御換摺可被成旨被仰聞候付畢竟土岐様ハ之浦賀御在番申以來御懇意を蒙居候譯を以御同人様限極密相伺候儀ニ而右之御方々に御持出被下候而ハ内分々之乍申甚當感仕候段御辭退仕候得共勿論迷惑ニ係り候様之見込ニ候ハハ曾而御所望等之不被成此儀之一統感服乾々心得ニ茂相成第一太守様御安慮之筋ニ茂可相成儀ト御見込被成候間暫時之間極御内々ニ而御借受被成度再應之御所望ニ付不得止其儘差出置申候左候而前日水府老侯御始御登城被爲在候御様子内々相伺中候處成程外國御取扱一條并御養君之御事等段々御論談有之再々應御目見之儀茂御願ニ相成候由ニ候ハ共掃部頭様始段々御談判被申候而大概御納得之持ニ相成御目見無之御退出之趣之粗御承知被成候ハ共殊之外御繁劇ニ而委敷御伺被

成候御透無之何分今日迄之突留候御咄と不被出來候間今日御登城之上巨細御伺右御噂通各別相替不申候ハ、別段御沙汰被成間敷若相違之筋歟又之心得ニ相成候儀茂有之候ハ、御紙面を以可被仰下儀茂可有之段被仰聞候付吳々相願引取御右筆組頭原彌十郎様に其儘罷出御登城ニ差向居候付御立懸一寸御逢相願前文御斷之趣取摘口上を以相伺候處誠ニ御大家様之御事奉感服土州方御若息と之申前後之御思惟茂無之御委任之御政躰筋ニ様々之御討論何とも難心得返々御家様之儀と奉感佩候段宜敷申上候様くり返し御挨拶ニ相成申候然處同夕土岐様御用人荒木正之進と申者御使者として私御小屋に被差越今朝は久々ニ御逢段々深篤之内話も御承知ニ相成不一方御太慶被成候其節御留置之御書付御封印を以御返却被成候越御知行所産之眞品乍輕微私に被下置との趣申述白縮二反差出候付差寄相考候而茂兼而定例御極り之御音物たり共一切御受無之御方ニ付何そ被進候御返禮等之心當茂無之了解仕兼候付一通り御禮申述御品之日那に申達候上御挨拶可仕先夫迄之處と御預置可申と申聞追而奉伺御返禮進物持參仕候處直ニ御逢被仰聞候ニと前文御内意仕置候一條ニ付御呼出御沙汰ニ相成候儀有之候處夫ニ而之憶功ニ相成候付態と私參上を御待被成候との御事ニ而右御書面井口上之趣を茂早速掃部頭殿に内密申達兼而建議仕朱丸印付〇本行建議之儀々者當春土政課の方今之御時勢ニ付御爲筋之見勢手並諸職上物御免海通筋度川且諸手數等ニ諸藩難儀之儀々無益之儀者一切御差止衣直住ニ至迄一悉非常之御儉約を以御大變革ニ相成度との儀申談取訊土岐様に入御内覽置候事ニ御座候置候廉々具ニ申入候處殊之外感銘被致直ニ公方様御内聽ニ被達候處御満足被遊御老中様方に茂巨細被申傳置候段私迄内々申合候様掃部頭様被申聞候由被仰聞候左候へハ前文被下物之儀之實ニ御挨拶を除キ御忠節を入々御感心有之右御使者相動候故爲被下ニ茂可有之哉と考察仕候吳々御禮申上向又水府老侯始御論判之御模様并堀田様伊賀様御退役之儀と茂相伺候處段々御聞繕ニも相成候得共差而懸念いたし候筋ニ而之無之先安心いたし候様との事ニ而寸斗巨細之儀相分兼候との御噂ニ而重疊御機密筋之御事と相見土岐様ニ而之委細之儀相分兼候付尙段々探索仕候處廿四日之御登城之至而差向候而之御發と相見前以御伺茂無之當朝尾州様御乗切ニ而水戸様は被爲入夫方直ニ御同道御登城掃部頭様に御逢度々被仰込候へ共御用繁ニ而御延引之御挨拶有之既老侯余程之御府頼ニ而御咄と被成候得共御應對無之其内御養君御弘ノ之御手數外向御觸達之儀迄

夫々御仕舞之上漸八半時過ニ相成御應對ニ相成初發掃部頭様と御伺被成度儀御座候ハ、今日之御登城御沙汰茂無之殊ニ前以御伺茂無之御推參被爲成候儀之如何様之御心得ニ被爲在候哉と御尋ニ相成候處此儀之不容易御事ニ付御目通御直ニ被仰上候上御沙汰可有之候間早々御目見被仰付候様取計可申旨被仰聞候處掃部頭様より乍憚推察仕候處此節外國御取扱一條ニ付御不安意之儀を可被仰上思召と奉存候右之儀ニ御座候へハ最早兎々角茂御條約御取結御調印迄も相濟候上之儀ニ而今更被仰上候迎御變約之難相成追々現ニ臨御不益筋之儀之其節ニ至御斷切ニ而何之子細茂無之又可然筋ハ往々御取行ニ茂可相成哉既ニ兵端を開候際ニ至御許容ニ相成候而之已來天下之御政道之相立申聞敷殊更戰爭之基ニ茂相成御役人共手ニ餘り急迫之場ニ茂いたり候ハ、素より御勝手ニ御登城御爲筋被仰上候ハ勿論之事ニ付其節ハ是方も思召奉伺候様可仕候得共御政躰者御委任と申不肖執權職も被仰付置專取扱中之儀ニ茂御座候間今何程異船渡來候とも分外之御方々様左迄御頓着被爲成候場合と茂不奉存不時御登城之前日御伺之上御沙汰ニ被應候儀御舊格ニ候を右之通御歷々様御推參被爲在候而ハ差寄大勢之御役人とも何事哉と色を變し驚愕仕夫等之響かハ天下一統之人氣動搖ニ相拘り不容易事ニ成行可申旁得斗御勘考被爲在度旨被仰候處此節之御觸達ニ御調印之儀差寄御奉書を以京都に被仰上候趣相見右之不容易御國制を被改候儀ニ付屹といたし候御使者を以被仰向度水府老侯方御沙汰之處追而之御使者も被差越答と申儀之御觸達ニ茂有之候通ニ而是等之儀茂精々評議相伺候上授急ニ隨相應之御下知可被爲在候間御心遣無之様と歟御受答ニ相成候處尾州様方御目見御願之右迄之儀ニ茂無之當今不容易之御時勢御養君御幼年之御方ニ而之甚無心元外ニ御親類相應御年齡之御方茂有之事ニ付人心安着いたし候様之御人躰に御定被遊候様有御座度其儀も御直ニ被仰上度旨被仰聞候處最早紀州様ニ御定被遊既ニ明日御弘ノ之答候段御返答ニ相成候處右之通ニ而者彌以御不安意ニ付明日御弘ノ之處御延引被遊候様有之度被仰聞候處一統之御觸達も夫々仕出相濟何茂思召之儀ニ御座候へハ今更可致方無之段御答ニ相成此儀付而尙御伺被成度儀御座候ハ、全躰御血脉之儀之神君御已來之思召ニ而先御順統被爲立候儀

第一之御主意則御幼稚等之御方被爲在萬事御不行届之儀御補佐被爲成候之水戸侯之御家筋ニ而御願統茂無御構御定ニ
相成候ハ、御補佐之御家之御無用ニ申物ニ而たとへ御願統を被閉御年齡御人才を以御定之儀思召被立候共乾ト御辭退
ニ可相成儀御當然賦ト奉存候其上右様不容易儀を被仰上儀ニ御座候ハ、誰茂存不申様極御忍ニ而平川口方御登城奥通
ニ而御五ニ御諫言被爲成候儀御誠掌賦ト奉存候處重キ御格合ニ拘り候儀も無御構押而表方御登城異々敷被仰上候思召
之儀乍憚御忠節ハ却而台徳を御欠被爲成候形ニ相當尠是掃部頭ニおろてハ一圓難得其意自然御目見之御譯御尋ニ至申
上譯無御座候付何分難奉伺其上昨今御不例ニ茂被爲在逆茂御目見之難被爲叶奉存候
右兩條御爲前深思召候一段之御家柄之儀ト申改申上候迄茂無之重疊御尤之儀トて掃部頭も服心之御家來筋代々別段之
御鴻恩を奉蒙御爲筋ト存候儀之乍憚御同然ニ而決而私情偏頗之取計ニ不仕候間其段之御安心被爲成下候而先今日之處
之御退出被爲成候様有御座度段被仰候處其儘御詰席に御引取之上越前守様ト之不時之無御伺御登城之段如何御心得被
成候哉ト大目付様を以御察討有之候處恐入候儀ト思召御身分御伺有之候處先夫ニ不被及との御差圖ニ而御退出ニ相成
候哉之趣ニ御座候ト付札、本文中納言御列并伊禮御應接之御様ハ極密乾トいたし候御向承候儀ニ付此儀ハ相違も有之間
上候事、(朱九印付札)本行前中納言御列并伊禮御應接之御様ト付札トて、御座候ハ、本御飛御初立候道而可申
付候由、(朱九印付札)本行前中納言御列并伊禮御應接之御様ト付札トて、御座候ハ、本御飛御初立候道而可申
御方御用人西倉務同取書託爲仕儀を承候儀ニ御座
候此儀も先度取置不申上候ニ付爲念追加仕置候事

一堀田様伊賀様御退役之儀之別紙相添置候通外國御取扱一件ト中内場唱茂有之又之御養君之事ト申唱茂有之堀田様御上
京迄之一圖ニ御血統之紀州様御願望之處御歸府後小石川方段々御手廻り當今之御時勢御幼年ニ而ハ無覺東一橋様ニ御
定被爲成度との儀ニ御泥み京都表に之紀州様一橋様ト御兩所様を早打御伺ニ相成順々之通思召不被爲在との趣速ニ勅
答爲被在堀田様御手許ニ御押ハ被成置其初雨繁ニ而京都方之飛脚川支延着之振ニ御押移余り日敷を経候付尙又江戸
方早打御催促之飛脚相立候而疾勅答之趣相達居候儀相分り候付掃部頭様相滯居候趣堀田様は御察討ニ相成候處其御
御養君之儀區々之論評ニ而相決不申若御幼稚ニ而無心元方ニ茂評決ニ相成候而之勅答之趣ニ相違いたし候間評決を相

待御差出之積ニ被成御座候山御返答ニ相成候處其御取計之御一己之御處分ニ候哉ト御尋之處伊賀守申談取計候段御退
答ニ付思召之旨を以御役御免堀田様ハ御席下を茂被仰付候哉之趣ニ茂相聞申候得共兩條いつととも實否相分り兼候
付兩様相認置申候 朱九印付札 ○本行兩條之實否段々承講申候處專御養君之御事之様相聞申候且又志賀御切腹之儀も右同斷京都
而御取置も被成兼石ニ付御無言上之務有之候付書取を以差用可申ト御座候ト相成候處由之處御正直之御方ニ
御頭様御出ニ相成候處無程久世大和守候ハ御内狀を以右一條掃部頭様にも相違候而者不宜秘候様被仰進退御差迫り直ニ
御自費有之候哉ニ極密承申候仍而御密筋も相聞申候事 叙又與御右筆組頭志賀金八郎様去ル朝日之夜切腹之唱有之候
賀様は者御忠節之譯を以死後之御賞美も有之候哉ニ相聞申候事

儀茂前文勅答之御書付堀田様御列御差圖ニ而手元ニ御留置之儀相顯候處トて賦又之御三家方之内森計筋之事ト付札
旬之比權門之御役々方之始夜中御紙ト通所々張札有之候儀も本行御密策之内ト專相唱申候就而之御養君御弘マ之節も殊之外御心遣内
々急須之御手當も爲有之哉之由既ニ御弘マ前夜大目附山形人正様御用人ハ公私共に當今此方様御役當併御改名之有無至急ニ問合來御
同密儀方ニ係り候儀ニ無之此方様ニ限候儀を以相考申候得之御願切之譯ニ而爲一之御急 御大老御老中方は悉言上ニ相成候儘切
御御人數被差出候様御達之ため御内調之御心組ニも旨有之哉ト申候事ニ御座候事 御大老御老中方は悉言上ニ相成候儘切
腹有之忠義方之儀ト申唱茂御座候得共是以兩様事實得斗相分兼申候ト朱九印付札 ○是又前文同斷事 其外去ル六日若年
寄本郷丹後守様御側御用石河土佐守様茂思召ニ付御役御免ニ相成 朱九印付札 ○本行本郷石河御役御免之節御座候儀
御切腹との唱ニ御座候 是茂御養君之御事賦之様ニ相唱候得共如何可有御座哉

一今般京都御所司代被蒙仰候酒井若狹守様御上京之上之外國御取扱一件是非違勅之筋ニ相成不申様必死之御心配有之萬
一相調不申節之御切腹ニ相成候様内密掃部頭様ト御頼談ニ相成其旨御決心ニ而來ル十五日頃御發足之筈之由極密承
込申候右之御意味合茂有之處方賊外國御取扱御講定之御届として御使者御勤之御老中間部下總守様ハ酒井様ニ四五日
御後登來ル廿日頃御發足之御模様之由御同人様茂品ニよ候而ハ不慮之御處分茂可有之哉ト内々相唱候向御座候
朱九印付札

○本行間部様御上京其後追々ニ相延御出立之節之必死之御覺悟ニ而極内々御崎子様には御別蓋御取扱替等も爲有之由ニ
而此節京都表之首尾御留守ニ而も一方御心遣之處公邊方も段々御手を被廻御所司代酒井若狹守様今度御再勤伏見
奉行内藤豐後守様御兩人ト以前方堂上方之御通りも宜敷其上京表之儀之御功熱ニ而間部様御上京迄ニ内輪之煩悉探
索御調上ニ相成御着之上直ニ御評決水戸御老公方ニ隨從種々御手譯ニ相成候而々等應司様九條様西園寺様杯之諸大

夫水戸様京都御留守居父子を始其外諸浪人者之類數多被召捕諸書付類總而御取上ニ相成右之内鷹司様ニ之御隠居被仰付候由其上 禁帝之御伯父様青蓮院宮様專御取計之事 天子様二三ヶ條不被知名御事江戶に被仰向候儀相願以之外 天子様にも被遊御驚愕候御事柄も爲有之由被是之綾ニ而初發方御主張之御方々も段々御手を被引一旦御引入之御方も御再動ニ相成全躰之勢打變り夫の間部様被仰立之筋段々貫通仕候様相成たる由ニ而最早大概御事濟ニ相成去月廿四日一應之御參内も相濟不遠御歸府之御模様ニ相成御留守ニ而も不怪御安悅之由右ニ付而ハ酒井様御列御三方之御手際殊之外御評判宜候由内々及承申候右鷹司様之水戸様御重縁之由ニ而大坂御城代土屋采女正様之御老侯御甥ニ被爲當候由之處御様子も有之候や御用召之御沙汰御歸府之上御登城ニ不及段御差圖ニ相成直ニ御病氣御引入依御願御役御免ニ相成申候事

一公方様先月下旬比より御水氣之御氣味にて次第ニ被爲差重俄ニ蘭法漢法他藩御抱之醫師戸塚靜海列四人被召出御療治被仰付數多居候御ヒ業に之拜診茂不被仰付由之處御醫師替り一旦之御宜敷御模様之處去ル六日之夕上ニ敷磁ニ被爲差重御苦痛甚敷多分之下血等茂被爲在候由にて内實之其夜御事切候哉ニ相聞申候處元來御ヒ之帳口岡櫻仙院様御療治之處御藥違々申唱ニ而前文之通俄ニ御醫師打替り同様ハ御ヒ被差除跡之半知敷被下候而並醫ニ相續ハ被仰付候由ニ御座候得共直ニ屋敷釘締内外張番嚴重ニ被仰付置候由 朱丸印付札○本文御醫師俄ニ御差替圖除役嚴重之御座ニ相成居候儀者相精々承候候而一向に事實相分不申畢竟者俄ニ御醫師進退等有之候處不相濟明ニも至り申たるや根元調様之何を前文本郷様石河公方様御幼少御療治其其上名高キ内福ニ而右時心得違之儀之決而有之間敷との説も有之儀以疑敷奉存候事

様杯御退役之儀右等之事之醫ニ茂有之候哉近日之恐入たる事ふから專毒中り一般ニ風評仕候右之外御養君様召上り物之内ニ茂怪き事有之其儀之心付取下チンニ給せ試候處忽狂死いたし候様子之密々相唱申候處此儀之不取締之巷説ニ而事實無覺束候得共同様嚴重之締方被仰付候儀ハ相違茂無之且俄ニ御醫師替り等之儀を以相考申候へハ甚不審敷事共ニ而今度前中納言様御列重キ御答被爲蒙仰候一同一橋様水戸當中納言様も御沙汰有之候迄ハ御登城御差留ニ相成候由被是不容易御事柄實ニ薄氷之御時節職ト密々恐察仕候併何を之稜ニ茂極密承込候筋ニ而自然相違之儀も難計其時々口達

を以一應御内意之仕置候得共此節前中納言様御列被仰付之趣を以相考申候得之押而御登城之御康目迄ニ而之有御座間敷敷被是承込候筋首尾相貫キ候哉ニ茂相見申候間不容易御事柄不顧憚一通り書取を以潜ニ言上仕候吳々茂傳承之事而已ニ而事實相違之儀之豫御斷申上置候間御取捨宜奉願候事

安政五年七月十一日

吉田平之助

右之外近來探索仕候稜々左之通

水府御老侯御咎後御慎不宜内々京都に御文通等有之候を 公邊ハ被附置候隠目於途中差押相違候ニ付大略御密事も相顯其儘ニ被成置候而之 御政躰之御手障ニ付松平譜岐守様は御老侯を御預之御評議相決既ニ 上使之御沙汰ニも相成候由之處從來御三家方に 上使之御沙汰有之候得者毎も御事柄者前弘御内意有之候儀前々之御振合ニ候處此節者何之御内沙汰も無之候ニ付御老家初大ニ心遣掃部頭様并御老中方に内窺ニ相成候得共一切御打明無之御當主様にも殊之外御案勞譜岐守様を御招被成候得共初發者御詫病ニ而御出無之再三御中受醫師等被差向候付漸御出ニ相成精々御尋之處前文御願之御模様無據御内話ニ相成御當主様も御驚御家柄ト申他家ニ御預ニ相成候而者何分御忍難被成就而者御藩中之動搖ニも拘り可申彼是御情態等御歎御頼談ニ相成候ニ付譜岐守様御奔走殊之外御心配ニ相成漸御沙汰止ニ相成候由夫迄之水府御藩中も穩之方々憤激之方相半位之由ニ候處右御預之御模様相替候所ハ一般ニ人氣動搖五人七人宛拔々出府いゝし候や之趣相聞候ニ付小金宿邊迄水戸様ハ押へ之御人數も被差出候處都合五百計も所々に宿いたし居候を御諭先月初皆々引取候様相成候由ニ御座候右者一旦人數も仰山ニ而諫言書等差出候御取上無之分之都合六七人程も致切腹候杯種々不穩唱も有之候得共事實士分之百人計之由ニ而跡之郷士躰或之所々之浪人者杯中途ハ聞之傳相加り身元宜敷族者駭々無之由ニ而切腹ト唱候も實者浪人躰之内兩人歎醉狂口論之末殺害壹人者手負之儘極内々ニ而水府之様ニ差送候哉ニ相聞其外浮説流言取留さる儀者様々ニ御座候得共一ツハ證ニ相成候儀ハ及承不申尤前文御預之一條ハ權門之御役々荒打之唱ニ相成夫々種々布演評判不宜様相成候得共是以世上風説之儀者駭々書留候程之儀無御座候且又尾州様

越前様御事之全御老侯ニ御拘被込御誠忠カ一圖ニ爲邦家ト思召彼是御周施ニ相成候處此節之御咎實之御卷添ニ而御勞ハ敷ト御役方之内ニも御密話有之追而之如何様卒御甘之筋ニも可相成哉ト相唱候向も御座候由之事
一當六月權門之御役々々高田之馬場勢揃等之事張札いたし候一條並尾州水戸之御藩中人氣騒立謀反之企有之抔專申觸候者共其外水府御老侯方之御事等種々浮説流言いふし候者共抔段々御不審相掛り近來被召捕候名前等別紙承込候儘相添置申候事

一先月廿日前後別紙朱丸印之面々被召捕其内伊達遠江守様御家來吉見長右衛門儀之兼而御寵臣之由ニ而御秘書類總而御預ニ相成候哉之響カ被召捕所持之書類悉御取揚ニ相成候趣ニ御座候其外之者共も其筋ニ携候處カ之儀ト相考申候事
七月十三日幕府は米國に準じ露國と條約締結のこと及び又追て英佛兩國とも同様の條約を締結すべき旨を達す

〔江戸自筆狀〕

安政五年

以別紙申達候太田備後守様より昨日八ツ半時過被遊御出候様御留守居御呼出被仰聞候付御出之處魯西亞御條約之儀付而御書付一通被成御渡御同席御在府御在邑共被成御廻達候様との旨御座候右御書付寫別紙差進申候若殿様は者御書方致言上候由御座候此段爲可申達如此御座候以上

七月十四日

三淵志津摩
溝口藏人

御家老宛
御中老宛

〔夷事輯録、嘉永風説帳〕(主に夷事回
七年に關する)

昨十三日太田備後守殿宅に相越候様等にて難相成候ハ、在府御同席之内次順カ相越候様達有之拙者罷越候處外國條約御取結之儀ニ付別紙寫之通備後守殿書付被相渡候御同席御在國之御方々にも通達候様との事ニ付則致廻達候以上

七月十四日

細川越中守

猶以御承知之段備後守殿御答御使者可被差出と存候

一重役並其外懸り之役人等拜見不苦候由御座候以上

口演書

亞米利加條約之儀先般被仰出候通無御餘儀次第ニ而條約調判相濟候儀之處其比より魯西亞船渡來去已年假條約取替相濟居候廉々取廣條約取結度旨申立魯西亞之儀者貿易御差許ニ茂相成居候儀ニ付申立之件々精々談判之上取縮亞米利加之振合を以條約御取結相成候處兼々風聞之通此節英吉利船も追々渡來十分之條約取結之儀申立佛蘭西船近々渡來可致由ニ付是又精々及談判申立之條々取縮亞米利加之振合を以條約御取結可有之候尤先達而 叡慮之趣被仰進候次第茂有之候付下總守儀御使被仰付不日上京之上無御餘儀譯筋委細及言上候筈ニ候間可得意候右之通萬石以上之面々に相達候間萬石以上之面々にも爲心得可被達候

七月

七月十四日我藩人士の外人に對する心得を達す

〔安政五年の觸狀扣、江戸機密間日記〕

安政五年

藤本津志馬に

近來異國人所々致徘徊候付御門外に罷出候面々異人ニ對苛察之儀無之様心を用末々ニ至迄心得方精々可被申付候此段觸支配方に茂得斗可被示置候事

安政五年

七月十四日

七月十五日藩主齊護は去ル十三日の幕令に對する米澤藩主上杉齊憲の照會に答ふ
〔神庫文書人印密書輯録三百六十六印〕

(卷込) 細川 様 上杉

(上書) 要用

不調之時季御座候處被爲揃愈御清康被爲涉欣喜之至奉雀躍候然者一昨日太田より御渡之御書付昨日御廻達被成下篤
熱覺仕候處少々不分之所御座候間相伺申候亞墨利加之振合を以條約御取結し申ハ都而亞夷に御取結之件々通し相心得
候而宜御座候哉若又少々増減等有之候ハ、其件々奉伺度存候定而太田に御直談も被爲在候筈と存候間此段相伺申候以
後英佛之二夷に御取結之上も亞夷同様ニ候得者別段ニ猶又御書付等御渡ハ無之儀ニ候哉此段も次手相伺置申候右欄要
迄早々頓首

七月望

當賀

二仲甚以自由奉恐候得共可相成ハ本文之一條早々奉伺度偏ニ奉希候乍筆端時下御自玉專一奉存候御一統様にも宜御一
聲奉希候家内よりも乍恐宜申上吳候様申出候已上

〔全書全三百九十四印〕

上杉 様

拜誦仕候如仰不調之季候御座候彌御安康恭賀之至奉存候然者一昨日太田より被相渡候書付御熱覺之處少々御不分之所
御座候由ニ而御問合之趣承知仕候此節條約之趣都而亞墨利加之振合を以御取結し有之候ハ一條約之事件ハ相替候儀茂
可有之候得共於下拙之太凡魯夷之振合ニ可有之と別段太田に問合ハハハし不申候以後英佛之兩夷へ御取結之儀茂墨夷
之振合と御座候得之趣而同様と申譯ニ之有之間敷別段猶又書付渡有無何程ニ可有之候哉其儀茂承取不申候間何共難及

御返答候下拙心得之右之通ニ付御不安意之廉々ハ直と太田に御問合ニ茂可相成哉と奉存候此段貴酬迄早々申輪候不具

猶々御端書之趣承知仕奉存候貴見に茂時下御自愛專要奉存候家内共にも御加章之趣奉添存候いつと茂宜申上吳候

様申出候御家内様に茂宜奉希候以上

七月十七日幕府は近日英國献上の汽船授受の節祝砲を放つべき旨を達す

〔安政五年謙起萬延元年九月迄
御同席觸寫大目付様御廻狀寫控〕

太田備後守殿御渡候御覺書寫登通相達候間被得其意御同列中并御嫡子方に茂不殘様無遅滞早々可有通達候答之儀ハ先
々從銘々不及挨拶各々池田播磨守方に可被中間候以上

七月十七日

大 目 付

細川 越中守 殿

上杉 彈正大弼 殿

右留守居

覺

近々英吉利より獻貢之蒸氣船御請取相成候付品川御臺場并彼國船々ニ而空炮打放候筈ニ候事
右之趣向々に可被達置候事

七月

七月十七日藩主齊護は幕府監察山口丹波守に返書を與へ松平慶永謹慎の模様日常起居の状況を
報す

〔安政五年
江戸機密間日記、江戸自筆狀〕

安政五年

越前守様御儀ニ付太守様より山口丹波守様に御返言案

御内簡致拜讀候如來論朝夕者冷氣相催申候愈御安寧恭賀之至御座候其後者御疎情不本意之次第候然者先頃御内話有之候越前家一條何程候哉國元杯之意味等御承知有御座度内々文通に而もいたし候ハ、返書等御披見も有之度由委細御多念之御書中夫々致承知候追々御内話之趣ニ付而は重疊思惟もいたし候越前守に直と及懸合ニ茂可申處間柄にハ候得共容易ニハ難申入自然氣受ニ茂障不都合之筋ニ茂成行却而御趣意に相違いたし候様ニ而ハ相濟不申事ニ付甚心痛懸念之次第御座候依之先重役同士無覆穢得斗致談判事實之處具ニ承取候様申付精々爲及相談候處別紙之通ニ付共儘書取ニ致せ候を入御内見申候國許之儀も自筆ニ而示方致候上者子細之儀も有之間敷哉右之外爲差見聞之筋無之頃日より御答及延引段々取急致心配候得共不容易儀何共任心底不申彼是遅々ニ相成今明ニハ是非御答之積之所預御示教心外之至ニ御座候取紛編要計申縮候御許容希候不備

七月十七日

向々御端書之趣忝存候異船も無事故御同慶候時下御厭可被成候以上

別紙

越前守様御事ニ付御家老伯山城並中根親負に内々對談返答之趣書取

一越前守様今度御隠居御儀被仰付候處天保十四年御住居向燒失後假御住居之儘ニ而一向御閉居可被成御間所無之ニ付無餘儀大奥御坐之間上之御間ニ十貳疊御圍切ニ而去ル六日朝四時比御引移是迄之表御住居ハ日向守様に被成御讓候

但夜御寢所ハ大奥御對面所御三之間ニ御移ニ相成候是者御坐之間ニ而者男子之御床番出來兼候故之由

一右之次第ニ候へ者此末御有免之御沙汰も有之少々御普請等無御座候而ハ如何ニ茂御不都合ニ而御生涯之御住居ハ唯今之儘ニ而ハ不相成由
下ニ付札
外御屋敷々々ハ震災風災等ニ而假ニも御住居所無之又御中ニ付御取繕等も難相成依而外御屋敷に御引移と申ハ唯

今御參談も被出來兼候職と奉存候

一右御坐之間御障子御縁側御入側二重共御締切ニ相成居候

但此節之儀故御家來共より相願戻子障子兩三本入候由

一終日麻御上下御正坐被成候

但於表日向守様も御同様御上下御着用御家老初御役人御側向頭役之者共何も上下着用謹愼罷在候由

一御小姓御近習之者共悉く日向守様に御讓是迄被召仕候御小姓之内四人御殘し兩人宛隔日ニ當番相勤外に御家中子供兩人被召出御前詰被仰外右子供兩人之外御前詰ハ無御座候一人は十歳
一人は八歳

一勇姫様ニハ日之内一度夜に入一度御對顔被成候

一日向守様ニハ朝晩夜三度宛御對面被成候

一右之外御身近御親戚様方に御對面無之思召之由

一御家老御側御用人並御用人御側向頭取御廣敷御用人右之分ハ被及伺御前に罷出右之外田安御付御小姓□□□□等ハ伺之上罷出候此外御前に罷出候者一切無之候

一御直書被遺度御問合之向有之候得共惣而御斷問合せ無之被遺候へハ御封之儘御返之御調ニ而勿論御手許より被遺候儀ハ一切無之御調之由

一去六日朝大奥に御移以前今般之御一件ニ付御家中之者共心得違無之様御書付御自筆ニ而御認御家老に御渡ニ相成候此
外御儀被仰付候後御自筆物御間内より出候儀一切無之由
付紙也
本文御自筆之寫別紙之通御座候御國許にも早打を以被差遺候由

一御愼中御正坐而已ニ付御慰と申ニハ無之候得共御看書御寫字或ハ御詩作御歌又ハ小兒共に讀書習字等御教授被成候

一家中一體之愼方ハ當時之處神佛參詣文武修行之外他出等不仕物請ニ相愼罷在候様被仰付候尤御門外より入込候者も諸

家御使者或ハ御家中無權親類等之外他藩之者ハ立入不申様御締ニ相成候
右之通ニ御座候事

七月

越前守様御答翌日歟御自筆ニ而御家中へ御示寫

今度被仰付一件に付定而一統不服之向も可有之候得共我等儀從來丹誠相顯候者畢竟御家門之身故只管公邊御爲筋存詰候儀ニ而一身之吉凶禍福を厭候所存聊以無之事ニ候殊更今般家督之儀無相違日向守に被下置候上者只々御國內之御治平者不及申公邊永久之御榮誓神明可致專祈存居候儀ニ候間家來共ニ於而も心得違不致各其職分相守我等同様日向守にも忠勤相勵候事肝要ニ候萬一台慮ニ相觸候條深畏居候心底を不辨感憤ニ堪兼不平之所爲等有之候ハ、其心假令忠義ニ候共我等存意ニ相叶不申候間何分我等從來之趣意柄篤と相心得公邊之御義慮略に不可存者也

七月六日

七月十八日幕府英國と修交通商條約廿三條貿易章程七則を締結す

〔安政五年の觸狀扣〕
〔文久二年迄觸狀扣〕

英吉利國條約并稅則

帝國大日本大君と大貌利太泥亞および意而蘭土の女王と永く親睦は意を堅くし且其名臣民貿易の交通を容易とせん事を欲して此平和懇親および貿易の條約とおよそん事を決し日本大君は水野筑後守永井玄蕃頭井上信濃守堀織部正岩瀬肥後守津田半三郎と此事を任し貌利太泥亞および意而蘭土の女王ハ日本と越たるエルヂンエンキンカルヂンと命し双方委任の書を照應して下文は條々を合議決定す

第一條 日本大君と貌利太泥亞および意而蘭土の女王其親族并世々と其互の所領臣民の間ニ永久の平和懇親あるべし

第二條

日本大君はロンドンニ在留せる政事ヲ預る役人を任し并に貌利太泥亞の各港の中ニ在留せる諸取締の役人および貿易を處置せる役人を任すへし其政事ヲ預る役人および頭立なる取締の役人は故障なく貌利太泥亞の國內を旅行をへし

貌利太泥亞および意而蘭土の女王は江戸府ニ在留せるためのデフロマチーキアグメント并ニ此條約にて貌利太泥亞貿易の爲ニ開きたる日本の各港中ニ在留せるコンシユル或ハコンシユライル、アグメントを命すへし其デフロマチーキ、アグメントおよびコンシユル、ゼネラールは故障なく日本國內を旅行をへし

第三條

神奈川長崎箱館港および町は安政六年六月二日西曆紀元千八百五十九年七月一日ニ貌利太泥亞臣民のためニ開かす其外次

いふ所の場所を期限の通り貌利太泥亞臣民の爲ニ開かす

兵庫 午七月より凡五十二ヶ月の後より千八百六十三年一月一日

新潟 若都合の事あらハ代々の港を日本の西海岸にて午七月より凡十六ヶ月の後より千八百六十年一月一日

前ニ載せし各港および町ニおるて貌利太泥亞臣民居留を許さへし彼等一箇の地を賃を以借り其地ニある建物を買ふ事妨なく且住宅倉庫を建てる事を許さといへとも是を建るに托して要害の場所を營むへらす此條ニ隨ハしむる爲其建物を普請修補する時日本役人見分せる事當然たるへし

貌利太泥亞臣民その建物ため得る一箇の場所および港々の規定ハ各所の日本役人と貌利太泥亞コンシユルと定むへし若同意しかたき時ハ其事件を日本政府と貌利太泥亞デフロマチーキ、アグメントニ示し處置せしむへし其居留場の周圍ニハ門塔を設けす出入自在とせへし

日本開港の場所ニおるて貌利太泥亞臣民遊歩の規定左のことし

神奈川 六郷川筋を限とし其他ハ各方へ凡十里

箱館 各方へ凡十里

兵庫 京都を距る事十里の地へ、貌利太泥亞人立入る筈に付其方角を除き各方へ十里、且兵庫に來る船船の乗組人ハ籍名川より海邊迄の川筋を越ゆべからず

都て里數ハ各港比奉行所又ハ御用所より陸路の程度より

長崎 其町の周圍ある御料所を限りとす

新潟ハ 治定の上境界を定むへし

江戸 千八百六十二年 一月一日

大坂 千八百六十三年 一月一日

右二ヶ所は只商賣を爲すためのみ逗留を許し此兩町におるて貌利太泥亞臣民家屋を賃を以て借るへき相當なる一區の場所および歩行をへき規程は追て日本役人と貌利太泥亞デフロマチーキ、アゲントと定むへし

第四條 日本に在る貌利太泥亞臣民の間を起る争ハ貌利太泥亞司人の裁斷するへし

第五條 貌利太泥亞臣民に對し惡事をなせる日本人は日本司人にて糺し日本法度と隨て罪をへし日本人或は外國の臣民に對し惡事をなせる貌利太泥亞臣民はコンシユル或ハ其他の官人にて糺し貌利太泥亞の法度と隨て罪

すへし裁斷ハ双方におるて偏頗ふかるべし

第六條 貌利太泥亞人日本人について訟へき事あらハコンシユル館に趣き其旨を告べしコンシユル吟味の上實意と處置をへし萬一差かゝり日本人より貌利太泥亞人として就てコンシユルへ訟を爲す事あるとも又コンシユル實

意と處置をへし若コンシユル是を處置しがた時ハ日本司人へ申立俱し吟味し當然の判斷をなすへし

第七條 貌利太泥亞人日本商人と通債ありて債ひを怠り又者奸曲ある時はコンシユルを裁斷して嚴重に償はしむべし日本商人の貌利太泥亞人と通債あるも日本司人との處置を同様に處置するハ同様たるへし

日本奉行所貌利太泥亞コンシユルハ双方の國人の通債を償ふ事なし

第八條 在留の貌利太泥亞人日本の賤民を雇ひ諸用事と充る事妨ふし

第九條 在留の貌利太泥亞人自ら其國の宗旨を念し拜所を居留の場所と營む事障ふし

第十條 外國の諸貨幣ハ日本の貨幣と同種の同量を以て通用をべし

双方の國人互に物價を拂ふ日本と外國との貨幣を用ふる事妨ふし

日本人外國の貨幣に慣はさむと開港の後凡一ヶ年の間各港の役所より日本に貨幣を以て貌利太泥亞人頭次第引替渡をへし鑄直しの分割ハ差出すと及せず日本諸貨幣ハ^{銅錢を}輸出する事を得并外國の金銀ハ貨幣と鑄るも鑄ざるも輸出すへし

第十一條 貌利太泥亞海軍の爲用意の品は神奈川長崎箱館の内陸揚し庫内と納め貌利太泥亞番人守護を品をのハ運

上の沙汰と及そ若其品を賣拂ふ時は買得る人より規定の運上を日本役所と納むへし

第十二條 貌利太泥亞船日本海岸にて破船又ハ漂着し或は危難を遭ふ來る事を知らハ其所の司人は是を救ひ厚く扶助を

加へて最寄のコンシユルへ送り渡すへし

第十三條 貌利太泥亞商船日本の開たる港に來る時并規定の租税及び通債拂濟して港を出る時水先案内を雇ふ事勝手たるへし

第十四條 貌利太泥亞人開たる各港に諸品物を輸入し賣拂又ハ買入を輸出たる事自由なるへし

制禁外の品物規定の運上納濟之上は其他の運上を拂ふ事なし

軍用の諸物日本役所の外へ賣へらさず尤外國人互の取引ハ差構ある事なし

双方の國人品物を賣買する事總て障なく其拂方等と就てハ日本役人との立會ハす諸日本人ハ貌利太泥亞人より得る品を賣買し或は所持する事俱し妨ふし

第十五條 日本は運上所より荷主中立の價を好ありと察する時は運上役より相當之價を付其荷物を買入る事を談すへし荷主若くは其を否む時は運上所より付けぬる價より從て運上を納むへし承允する時は其價を以て自ら買上るし

第十六條 輸入の荷物定例の運上拂濟の上は日本人より國中へ輸送するとも別へ運上を取立る事なし

第十七條 貌利太泥亞商船開きたる港へ品物を輸入し規定の運上納濟の證書を呈せ之再ひ其品物を他の開きぬる港へ轉致し陸揚するとも重税は取立ざるべし

第十八條 開きたる港より日本商人密商奸曲を防ぐため相當の規則を立るし

第十九條 過料取上もの類は都て日本役所へ屬せしめし

第二十條 此條約より添たる商法の別冊は本書同様双方の臣民互に遵守せしめし

第二十一條 日本貴官又者委任の役人と日本より來る貌利太泥亞國のチブロマチーキアアグメントと此條約の規則并別冊の條を全備せしむる爲の規律等談判を遂ぐるし

第二十二條 此條約は日本英吉利及和蘭語より書し各翻譯は同義同意にして和蘭翻譯をもと見るへし

都て貌利太泥亞のチブロマチーキアアグメント及コンシユライルアグメントより日本司人よりいたる公事の書通は向後英語にて書せしめし尤此條約調判の月日より五ヶ年の間は日本或は和蘭の譯書を添へし

第二十三條 兩國より條約の實地を驗し改革せん事を求むる時は其一年前より通達して再驗を爲すへし其事ハ今より凡四年の後よりはるへし

第二十四條 日本政府より向後外國の政府及臣民より許せしめし殊典ある時は貌利太泥亞政府國民へも同様の免許あるへし此本書は日本よりハ大君の御名と奥印を署し貌利太泥亞よりハ女王自ら名を記し印を調し一年の内江戸より於て取替すへし右取極の由を安政五年七月十八日江戸より於て前より載たる兩國の役人等名を記し調印するを

の也

水野	筑後	守花
永井	玄蕃	頭同
井上	信濃	守同
堀	織部	正同
岩瀬	肥後	守同
津田	半三	郎同

税則 日本開きたる港々におりて貌利太泥亞商民貿易の章程

第一則 (六月十九日の條に在る米國商民貿易章程と同じ)

第二則 (米國の章程と同様なれどもたゞ米國阿片輸入に關する所のみ異同あるを以て其部分のみを左に掲ぐ)

阿片の輸入ハ禁制なる故若日本より商賣し來る貌利太泥亞船阿片の量目三斤以上船中より所持する時其餘量ハ日本商人取上りし且阿片を密商し或は其事を謀る輩は阿片一斤とて二十五ドルの過料を日本役所へ取立へし

第三則 (米國の章程中條約第四條の取極とあるを茲に條約第十五條の取極と記せる外異なる所なし)

第四則 第五則 第六則 (米國との取極に同じ)

第七則 (第一類より第三類に至る迄米國との取極に同じ) 第四類の末文に左の數行を加へたり) 米并小麦は日本逗留の貌利太泥亞人并船乗組たるもの及船中旅客食料のため用意は與ふとも積荷として輸出せる事を許さず

貌利太泥亞船より開きぬる港へ持たりし外國の穀物を陸揚げせざる時は故障なく再ひ輸出せしめし

日本産する所の銅は日本要用の餘分は其時々公けの入口より賣渡せしめし

佛八十一
フラン

神奈川を開港の後五ヶ年より日本或ハ親利太泥亞政府の望みより出港入港の税則を再議す

七月十九日幕府は米使ハリスに對し條約批准交換として我使節渡來の際其送迎に關する米國の申出を謝す

〔風説書等〕

定政五年八月廿五日

一左之書付 御城より清田新兵衛持歸之由

亞墨利加合衆國全權兼

コンシユル、セネラール、トウンセント、ハルリス

此度之條約本書華盛頓ニおるて爲取替之節日本國初而航海之儀ニ付貴國軍艦を以可送迎趣心入之段忝存候我來ル十一月下旬より後、右船被差越候様此段貴國政府に可然申立有之候様存候謹言

安政五年七月十九日

太田 備後 守花押
間部 下總 守花押
久世 大和 守花押

七月廿日幕府英國と條約締結の旨を達す

〔尊攘錄皇武令〕

大目 付に

今般英吉利より使節差越條約取結之儀申立候付再應應接之上願意之趣取縮亞墨利加之振合を以假條約爲御取替ニ相成昨十九日退帆いたし候此段爲心得相達候
右之通向々に可被相觸候

七月廿日也

七月廿日薩藩主島津齊彬卒す

〔御書附并諸御觸達〕

口上書

松平薩摩守様先月廿日御卒去之段申來候依之今日より日數三日諸事穩便可被相心得候此段組々に茂可被達候以上

八月十六日

奉行 所

〔文久物語〕

〔山崎忠和著〕

安政年間の事ふりき薩の村田新八熊本の山田十郎(信道)を訪ひ云へらく醜夷渡來關東の處置一として可ならず 朝廷より援夷の命有るも遵守する能はず遂に天下の形勢も計られすかつて我藩主齊彬京都を過ぐるや潜に天顔を拜し又近衛關白より深き旨を蒙る有り天朝のために盡さんとせられしに不幸此の七月早世せられきその臨終のとき弟島津和泉へ遺托ありて和泉その遺志を續き盡さるゝ有らんと是に由りて熊本人も思へらく薩は隣國の雄藩たり加ふるに故齊彬有爲の資を抱き多年施設養成するところ有りしかるに和泉その遺志を續き事を擧ぐるに意あらは侮とるべからず必ず觀るに足るものあらん熊本藩士劣るべからずと

七月廿日我藩諸侯の各地守護警衛の状況を調査す

〔相模國御備場御用一件〕

〔文中安政五年七月以後に關するものは後の書込ならん〕

所々御警衛等左之通

京都御守護

井 伊 掃 部 頭 様

安政五年七月廿日 御城問合候處左之通相違無之段申來

京都表御警衛

松 平 讚 岐 守 様

來

同五年六月廿一日被仰付

安 政 五 年

二二九

同 松平出羽守様
 同 松平越中守様
 同 安政五年六月廿一日被仰付
 同 酒井若狭守様
 同 同元年十一月十八日被仰付
 同 松平時之助様
 (以下六行上に書入札)
 讚州様京陣警衛付而七條道場金光寺領城州乙訓郡塚原村字弓場ニ而爲御陣屋地四千坪御拜領之段安政六十一月御知セ
 一雲州様同所付而城州綴喜郡八幡庄橋本字燒野邊ニ而爲御陣屋地五千坪大山崎領字關戸裏ニ而兵器置場六百七拾壹坪余安政六十一月三日御拜領之段御知セ
 京都七口御固 本多主膳正様
 安政元年十月十八日被仰付
 (本朱書)
 合類ニ如左所見御固ケ所此通敷
 七口東三條伏見鳥羽七條丹波長坂鞍馬大原
 同 青山下野守様
 同 稻葉長門守様

同 永井飛彈守様
 同 藤堂和泉守様
 同 同五年六月廿一日被仰付
 此 丹羽左京大夫様
 相模國 上總國富津 同
 武州神奈川横濱邊 同
 同 酒井雅樂頭様
 真田信濃守様
 御二方文久元十月十日被仰付
 安政四年四月廿八日臨時御出張被仰付候同五年七月廿六日定御警衛被仰付
 同 松平隱岐守様
 羽田大森 一之御臺場 松平大和守様
 嘉永六年十一月十四日被仰付
 二 松平越前守様
 文久元十月十日被仰付
 三 松平下總守様
 嘉永六年十一月十四日被仰付
 御殿山下 松平阿波守様
 萬延元年四月三日被仰付

五 小笠原右近將監様
 安政六年九月廿七日被仰付
 六 大坂表 松平相模守様
 安政五年六月廿一日被仰付
 同 松平内藏頭様
 同 松平土佐守様
 同 攝州兵庫表 松平大膳太夫様
 同 泉州堺表 立花飛彈守様
 肥前國長崎 松平肥前守様
 寛永十八年被仰付
 藩領譜黒田家之譜ニ所見
 同 松平美濃守様
 同 同京前守忠之様御代
 東蝦夷地シラライノシレトコ迄之内島々共一圓御持場
 北蝦夷地御國筋も被蒙
 仰候安政六十月御
 參勤御警衛御合者御知
 せ之内ニ所見 松平陸奥守様
 安政二年三月廿七日被仰付

西蝦夷地ヲカムイ岬ノ
 北海通シレトコ迄
 林並ニ北蝦夷地其外島々
 々は一圓御持場 佐竹右京大夫様
 (本朱書)佐竹様西蝦夷地マシケ領并ソウヤ領ガモンヘ
 ツ境迄リイシリレフンレジリ島々共爲領分被下之ハ
 ツカイカノツシヤフ岬迄御警衛被仰付候段安政六十
 二月御知セ
 箱館表御警衛併江差在乙部村ノ
 西蝦夷地ヲカムイ岬迄御持場 津輕土佐守様
 (本朱書)津輕様西蝦夷之内爲御陣屋附スツ、領ガセタ
 ナイ領境迄之地所安政六十一月廿六日御拜領之段御
 知セ
 箱館表御警衛御專用
 ニ御心得エサシ岬ノ東
 蝦夷地ホロヘツ迄海岸
 惣計御持場 南部美濃守様
 (朱書)南部様東蝦夷地之内爲御陣屋附エトモ領ホロヘ
 ツ領并ヲシヤマンベガユウラツフ境迄之地所被下之
 モロラン領方ヲシヤマンベ境邊ユウラツフ境ガヤム
 クシナイ境迄御警衛被仰付候段安政六十一月御知セ
 箱館表御警衛御所ノ嶺
 ハ七重瀨島ノ木古内村 松平伊豆守様
 迄御持場之積

箱館表松前地御警衛

松

平 肥 後 守 様

安政六年九月廿七日被仰付

同

酒 井 左 衛 門 尉 様

(以下上に書入れ)

仙臺様以下松前様迄之御五家御持場割者安政二年四月

阿部伊勢守様御差圖之由ニ而箱館奉行支配組頭方申渡

有之候也委曲跡覽ニ詳也

左之御方々様蝦夷地之内割合御領分ニ被成下候箱館表

松前地御警衛是迄之通可被成御心得旨安政六年九月廿

七日被仰付委曲奥ニ記之

七月廿二日幕府は徳川慶福名を家茂と改むる旨を達す

〔御養君一途〕

七月廿一日

一宰相様に御名家茂公に被進之

〔全書〕

宰相様に七月廿二日 御名 家茂公に御改被進候右御勤筋一切無之

内藤紀伊守様御渡之御書付寫壹通七月廿二日大目付山口丹波守様方御同席觸

大 目 付 に

宰相様御名 家茂公に御改被進候旨被 仰出候

仙 臺 様

會 津 様

佐 竹 様

酒 井 様

一左之御方々様ハ御持場之儀是迄之通御心得御陣屋有之

場所ニ而相應之場所可被下旨前誌一同被仰付

南 部 様

津 輕 様

一右ニ付御祝儀献上物等ニ之不及候
右之通向々に可被達候

七月

七月廿五日在府本藩士遠山三右衛門書を在藩加賀山權内木下眞太郎等に贈り英米露各國人の品
鷹、尾水越三藩主の不時登營、彦根城修築及び三家大老招致の勅命等のことを報す

〔異國船一件〕

安政二年

拜呈仕候秋暑に至り稍覺炎熱申候各賢臺彌増御清程恭喜々々楮近來諸蠻使節入都ニ付毎度見物ニ罷出且又旅宿にも罷
越動靜伺見候處中國人輕蔑夷狄いたし候儀漸貫通仕候是迄西洋著書追々致通讀候得と窮理之微妙實ニ驚入たる事ニ候
間蠻夷々唱候而輕蔑致し候儀彼中國人之辭ト相心得居申候處決而左様ニ無之人情逐利忘義窮理之學本を建候様ニ相見
候得共是以只精微を究極する迄ニ而元來ハ濫巧之種と相成誠ニ末を逐本を捨候ものと相見へ上下禮讓之節ハ置而不問
歎ト奉存候見聞之趣一二左ニ記し申候

墨夷使節ハルリス寓居之様子彼館ニ相詰候者より承り候趣朝夕摩牀等自ら辨し衣服并履等自ら洗ひ申候彼自尊大とし
て大邦之使節彼國ニ於て高貴威嚴ふる高官之趣ニ大統領呈書中ニ記載致候程之事ニ候へ共旅寓中之様子一人之僕従も
無之諸事自ら辨まる事上下禮節無之俗ト可申歟登城並老職宅に罷出候節も無禮之穢々有之たる由是者彼敢て無禮之振
廻致候ニハ無之全不知禮義之所爲可憐可笑然ルニ辯論機智實ニ可駭ハ其人才器秀絶故ト奉存候所々遊歩いたし諸物を
買求候之全く己之氣ニ叶候物計求候と申儀ニ之無之他日交易相初り候節豫ニ我國之産物品價を承知いたし寒欺たまと
相見申候利を争候儀此一條ニ而感心仕候魯夷愛宕山下眞福寺ニ旅寓内々罷越様子致一見且寺僧等ニ承り候得之墨夷と
違ひ稍禮節も有之殊ニ恭順之容体ニ相見へ上下之尊卑も相應ニ有之哉奉存候老職邸ニ罷出候而も至極正敷相見へ心底

之相分不申候得共稍大邦之使節とも可申敷ト奉存候
 英夷芝新錢座より上陸旅宿芝金杉西應寺に罷越候節見物ニ罷越西應寺へも内々罷越様子伺見申候處惣休騾慢無禮之様
 子西應寺門内外ニ道心外御役人も始末相詰出入を被禁候得共彼一向聞入不申勝手ニ出入買物等いたし私罷越候節も西
 應寺横ニ鹽物賣見世有之候處へ英夷一人鳥鬼奴一人立寄鯉の干物を求候様子ニ而生あるら頭方喰ひ申候其日使節初
 都合八人大師河原へ遠乗與力馬上ニ而差添罷越一連之日本橋方へ罷越京橋酒店ニ入込酒食をいたし候山又一連之鳥鬼
 奴打雜り神明前邊買物ニ罷越候よし右之通勝手ニ罷出候上途中ニ而も一人東ニ差一人之西ニ差罷出候様ある儀も有之
 附添之者手足り不申異人計リニ而勝手ニ遊行いたし御役中も甚迷惑心配之様子ニ御座候老職邸ニ罷出候而も泥履之儘
 ニ而坐敷へ罷通り馳走出候得之匕箸も無之魚肉たり共手指ニ而引裂喰申候而骨ハ疊之上ニ投捨申候大方犬馬ニ近く相
 見申候尤敢而無禮を行候と申筋ニ而之無之國俗右之通と相見申候可惡可畏ものと奉存候餘り珍事ニ付奉備覽申候餘
 之追而記載可申上候以上

七月廿五日

遠山 三右衛門

加々山 様
木 下

二白公邊毒殺之風説元より虚談たる趣之市郎兵衛殿迄申遣御飛脚只今被差立難裁筆御推察可被下候
 三白黒夷先恭願魯夷之謙願英夷ハ騾慢異日災を生し候ハ、必英夷魁首たるを奉存候
 一六月中旬黒夷約束調印ニ付三親藩御申合ニ而御登城御大老へ御應接被成度御申入井伊侯太田侯御應接之處尾水二侯御
 問ニ外國調印之儀如何御所置ニ相成候哉承度と被仰候處井伊侯答ニハ日本ハ小國也四海萬國を引受獨立難成彼非有野
 心依而調印相濟候との趣二侯忽御忿激ニ而天朝之御慮も永世長久後患無之様との御沙汰追々有之候處御重職征夷之
 御大任を被賦天朝之御慮も不被爲叶是違勅と申者也違勅ハ則朝敵也天朝之命を奉するハ徳川家之任也此儀誓而御沙

汰戻り有之度此段御直訴可申上と其座を御立被成候處公方様ハ御不例之趣ニ而御對顔難叶深更迄御激論被成候との
 事又越前侯ハ繼嗣君を一橋に御讓被成度當時御英明も有之天下目を属する所也今不容易時節ニ當て繼力十二三才之幼
 君を立如何して天下を指揮せん哉ト深更迄御論判ニ相成其後思召有之三親藩押隠居被仰付其罪條不分明ニ依而尾水二
 家臣十人二十人中合せ御大老に主人之罪を顯明被仰付度と伺之たま江戶表へ趣候山
 一方今不容易時節變態難測ニ於て彦根侯ハ城中普請有之其詞ハ京師至而御手薄ニ付一端變革も於有之之守護も出來兼
 候間此城を修覆シ今上を此城中ニ奉守護との由實ハ奉禁鋼計策ニ而此後之大老職方京師御固メ之由也
 一京師大坂江戶三都之内ニ而政事之得失表情を唱候者ハ悉く束縛被致候山已ニ江戶内ニて表情天下之事を論スル者五人
 揃捕獄屋ニ下シ候由其奸謀ハ水野土佐守方役人に申付致し候山
 一六月廿九日早打を以三家大老職之内登人京都に差登度山勅諭ニ相成候處俄ニ三藩を押込三家之罪有之隠居申付大老
 此通不分京都ニ御返答申上候者無之候段御返答ニ相成申候山
 此節三藩押隠居ニ付而必定幕府中奸臣有之此謀策を立候者あるべし此三藩ニハ其罪ふし沙汰戻り致し度左も無之
 ハ天朝方御引受被遊諸大名ニ輪旨を下され奸謀之有無實否御吟味可有之段御押へニ相成居候由其後之事ハ不相分
 七月廿八日幕府は對外關係良好につき安心業に従ふべき旨を大坂市民に達す

〔夷事輯録〕

大坂市中へ御達

外國船江戶近海へ追々渡來并當地警衛等手厚ニ相成候ニ付而者之事情不辨者ハ不取留浮説を唱へ自然と町人共畏縮之
 念を生し取引ニ拘候哉ニ相聞以之外之事ニ而人民御安靜之御仕置故掛念之無事ニ付以後無危踏産業手廣ニ致し尙大
 坂町中繁榮之古ニ立戻り候様相心得可申段此上大坂近海へ異渡來致し候共野心を以乘込起柄ニ之條約相添候上之儀ニ
 候間心得違無之様寄々可申論候以上

安政五年

二四五

午 七月廿八日

七月廿八日幕府水戸家の取締を嚴にす

〔安政五年四月廿
萬延元年六月迄御記録〕

御坊主より差越候寫

七月廿八日御祝儀居殘如左被仰渡

松平 讚岐守
松平 大學頭
松平 播磨守

右水戸前中納言殿御儀之處如何之風聞有之候付猶嚴敷
御取締被 仰出水戸殿御家政向之儀茂諸事御心附萬端
申合取扱候様被 仰出候由委細之儀ハ不相知

御呼出有之

水戸殿家老

兩

人

右前文被 仰出候趣且万端御取締向嚴敷御心附被爲在
候様中納言殿に可申上旨之由同斷

御禮後居殘

紀伊殿家老

水野土佐守

尾張殿家老

竹腰兵部少輔

右前文被 仰出候付而之中山辰吉儀幼年之儀ニ茂候間
諸事申合御取締向心附候様被 仰出候由同斷

大目附

山口丹波守

御目付

野々山鉦藏

右前文被 仰出之趣ニ付駒込屋敷に時々見廻り之儀被
仰付候由同斷

一町奉行に詰合無之ニ付御書付を以被仰渡候付駒込屋敷
内外爲取締與力同心共爲見廻同様被 仰出候由茂委
敷事ハ不相分候

七月廿九日横井平四郎書を家郷に贈り松平慶永奇禍後越藩の状況を報す

〔内藤文書〕 (内藤游
氏所藏)

六月十日之御狀相違難有拜見仕候先以奉始御母様益御機嫌能奉恐悅候隨而私儀相替り不申壯健ニ罷在申候間御安心可
被下候然之此許大變ニ付而ハ典次罷歸り二三日内ニ之着仕り可申才御承知可被成誠ニ非常之大變ニ御座候へ共御家
中町在共ニ人情總て居り合候間少も氣遣い無御座候さすかニ明君之御徳義と感心仕候就而之私事晝夜彼是と心配仕近
日漸ク閑日を得既ニ一昨日ハ南川と御留川ニあい漁ニ参り近日之鬱散仕候是も重役之面々より頻ニすゝめニ而罷越候
事ニ御座候江戸方も追々飛脚到着ニ而様子承り候へハ此節之事ニ而天下之人心彌以中將様ニ歸服仕計ニ御令名きひし
き事ニ而とても長ク此通りニ而ハ決して濟不申何ニ不遠御開運可有御座必定之御事と奉察候

當年御幕方之儀ハ典次ニ才申聞候間御承知可被成略仕候此節ハ替り申儀も無御座候此段迄申上候以上

七月廿九日

横井平四郎

御母様

至誠院様

おいつとの

おつせとの

向々此紙面ハ典次御許出立後ニ着仕り可申候典次歸リニ御土産可被下夫のミ相待申候何ニ九月節旬前後と相考何も承
り可申と大ニ相樂ミ罷在申候以上

附紙

水府ハ老公御附近引替へ候様被命猶又太田丹波守鈴木石見守再ひ執政可被申付旨御沙汰有之此兩人ハ奸黨之大將ナ

安政五年

二四七

リ當中納言公此節ハ在外之憤發ニ而兩奸被用候事嚴敷被相斷いまた落着ハ承り不申何ニ次之飛脚ニて知レ可申候老
公附安島彌次郎ハ當公附と成り何某と賊申もの水戸を參り老公附と成り候由此ものハ惡敷ものニ而ハ無之との噂承
ル
尾張ハ下タ地一致いたさず田宮彌太郎專君公一味より竹腰ハ君公と別種ふり此君臣相離を候色々之申分さし起り
居候處ニ此節之大變參り甚以六ヶ敷有之候處成瀬當年十九歳大ニ議論を發し何も無事故相願田宮ハ御隠居附と相成
り候成瀬ハ後來頼ミ有ル人物ふり此許ニ而ハ左様之混雜一切無之流石ニ君徳感心いたし候以上

七月廿九日長崎に於て内外人の衝突あり

〔夷事輯録〕

領事官に

七月廿九日八半時比異國人貳人長崎村小島郷開千疊敷ニ有之候二三ヶ所之井戸を杖ニ而搔廻し候付惡病流行之折柄愚
昧之小民共ニおつてハ異國人井戸へ毒藥を入候より流行病有之杯騒立小島郷金太郎外五人其場ニ立越候處異國人逃去
候故右之もの共追行候節追々見物増加り多人數騒々跡ニ而船大工町迄追行候處異國人共木切を投付候ニ付此方も
同様投付候段申立候へ共外國人出帆後之事ニ付事情不分明ニも相聞候得とも何まニも兼而申渡之趣相背キ及私闘候段
及察討國法通戒置候
一先月中魯西亞人及打擲候者ハ及吟味候得共夜中之儀今以本人相分不申候魯西亞人ハ承候得之人立繁キ所は分入候節誤
而日本人押倒候付其者憤りを發し打擲受候得共相手不分上ハ申分無之趣申聞候尙本人相分候ハ、其次第二寄り察當ニ
及へく候
右ハ此度被申聞之趣も有之始末一通り夫々觸渡且郷中にも同様申達置諸事所役人共取扱候間渡來之外國船にも右之
趣寄々被達置度尤郷中人家間達之場所ニ至候而ハ市中同様ニハ一時行届兼可申候ニ付遊歩之もの共心得ニ而斟酌有之

候様是亦申聞置度依之別紙相添此段及答候謹言

年八月

荒尾石見守

七月某日我藩學時習館教官加賀山權内等藩政府に建白して幕府對外措置の宜を得ざるを論じ本
藩宜く正論を執りて官武の間に盡力せられんことを庶幾する意を陳ぶ

〔江戸自筆狀〕

安政五年
累表一件ニ付而者先達而交易御許容之儀 禁廷に御伺之處於京師茂種々御評議を被爲盡 勅諭之趣公邊御伺通りニ者
不被仰出下田條約迄之處ニ而御取切ニ相成可申旨被仰出候由左候得者 勅旨を被奉候時者外夷之願意ニ違ひ外夷之願
を被達候得之 朝廷之旨を難被奉至極大切の御場合と奉存候處公邊之御沙汰者不相替御平穩ニ被決候由全體累表御取
扱是非之間者至極明白ニ有之縱令通信通商時勢相當之御處置ニ仕候而茂土豪彼より強而申立候儀を無餘儀御許容被爲
成候儀御國威ニ差碍り武道之瑕瑾無此上海内之士人解體之根元と相成居其上數多之港を開き存分之仕方ニ及候而者所
詮天下之大患ニ相違無之於 禁廷深く被惱 徹慮候御儀乍恐御尤千万ニ奉存候惣體京師ニ茂御國政之儀者兼而關東に
被任置候御儀ニ御座候得之御存寄と申儀者是まで御見合茂有御座間敷候處至此節御異儀被仰出候者徒らに條理上之御
正論ニ而無謀之御英斷ニ出候ニ茂有御座間敷畢竟天下後世之儀を被爲思召照不被得已御儀と相聞候得者公邊是迄之御
主意を強而被爲違候而者乍恐東西御一致之實顯を兼自然腹心之柄を醸成候様ニ茂相成候而者以之外之御大事ニ而乍恐
東照宮御以來 禁裡御尊崇之御主意立兼萬一疑惑を生候向茂出來仕間敷共難申候既ニ近日ニ至候而者某之藩ニ之參勤
御斷之願爲有之杯流言致し全く無實之事とハ相見候得共不容易流言ニ而此十ヶ年以前ニ候ハ、戲ニ茂口外難致儀を陽
ハニ書而ニ書載無俾取はし候様成行就而者諸國之様子探索仕候體之者茂律制致し候世上之唱茂有之關東之隱目と申
迄茂無御座藩國五ニ人氣を相探候様ニ茂何なく相見専ら東西御主意從違之界武備之虛實ニ目を付候者ニ而可有御座重

安政五年

二四九

疊不穩世之中ニ而國事を被荷候御方者屹と心を可被留御儀歟と奉存候當時之模様を相考候ニ墨夷之一件當前穩力之御取扱に相成候得之却而御國內之疑惑を生混亂之端とも相成可申右を被鎮候ニ者外夷之猖獗を不被抑しては難相濟一ツ一ツ逆茂難免勢ニ而執を取り執を捨て可申哉天下之事ハ天下を荷候者之責ニ而外向より如何ニあへき候而茂無益ふる儀と申然説茂有之候得共夫者尋常平日之心得ニ而此節之一件ハ皇國の大事天下後世之批判ニ茂相係り公邊ニ於ても御一己之御處置難被爲出来故業議被仰出候儀ニ可有御座左候得者公邊之御處置ハ天下諸侯之御處分ニ有之天下諸侯之御處分者一國君臣之御決議ニ有之候殊ニ御家之儀者御先祖様御以來公邊別段之御親意を被爲蒙候上上ニ者殊ニ御並様方御帳口ニ被爲在候御事ニ御座候へハ此節之御參府公義業を初諸家様方執も御待受被爲成候哉に致傳承非常之御時節御憂勞之程を末々茂深奉恐入候得者要路之御方々様ニ者日夜深思を被廻候御儀と奉存候處於末々ハ國是之趣一向承知不仕墨夷之一件東西之間不易風説等者不相替流傳仕何程之時勢ニ御座候哉全體世間之事ハ餘り利害ニ而已拘り候得者後日之禍測られず候義理明白之處分仕候へハ假令目前之難儀者有之候共却而無疆之福祿を保ち候儀自然之道理ニ而蟹夷押而之中出を取上 朝廷之御正論ニ被違一時之苟且を以國家萬世之患を被招候儀其是非得失不待辯して自ら明白可致候ほのかニ昨今の御模様を承り候得者最早條約御調印茂相濟候山左候得者何事茂跡事ニ相成兎角可申出筋ハ無御座候得共時勢之變化此上尙如何程茂可有御座候得者義理明白條理貫通之筋合を以無御伏願被仰立候方則 禁廷に者勿論公邊に被對候而之御忠節と奉存候自然公邊是迄通り之御所置を以無御餘儀筋と而已被爲思召上萬端被遊御從順候様ニ茂御座候而者公邊之御爲合ニ無御座且ハ後日深き御心痛之場合茂有之間敷とハ難申候就而者猶後々茂有之候得共先ハ大意之御書付奉入御披見候不束之私共不易儀を彼是奉議候者恐入候儀ニ奉存候得共學職ニ被召仕御國是之趣承知仕居候ハ、教導之心得ニ茂相成可申歟と奉存候間不願憚如此御坐候以上

七月

加賀山權内
井口呈助

辛島多喜次
中津海平之進

木下眞太郎儀者別紙一名之書付認差出申候間名前相省申候

異國人開港建館内地に難居いたし候儀治道國體を損候而已ならず無窮の禍を抱居候事公邊御見通に相成居候間墨使申立の儀初發御本意に叶不申追て 禁裡の旨も御同様被爲有候處近來は彼申立の通御取扱に相成山風聞仕候恐察仕候處御拒絕に相成戰爭に至候ては御不手捌の儀有之候而の事には有御座間敷哉日本御不手捌と申儀私共式存當可申様は無御座先哲存付の趣等を推て相考候得は江戸表の儀列藩隔年の御參勤御家内様方悉皆都下御住居に相成候付て諸國の御人數餘計に詰込都下の繁昌其勢止るところなく工商遊藝の徒海岸まで充滿仕候處粮物の一事にいたし候而も浦賀一口の運米を仰候儀平時たり共釣合不宜別而異船乗入機之亂妨にも及候は、市人騷擾の害却て敵勢を助け諸國詰込の御人數は受々の世話御座候て御城向御警衛の實用極而乏敷可有御座短相替候得者家内雜りの酒宴の席に拔身の曲者入來候様なるものにて不本意の取合も依之出來仕候假令一日不取合に候共其跡は是非宴席之體を引替屋内の人配り足捌は指圖に及可申道理にて外國の禍目前に相迫り候付ては斷然と御仕法變り可被爲在時宜にては有御座間敷哉新地御築立海岸通り人家御取拂の儀も有之哉に候得共暫の間筒音を聞遠に聞候迄にて御内向不相替候は、御用には相立中間敷何様都下一回清肅の御仕法には先つ列藩御家内様方悉皆御國住居被仰出都下雜人の内氣力有之防火の用にも可相立ものは軍仇の末に補圍し其他は或は本業に歸し又は實用の工商致させ假令一時に相片付不申とも堅壁清野の端相立不時の騒動且粮運不足の御氣遣薄相成可申候又御國主御城主方者隔年の御參勤を四五年に一度精銳の働人數軍行の實備を以一年宛江戸の御警衛被仰出其内を以京都の御守護彌以御嚴重に被及御沙汰領地の遠近要害の緩急軍役の歩割等共宜敷を得永久無累様東西相響き合人心一定いたし候は、御根本の實力當時に十倍いたし可申候於列藩は當時の勢先家を擧ての旅ぐらしにて年々の物入は戰國同様可有御座國に有餘無之を以自然と武家の養不優各境の手當實は調兼

候を以御根本の策應出来不仕儀も可有之就ては兵家の忌を犯し遠國の兵役を被移候に至り是以實力乏敷御座候處萬一四周の海岸所々に寇至候節は何事も六ヶ敷可有御座候得は前文御參勤の間年を以農を養兵を専ら實備の御手當に相成候は、是又各境防備當時に十倍いたし可申候此一事にて關國の御手擲官敷隨て京都御尊崇の御本意彌著しく人心一致の覺悟奥深く相立可申候不案内の説には諸侯參勤改り候は、内變の御氣遣可有之と存候事も可有之哉小山御陣にて御隨從の諸將方御暇被下殿有院様御代には諸國の御人質を盡被差返明曆大火の節は在江戸の列侯方不殘御暇被下候等赤心を推而人の腹中に被爲置候儀乍恐東照宮御以來の御英謀に被爲有隨て列藩の御心服は彌増に相成候は前文の儀於公邊は被爲在思召ものと相見近年右に類候御達も有御座先頃の御渡書付と唱候ものにも御國威御更張の機會可被爲有御大變革との儀も相見候處自然は太平の形を被變候様に相紛れ或は御しらへ筋際取候にては有御坐間敷哉乍去此儀御決斷にさへ相成候へは御趣意は即日上下に貫徹可仕候明曆大火の節在江戸の諸侯不殘御歸國の御暇被下候は松平伊豆守様御計ひにて御三家様方にも跡以被成御承知候程に急速の御計にて御座候由井正雪逆意を企放火を謀候は其前年の事にて未だ人氣も不穩時節に候處都下糧物難澁可仕との一條を以右の通の御下知に被及候まして今日非常の御時節に當ては列藩御家屬様方より右の御見合を先被取行御詰合の諸家様方の内東西御警衛の御練合大調を以一同御下知に相成候儀は最安き御事に可有御座其上は國郡一統創業の時節に立戻り百事漸を以舉り可申候得共第一虚費を省て軍備に供するの一條は先大奥向より非常の御標準を被爲立候は、御趣意眞實に相響き人心興起御中興の期と相成可申候勿論此儀御外見の爲には無御座候得共參合せ候異國人其形勢の端緒を伺ひ見候は、如何存取可申哉外を制するの勢後日を待に及不申萬一異變有之候とも戦は氣を主と致候由人心一致の覺悟相堅候上は御國體を不被損御處置は如何様にも出來可仕奉存候

一英國より魯國の出口を塞候ため蝦夷地拜借の願望有之哉に取沙汰仕定て少々は兵威を挾罷出可申候處皇國是迄魯英等の國に怨仇無之魯國の儀は別して御隣好の趣に被仰聞候事も追々有之假令魯夷何方に出候とも我疆場に懸合無之を英

夷の願出に依て右を塞候ため土地を御借渡にも相成候は、魯夷に被對怨仇を招候而已ならず墨英二國も其律義ならざるを侮り可申候敵味方の無差別律義なるものは難侮柔弱卑屈の仕方は味方よりも併呑を受申候此節假條約の内にも合衆國のある魁親の獨立國と日本戦争の間は軍に付禁制品々は輸出せすと相見へ此筋を照し候得は他國の軍争に付無懸り合國より土地を借候譯無御座候儀は墨英共に了解可仕候尤兵威を挾候は、是又諸家様方御存寄も可被爲聞召上候處其事柄は墨使よりも迫切に有之其筋合は互市よりも重かるべくと奉存候

右の二條は都て公邊御處置の儀に候を分外に私議仕候様に相見へ候段は重疊奉恐入候然處本意且以左様の筋に無御座此御の儀は先希代の御難厄條約一條に止り中間敷追々諸家様方に御問合に相成候儀も可有御座候處於公邊指當ての御方略は被差置異國人の儀者御不意の御處置に相成候ては天下の信疑如何程に可有御座乍恐於此方様は御家柄と申上御德望と申上公邊よりも御依頼に被爲思召にても可有御座候得者國家最急の御方略筋上は、禁裡御尊崇の筋を被遊御獎順下は一統人心の公論を被爲思召上公邊始終の御爲合に相成候様無御嫌疑被爲仰上候儀御忠節の御本意と奉存上於其筋者乍恐深可被爲有御心配於御老職様方可被成御案勞御儀と奉存上に憂あれは末々下賤の者迄も心得筋有之もの、由承り及候間私共式可然存付可有御座様も無之候得共聞取候事とも考合せ萬一御探擇の一ツにも相成可申哉と奉存不願禱書取候て入御一覽申候尤内外の事皆風傳の儀に御座候得者問違の儀も可有御座其分は御用捨被成下候様奉願候以上

七月

木 下 眞 太 郎

別紙の通先哲の存付等を以當今時宜を論候得は公邊指當ての御急務は御仕法替に有之候と相見へ候處非常の儀に候得者假令被爲在御忠告候とも被行可申否の儀者勿論難奉量候得は右に不拘於列國は各其國の御手擲を仕替上下一致各其主君の社稷を保護仕候覺悟筋是又至急の事職と奉存候世上の取沙汰墨國交易の御取組に相成候へは外々西洋の國々餘計にそめき來り候迄にて永く戦争は無之ものと存候體に御座候墨人の内情可恐儀は不及申當時宇内の形勢魯國大印度

安 政 五 年

二五三

迄打出居候上カムサツカの地方より滿州の故地蒙古等を押して清土に手を付け印度の手先と東西兩道の働可仕含の山中傳候左も可有御座哉近年蝦夷に手を付境界の事杯急に及御座候事に御座候扱又西洋諸國は右の進前を恐れ蝦夷三韓臺灣等の地を借り兵卒を籠置魯人東手の出口を察候計略有之趣申傳左も可有御座哉イギリス人蝦夷借地の物音仕候左候へは南北の争場不意に皇國の北壁に相當り申候尤も此節清國に者「イギリス」「フランス」「ロシア」「アメリカ」一同に仕懸存分相勝候趣を申浦賀に罷越候をロシア船も「イギリス」「アメリカ」同類の様御座候萬一は利方有之節は南北御合相仕事仕候も難計又はヲロシア船と偽り南北合體の體を拵らへ恐嚇仕候哉も難計何様四方の國々商賈合戦一と續の手を以人の國に心を懸け間近く清國杯者争戰の巷に罷成候獨皇國而已不思議に此迄太平を歌居候處寇亂の萌此節頗々相見緩急速速固より難計一日揉立候節に至り候ては一國相手の條約等は頼に成不申専ら義理武略を以存亡を争候外無御座候且氣運將衰の時大政一致の道を失候得は天下の心志義理を不存親疎離合油斷離成無存懸儀も差起候習有之一所の變は天下中の處分と相成内外ともに其勢可恐事にて兵備の儀は誠に難差延候處武家百姓軍制器械當今の儘にて直に取合せられ候ものに御座候哉不案内の者にては後目は存不申候得共萬一御深慮の趣不相顯を以士氣相弛目前の實禍大そやかに相見へ民事切詰に相成農力不足仕候儀は有御座間敷哉軍制器械古今の利鈍を殊にし候儀は有御座間敷哉別而士氣民力相衰候ては軍制器械も用立不申候間若左様の弊も御座候は、乍憚一刻も御油斷被爲在間敷儀と奉存候當時御深謀の折柄無用の儀に御座候得共心底の程無殘速御聞申候空疎の段は御取捨被下候様奉願候事

八月某日時習館句讀師大浦彦之允藩政府ニ建白して時事を論す

〔安政五年 江戸自筆狀〕

袖 扣

此際江戸表之取沙汰付而は下賤之者共迄も今日之挨拶之様ニ申ふらし甚説區々ニ而取留候事ニは無御座候得共心細き

者假令彼爲在御忠告候とも被行可申否の儀者勿論奉量候得は右に不拘於列國は各其國の不手捌を仕替上下一致各其主君の社稷を保護仕候覺悟筋是又至急の事職と奉存候世上の取沙汰墨國交易の御取組に相成候へは外々西洋の國々餘事而已を承り慶味之私式猶更當否之辨別も付兼速感仕候得共國家之安危を奉氣遣只管案勞之餘り不願憚煩悶之一を書綴申候

一アメリカ御處置ニ付御答之儀ハ最早跡事ニ相成重角可申上様も無御座候處今度尾州水府越前之御方々様御答筋ハ別段不容易御儀ニ而天下之人氣彌以相さだも候儀者申迄も無御座右ハ内實如何様之御失徳被爲在候哉者外向より難計御座候得共必竟ハ外夷御取扱筋西丸御世繼之儀ニ付御直言被爲在候より之御儀と相唱素より徳川家之御爲を被存候御心底より出候儀ニ可被爲在候上別而御家柄之御方々様ニ候得ハ如何ニ被爲觸忌諱候御事有之候共非常之御答等被仰付候儀ハ御時節稍と云何程之御儀ニ可有御座哉全體右之御方々様ハ當今有名之諸侯方大略御同志之様ニも風聞仕格別京都御津敷も厚被爲在候由ニ御座候へハ定而 設慮ニも相叶御頼母敷可被爲思召上御人體と奉存候處右之御答も被爲在而ハ彌以 設慮ニも不被爲叶人心之歸向ニも相係り不容易御儀と奉存候且又世間之有様ハ瀾瀾ニ替る習ニ御座候得ハ江戸之御役々様方ニも月日之間ニ御轉變有之候得ハ此以後逆も公邊之御模様打替り可申哉も難測勿論是迄之御處置義理人情ニも相叶候ハ、如何ニ御隨順有之候而も可然儀ニ御坐候處自然左も無之此節之御所置不服之向も有之候ハ、公邊ハ關此方様をも奉問然候様之儀も有之問敷とも難申候且又此節房相御預之御方々ニハ上方筋に御取替被仰付候由ニ御座候處此方様ニハ其儀不被爲在候ハ一段御首尾之由其上御屋敷まで御拜領被爲成候ハ必竟諸事被爲居故之御儀と奉存候得共臨々ニハ御掾家様を初歴々之御方々様重き御答之御折柄其御家中之情態も被察候處御國ニ限り御評判宜敷被爲在候處ハ些世間ニ突出し候様ニ而乍恐餘り結構被爲過喬木風多高明憎を受る之戒も有之候得ハ急度御深慮を可被廻御時節ニハ有御座間敷哉と物ニ奉案勞候情當今之勢を相考申候に外夷之事ハ關天下動搖不一方表ニハ太平之姿を顯し實者劍戟なき合戦ニ而第一ハ東西之御趣意御異同有之諸國ニハ諸國之向あり國元ニ而も銘々之向々異り右等之儀者素よ

り御油斷ハ有御坐間敷候得共萬一世間之成行而已ニ任せ被置候而ハ如何なる混雜を生し可申哉も難測實ニ隱息之間を
も待申間敷費へハ尾州越前ニも事起り候ハ、東海道中山道北陸共ニ江戸に之往來ハ斷絶可仕上々様方御披きハ如何御
仕法付居可申哉誠に奉氣遣候勿論兼而御供しらへ等ハ被仰付候由ニも承り申候得共夫ハ夷人亂訪等之節之御事ニ而可
有御座掛ル時節ニ相成専ら公邊の御趣意を而已被奉候而ハ八方ニ御障り出來仕間敷共難申候仰願ハ以後之御所分只一
と筋ニ中道を被爲踏東西之御調和且列藩之遺念を被爲晴候御慮置有御座度奉祈候
右者迫切之餘り不都合之文面も可有御座候得共其段ハ御用捨被成下候様奉願候以上

八月

大浦彦之允

八月四日書を宰相中將橋本實麗の邸に投して永野義言閣老問部詮勝の意を承けて西上し島田左
近と共に事を謀らんとすと告ぐる者あり

〔夷事輯録〕

八月四日夜京都ニ而投文

諱而奉申上候仰伊井掃部殿家來永野義言と申者七月下旬江戸發足此頃御當地に着いたし候其子細之間部下總守上京ニ
付第一九條殿下を取替ひ其外所々へ取入程能相計候様下總守親敷相頼候ニ付上京致し候儀分明ニ御座候同人事當春以
來都而三度致上京候島田左近ト相計外夷條約調判之事杯ハ内 勅之旨を以而押強く異存申立候有志之大名建言ハ不取
用且一橋君を拒み幼年之君を西城へ取極尾水二家并越前者壓倒候事其考紀臣之水野土佐守ト相計候次第皆義言所爲
ニ而右之又此度も左近を以上を繕ハせ更ニ久我殿中山殿を初其他所々へ取入密計可施結構有之哉ニ候間御油斷難相成
儀ト奉存候右義言儀ハ邪智之小人阿諛佞諂を以近來掃部頭之寵遇を得て被出頭候重々謀計を運し遂日將軍家之所置及
流動候様之基を開キ多恐も奉慎 假慮次第言話同斷實ニ神州之大逆此上不可有者ニ候右此許之當時江戸同志之者方密
使指登候左近義言は指問候密書殿下御書付被遊候物語も有之候書翰之寫迄も指登申候此等之儀義言が謀計ニ而偽作

之程難計候へハ何分不審易事故御當地ニ而有志之面々相談之上奉言上候御買察之上早々御配慮被爲在度奉希候頓首
々々精首謹言

八月四日

大日本有志 申

橋本宰相中將様閣下

八月五日本藩管轄地内猶不便の村落少なからざるを以て更に便宜の地と交換せられんことを幕
府に申請す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

増御預所之内去十二月村替被仰付候殘分猶又此節村替願之書付八月五日海防御懸御月番太田備後守様御勝手に吉田平
之助持參御用人を以差上御落手

去十二月増御預所被仰付候武州多摩郡之儀者一回相勝永上納專之々所ニ而備手人數粮物之貯出來兼候譯を以御取米專
之郡村に村替奉願候處高壹萬五百石餘之内五千石餘郡高座郡之内ニ而村替被仰付石代金納御開濟ニ相成先者右丈
ニ而及粮物之備相増候仕法相立難有仕合奉存候然處今般相備松平大膳大夫殿始受場替被仰付候跡當分代りハ不被仰付
旨御達有之就而ハ越中守受場之儀一手持之姿ニ相成其上近來諸蠻之船頭々渡來付而ハ彌以備向手厚之仕法不仕候而ハ
無心元殊更神奈川におゐて開港を茂被仰付候ハ、相州御備場ハ勿論江戸表手當之儀茂是迄之通ニ而ハ手薄ニ有之今度
屋敷も拜領被仰付候付而ハ御蔭を以追々人數等相増夫々手當筋も相整可申處自然之節は越中守家内大勢之上大崎白金
龍口と所々遠隔引難居住いたし何れ茂婦女之儀ニ而諸々立退之場ニ至候而ハ物騒之時節警衛之人數も多分差添不申候
而ハ相濟兼候付内外之人數配等現實之調仕見候得ハ兼而附置候役人等ニ而何分相濟不申是非越中守父子出馬手并相州
備人數之内より引分差賦不申而ハ難相成左候へハ出張之人數ニ係り肝要之防禦筋右丈ハ手薄ニ相成候形ニ付彌々上奉
願候儀ハ重疊奉恐入候得共前文村替奉願候殘多摩郡五千四百石餘を何卒戸田川最寄御取米專之村々に此節村替被仰付

安政五年

二五七

被下候様備ニ奉願候左候得者第一備手之頼米茂相應ニ手當相整川添運送之便利人夫呼出等之都合度宜敷且又家内立退之場所も右之村方に究置候へハ龍口屋敷より一同舟ニ而戸田川筋差送可申陸路ハ諸家之紛雜等茂難計候處川筋通舟ニ候へハ無混雜附添之人數も過半相減其分ハ全備向人數相増上下一統安著仕候儀ニ付彼是御蔭を以防禦一圖ニ差入相繼可申と奉存候間何分別途之御評議を以願之通村替被仰付被下候様幾重ニも奉願候此段御内意申上候以上

細川越中守家來

吉田平之助

八月

八月五日日本藩警備地に於ける砲臺改築に關し意見を附して幕府に建言す

〔江戸自筆狀〕

以別紙申建候相州御預所御臺場數々所有之候得共實用ニ可相立御臺場無之神奈川貿易場被開候ハ、各國之船々幅濶いたし候付自然及廻船候共通船等打留候儀何分手段無之公邊ニおゐてハ咽喉之要地と専ら唱候場所を何之見込も無之其儀御請ニ相成居候儀甚懸念之次第ニ而第一皇國之武備不精御國威ニ係り且此方様御武名難相立候付是等之懸公邊御役人様は無蛇度御留守居を以被仰入候處矢張御同様之御見込ニ而御太度被成候御様子ニ而候得共中々當時多端之御用向ニ而未夫等之御取扱ニ至り蒙幸御請持之儀ニ付御建議被差出候様有之度御内話之向有之被是申談居候内御中落吹出候而之御都合懸有之候懸ニ而一則及早く被遊御建議候而御内用向等御頼更御右筆頼頭家杯と段々御密話も有之候付俄ニ先月初別紙寫之通御建議之通御治定ニ相成萬一此方様御請持之場所所ニ付御引請と申持ニ及相成候ハ、御備場御用被仰付候以來數百挺之大小砲新ニ製造年々詰込之人數難用陣屋取建用船等之物入候是莫太之事ニ而必多物國力及疲弊徒ニ肝要之御用も難相勤成行候之必然之儀ニ付下地如何様卒立行之仕法奉願度專心配中之儀ニ付自然大造之御普請引受被仰付候ハ、其詳を以百文謹御書形先十ヶ年程拜借被仰付度御留守居と敬願致せ候處公邊御役方至而御請宜有之候得共餘もつと仕たる事と御不審可相立候ニ付今少御白相分候上と御得御意可申と或人方初應合見合置候處此元取

抵詰ニ付而之候々被御建議有之候付御役方は此未御手被入御備儀々間敷儀等勿論御申候處由之御人方下着之上御承知可被下候前文之通今少公邊之御様相分候上と見合置候處と及延引候段之不惡御汲取可被下候以上

九月廿七日

三浦志津原

御家老宛
御中老宛

向々御建議之内成山切開平坦之地となし候と有之何と職大山を切除候様ニも有之候得共曾以左様之儀ニ無之此段之爲御合得御意置申候以上

相模國御備場之儀私并松平大膳大夫兩手引請ニ被仰付置候處大膳大夫儀今般兵庫表海岸御警衛被仰付是迄之御備場之先當分之不被仰付旨御建之趣有之此期如何可被仰付置候ニ懸念之次第御座候自然一手持ニ及被仰付儀ニ候ハ、咽喉之要地武門之冥加と奉存候儀以心を用動上候覺悟ニ御座候然被地之形勢然考仕候得之第一之御臺場之觀音崎ニ候得共土地狹隘其上元來巖石之山切落候ヶ所ニ付後而盡ク絶壁と相成被製彈を以軍艦右數丈之絶壁を目前放發いたし候ハ、防禦之手術見込無之其外鳥ヶ崎龜ヶ崎十石旗山等之御臺場是又山を切開被製彈之恐も同様ニ有之候上土地尤狹隘戎衛之力施候儀無覺束則相添候圖面之通ニ而向地三里内外相隔り連茂通船打留候見込無之寄付候を打拂候外有之間敷然時之相州廣大之海岸何方及同様之事ニ而輕便之車臺或之小銃等ニ而及防禦可然小炮臺三四ヶ所所有之候共各別利用無之様相考申候扱又神奈川邊に貿易場を被開候ハ、各國之船幅濶いたし候上之必上陸いたし兼而地理法則等研究無之ヶ所成ハ所々砲臺之形而已有之甚手薄之處見及候ハ、定而皇國武備不精砲臺法則無之懸等詳請輕蔑いたし彼六合叢談等ニ著シ世界各國ニ流布いたし候ハ、御國威ニ關係仕且自家之武名茂難立誠以遺憾不過之奉存候惣輪砲臺之器械兵不備數多々時之萬一ヶ所敵ニ被收候へ之味方勢を失崩崩之基と相成候付要地を選十分之備を設候得之大ニ利用有之趣承及候請場之形勢相考へ旗山之觀音崎を引入居候形ニ相見候得共現實之富津と相對候出崎ニ而相房之間二里二

安政五年

丁有之外御臺場之尤近く其上洋外新ニ發明之長丈之迦納煩を數門居付候ハ、大概半ニ度連東西之彈力可也ニ利用可
可有之哉右旗山之儀之三方彈路相開ケ請場中ニ而第一之地形ニ有之併是又旗山後背ニ有之候付右山を切除ケ平坦之地
トホし候得之十分之炮臺出來仕候付所々之小臺被差止器械戎兵等一ヶ所ニ被移法則を以炮臺築立被仰付度縱令彈力達
不申候共事ニ臨風筋次第ニ之地方ニ近寄候得之打碎候儀及可有之左候ハ彼恐懼を抱キ輕蔑等いたし得申間敷何様屹
ト江府之御助勢ニ相成其上御國威相立御實用ニ度相協自家ニ取候而度武門之規模ト奉存候前條之通富津之咽喉相對之
要地ニ付双方同様築立被仰付候ハ、彌以嚴重之御備相立可申候格別之場所柄御預被成置候得之日夜安心難仕方今不容
易御時節勞不願俾建白仕候以上

八月

細川 越 中 守

八月五日夕太田様御封書一同差出候御留守居名元之書付

寫 聖朝井伊様ニ度寫差出候

相總御臺場之儀最寄特被仰付度との儀付而利害得失等之見込一通り越中守方建白仕候通ニ而乍恐是迄之姿ニ而之如何
躰ニも海防之手段無之御備場詰之者共度蒙而歎息罷在候段之追々御内意も仕置別而方今之御時勢ニ而之片時度安シ兼
自然事ニ臨内海咽喉とも唱候要地ニ而不覺之筋職又之夷人に被侮候様之儀も有之候而之敵ニ之益勢を増御國威を被啖
候基ニも可相成哉と誠以不容易御所柄と深家勞仕候處若又請場之儀建議之通被仰付儀ニ度御座候ハ、旗山一圓切開海
岸を築出西洋法則を以御臺場一ヶ所ニ寄セ御取建ニ相成候儀ニ付大造之御出金と申加ニ迦納煩之大炮數門御居付ニも
付札 本文迦納煩魯西亞新ニ發明六十凡度二十四口經斷中溝形之彈路を擊刺シ椎形之尖彈を以十分之遠丁彈着いたし候山
右之迦納煩造仕數門御居付ニ相成候ハ、相總双方之彈力可也ニ相連咽喉之形勢先之相備可申哉と奉存候

相成候へ之是又新規御製造被是莫大之御出方ニ相抱り可申近年別而非常御物入且御急務筋種々御混雜之折柄乍恐自然
御手ニ難被爲及御儀ニも御座候ハ、御名に御委任被仰付置候場所ニ付此處爲其加一切引受旗山切開大炮鑄造且居付等

ニ至迄口頭を以相備候様仕度主御領場御用被仰付候以來之數百挺之大小炮新ニ製造仕年々請込之人數難用陣屋取建用
船等之物入被是莫大之事ニ而當時之儀ニ押移候而之必々物國力及疲弊徒ニ肝要之御用も難相動成行候之必然之儀ニ付
下地如何様卒立行之仕法奉願度役人共専心配中之儀ニも有之旁以無味ニ引受候儀之如何躰ニも難出來候間右大造之御
普請等自勤引受之譯を以百文錢御鑄形一ヶ年三万兩宛鑄造仕候様先十ヶ年程拜借被仰付度奉願候左候ハ、於國許銅山
開發見立之場所度有之候付夫を以鑄造仕候ハ、雜費差引仕候而度年を逐相償候様ニ可有之哉勿論越中守手元之儀も前
文之通近年格別之物入多差寄御普請入用之手當連之無御座候得共非常別段之御用柄ニ付江戸市中并大坂ニ懸兼而用建
申付置候者共ニ及金談如何様卒當取附置追而右拜借之鑄形を以百錢鑄造之上返辨可仕候左候得之別段御出方筋ニも
係り不申連ニ御大業相調第一咽喉之御締付候得之外國へ之嚙屹ト御國威も相立當時要務之御爲筋職ト奉存候付御鑄形
拜借之儀之不容易御儀ニも可有御座候得共大業引受候非常出格之譯を以何卒御差許ニ相成候様有御座度且又右之通ニ
而以後一手持ニ度被仰付候ハ、是迄ト違相備助合等之向度無之獨立仕其上炮門等も相増候儀ニ御座候へ之旁以夫ニ應
請込人數も相増隨而人足糧物之手當も手薄ニ有之候而之難叶事ニ付松平太膳大夫殿御跡御預所を度全越中守に増御預
所被仰付被下候様左候得之上下彌以相競大切之御用一際差入相動可申且兼而役人共抑揚筋之勿論實用相立候上之屹ト
武引方之一助ニも相成一入難有奉存候此段中上候様申付候以上

八月

細川越中守家來

吉 田 平 之 助

八月五日蘭國領事は幕府勘定奉行永井玄蕃頭を咬留吧學會の會員に推薦せし旨を同人に通告す

〔夷事輯録〕

外國人日本役人を會社中ニ入る事

安 政 五 年

○一蘭人方申出之趣如左

江戸御勘定御奉行

永井玄蕃頭様

於出島千八百五十八年安政第五年九月十一日八月五日

其御元様に爲御知申上候咬嚼吧において術學之會社其御元様をコルレスボンテレーンデリツト書道の相加候儀ニ御

座候右は別紙千八百五十八年第一月十八日去己年十月四日之版書并右附屬其御元様連連之證ニ顯然ニ御座候

一右明解之爲め其御元様に申上候會社中と申之學者之一致して他國の學者を連中ニ相加候儀ニ御座候様ニ付たし候ハ諸國之學術并發明事を相互ニ申通目的ニ御座候

一其御元様猶長崎諸學派傳習之棟梁ニ御座候傳習筋都合能御支配被成候處方右會社中其御元様はリツトマートスカツフ會社を相贈候儀ニ御座候

一斯貴重仕候段其御元様において悦喜之御事ニ被思召候様奉希候此段恭敬申上候

於日本和蘭領事官

イ、ハ、ドンクルキユルシユス

咬嚼吧術學の會社デイプロマ役職申渡の書面類

○萬國何れも國と人の幸福は殊ニ術と學との繁昌ニ寄せり若是より禮法漸く開ケ備り其國辨知利潤を追々探覓廣大し而して一般の肝要努力を進る習とす依之此遠隔の地ニ術と學とを達進之會社取建の爲此地ニおいて心ある人々會合して千七百七十八年第四月廿四日安永八亥之年ニ當ル當方高官之守護決談ニより一般必用と申諺を旨とし斯稱譽をへきの目的を達せんら爲は有志熱練なる他人の戮力勉強あるも必用なりとをハ咬嚼吧會社の面々千八百五十七年第十二月廿五日安政四年巳一統會集撰之

永井玄蕃頭殿をコルレスボンテレーンデリツトニ相加候事を決定せり右ニ付御用人ニ會社の筆頭并書記役之もの記名し尙一統の印判を押しデイプロマを呈上す是全く御同人學事修行習熟博覽の御希望を以て當會社の目當進達も御配慮可被下事疑なしと察をせハ也

千八百五十八年第十二月廿五日會社集會之上於咬嚼吧與之

會社印

筆頭

ニスニユ

書記役

フレケル

咬嚼吧術學會社デイプロマの添狀

○於咬嚼吧千八百五十八年第一月十一日

咬嚼吧術學會社の重役費取様を會社のコルレスボンテートマートスカツハイ既ニ見ユのデイプロマ呈上仕候

主役代

同人附記書役

フレケル

咬嚼吧術學會社のコルレスボンテレーンデリツト相加し

永井玄蕃頭君に

右之通和解差上申候

午八月

安政五年

八月七日日本藩領内の人口調査書を幕府監察遠山隼人正に提出す

〔安政五年四月の御記録〕
〔萬延元年六月迄〕

惣人数 領内并ニ長岡佐渡上方知行所人別
 合六拾貳万貳千八百六拾九人
 内 三拾壹萬五千貳百六十八人 男
 三拾萬七千六百六拾三人 女
 去ル子年ニ當午年人数増減如左
 八千六百九拾四人 増分
 千三百四拾五人 減分
 差引都合
 七千三百四拾九人 此分此度増
 方人数なり
 佐渡(家老長)知行所

惣人数
 合百八拾七人
 内 九拾四人 男
 九拾三人 女
 相樂郡之方増方
 七人
 泉郡之方増方
 四人
 合拾壹人此分此度増分

八月八日幕府將軍家定の喪を發す

〔家定公薨御一途〕

一薨御之段於 殿中御席達并御後見之儀御遺言之事
 前條御觸達ニ付八月八日朝五時之四時薨御出仕ニは五半時之御供揃ニ而御登城之宛ニ候得共御太切之場ニ御供揃ニ而御登
 城被遊候處御機嫌仰遊御伺候ニ不及候被 仰渡之儀有之御席々は大目付池田播磨守様御寄せ有之大廊下ニ御指之上御
 大老并伊掃部頭様御老中様御出席 公方様御不例御養生不被爲叶今己下刻 薨御被遊候段掃部頭様御演達有之御入齋
 又御出席 宰相様御機嫌御伺掃部頭様御老中様ニ御副相濟御入齋又御出席 宰相様御若年被成御座候間御政事向之儀

當分之内田安中納言殿御後見被成候様との 御遺言候何茂入念大切ニ可相勤旨被 仰置候段掃部頭様御老中様御列座
 掃部頭様御演達左之御書付 太守様ニ御渡御同席様方ニ御通達之儀茂被仰渡 御請被 仰上八半時前被遊 御歸殿候
 事

御書付
 宰相様御若年被成御座候間御政事向之儀當分之内田安中納言殿御後見被成候様との 御遺言候何茂入念大切ニ可相
 勤旨被 仰置候

八月九日幕府徳川家茂相續のことを達す

〔安政五年 江戸機密間日記〕

八月九日
 宰相様御事今日方上様と奉稱候彌以精勤を勵可申旨被仰出候段今日日出仕無之面々には者同席之面々方達候様可被申達候
 八月
 右書付御留守居方添翰を以達有之候事

八月某日長崎奉行外人取扱心得を年番町年寄に達す

〔夷事輯録〕

長崎ニ於て夷人御扱之事

年 番 町 年 寄 に

向後異國船渡來中ハ去々辰年イキリス人に初而遊歩免許候節之通市中番屋々々には町役人共詰方いたし異國人通行之勵
 不都合之事無之様精々心附可取計且遊歩之もの共自然途中異變有之節ハ都而町役人共ニ而取扱候積船ニも相達置候ニ

付役筋之ものを彼方ニ而見知候様詰場々々ニハ目印之旗建置可申候
右之趣其方共令承知惣町乙名共へ可申渡尤晝夜ニ不限時々市中見廻候もの差出候ニ而可有之候條都而等閑之致方無之
様可被取計候

午八月

八月十一日日本藩政府は時局に鑑み相州交替の兵士を留めて不慮に備へしめんことを在府老臣に
通議す

〔江戸自筆狀〕

以内狀得御意申候御地ニ異船渡來之様子就而相州詰重士等時候引上ケ此元差立候處異船之御取扱穩ニ付交代之面々ハ
可被差下段先便被仰越候通候處近來御地之模様被仰越候通ニ付而ハ大變事迄ニ而御並様御上書御連名御斷切ニ相成
右御上書之御方ニ之如何之御取扱ニ相成可申哉何様其分ニハ被爲濟間敷此方様ニ之只々御結構之御事而已ニ而恐悅之
無申計候へ共却而懸念之様も有之御許ニテハ万端親夕御覽之事ニ付俗ニ申釋通ニ説法御笑ニも預可申候得共懸念之
餘り及御相談申候方今御地之有様は實に薄氷之如クニ相見如何成ル世上ニ成行可申哉も難計候付右交代之重士等いま
た出立仕不申候ハ、御懸留被置候而ハ何程ニ可有之哉ケ様之事ニ御扱ひ申儀ニハ無御座候へ共爲箱念得御意置申
候近來御地之模様御家中一統傳承いたし懸念之次第申出候向も有之右等之趣委細之儀ハ得斗囁合候上追而以幸便得貴
意可申此節ハ差懸候事ニ付先右之段迄及御相談申候以上

八月十一日

上 惣 連 名

下 溝 口 藏 人 様

三 洞 志 津 摩 様

被仰越候通具ニ承知仕此許種々大變有之候付而之區々之唱も有之三百里隔居候而ハ猶更之事ニ而御家中一統之傳承等
も被成御承知候處ニ而之御懸念之次第如何ニも御尤千萬ニ奉存候近來一鉢先ツ燈ニ相聞候へ共不容易折柄ニ付無油斷
心配仕候へ共ケ様之事燈臺元闇と申誂も御座候付猶此上精々承繕せ候上模様ニ應候而ハ重士丈懸留も可仕哉近日夏登
之重士並大筒手相州表へ着仕候へ共交代之儀ハ見合いつまも暫約留置候間左様御承知可被下候追而之様子ハ分り次第
次便猶得貴意可申候以上

九月五日

八月十三日佛國使節バロン、グロー修交通商條約締結の爲め軍艦三隻を率ゐ國書を齎して品海
に入る

〔安政五年癸卯萬延元年九月迄
御同席觸寫大目付様御廻狀寫控〕

太田備後守殿御波

大 目 付 様

佛蘭西國之軍艦三艘一昨十三日品川沖に入津致し候右ハ使節を以國書差越和親交易之條約於江戸爲取替度旨申立候ニ
付役々出張追々應接之積ニ候此段爲心得相違候
右之通向々ニ可被相觸候

八月十五日

八月十五日藩主齊護新將軍嗣立につき沿海警備之任を勤續すべきかを幕府に稟申す
〔相州御備場一件〕

相模國御備場御用之儀不相替唯今迄之通相勤可申と奉存候御代替付而相伺申候以上

安 政 五 年

二六七

八月十五日

(八月十六日附札指令)

只今迄通相勤候様可被致候

八月十六日前内大臣一條忠香我藩留守居を其邸に招き養に幕府及び水戸藩に下されたる勅書寫に己れの書を添へ速に之を藩主に送致すへき旨を内示す

(一條忠香日記抄)

安政五年八月十六日戊午墨夷一件ニ付去七日御治定被仰遣候義當家より御沙汰之御書付相認添書相附縁家肥後越中守備前内藏頭等へ内々含申入置京留主居呼寄急便にて申遣云々嘉悦市之成守居 大西定治郎守居 入江より直渡候事

(神庫文書十三印五番尊攘錄皇武令)

八月關東に被仰出候 勅説 八月八日水戸家へハ

先般墨夷假條約無餘儀次第に而於神奈川調印使節に被渡候儀猶又委細間部下總守上京被及言上候趣ニ候得共先達而勅答諸大名業議被聞召度被仰出候詮も無之誠ニ皇國重大之儀調印之後言上大樹公 假慮御伺之御趣意も不相立ニ尤勅答之御次第ニ相背輕卒之取計大樹公賢明之處有司心得如何と御不審被思召候右様之次第ニ而者墨夷之儀者暫差置方今御國內之治亂如何と更ニ深被惱 假慮候何卒公武御實情を被盡御合體永久安全之様ニと偏被思召候三家或大老上京被仰出候處水戸尾張兩家實中之趣被聞召且又其餘宗室之向々も同様之御沙汰之由も被聞召及候右者何等之罪狀に候哉難被計候得共御營羽翼之面々當今外夷追々入津不容易之時節既ニ人心之歸向ニも可相拘旁被惱 宸襟候兼而三家以下諸大名業議被聞召度被仰出候詮全永世安全公武御合體ニ而被安 假慮候様被思召候儀外夷計之儀ニても無之内憂有之候而者殊更深被惱 宸襟候被是國家之大事ニ候間大老關老其他三家三卿家門列藩外様譜代共一同群議許定有之誠

細川越中守

忠之心を以得牛相正し國內治平公武御合體強御長久之様徳川家を扶助有之内を禁外夷之侮を不受様にと被思召候早々可致商議 勅説之事

八月八日

- 近衛 左大臣
- 鷹司 右大臣
- 一條 内大臣
- 三條 前内大臣
- 二條 大納言
- 近衛 大納言

(右一通)

(水戸に下れる勅文に添へたる副翰)

勅説之趣被仰出候故者國家之大事者勿論徳川家を御扶助之思召ニ候間會議有之御安全之様可有勘考旨以出格之思召被仰出候間猶同列之方々三卿家門之業以上隠居ニ至迄列藩一同ニ而御趣意被相心得候様向々にも傳達可有之被仰出候以上

(右一通)

添書

別紙御沙汰之趣尋常之御事ニ御座候得者御斟酌之御次第も被爲在候得共何分墨夷之事件ニ而於關東も大改革之御時節候得ハ萬一此上公武御隔心ケ間敷儀有之候而ハ甚以被惱 假慮候間格別之儀を以無御隔意被仰進候間此段不惡御聞取被成候様被遊度御沙汰之事

(右一通)

安政五年

此度被仰進候様三家初相心得候様別段水戸中納言へ被仰下候御心得之爲申入候事

廣 橋 大 納 言
萬里小路前大納言

〔一條忠香日記〕

松平内藏頭細川越中守等へ内々申進置添書

呈一書候秋暑難去處彌其御地御安靜令賀存候然ハ外夷一條先達而以來不容易次第ニ成行深々被惱假慮候附而者臣下一同ニも誠ニ明暮痛歎之至存候春來之模様ハ委細御承知之通然處先般假條約調判相濟言上有之候無余義次第ニも有之趣ニ候得共心得如何と御不審被思召候御沙汰ニ候是御營羽翼之人々備等被仰付候ハ何等之罪狀ニ候哉難被計候得共當今不容易之時被是深被惱假慮候間別紙之通關東へ被仰入候且又三家始諸大名方へも御沙汰之趣被傳達候様ニと水戸中納言へは被仰下候定而不日ニは御承知ニ相成候事と存候得共内々御心得ニ申入置候就而者兼々京師御備向御薄手之義ニ候處近來度々夷船入津先達て浪花へも乘入候儀も有之候ニ付警衛嚴重ニ相成候様被仰入夫々被仰付ニは相成有之候得共未々人數等入込警備相整候都合も計不申由萬一不意ニ乘入候義難計何分京師常々御手薄ニも候へは何かニ御不審之事ニ有之候一同心配致候右ニ付而者自然非常之義も有之候節は時宜ニ寄早々人數等被差登候様致度右無念度御含置可給と存候決而可有之義には無之候得共當今之時勢ニ付心配之餘り内密申入候但右等之義表立候而者差障り候間内々申入候不惡御含取御合慮相成候ハ、致安心候何分今度御沙汰之次第内々御心得迄ニ申入置度如斯候矣々も御間柄ニ付別段申入候事ニ候間他へは御洩無之様希入存候先は早々如此候也

八月十五日

忠

香

細川 越 中 守 様 内密

(備考)此密翰は水戸に下りし後又我藩外尾張越前加賀薩摩筑前安藝因幡備前津河波土佐長州の十二藩に下る世之を

長子(の密翰といふ)

八月十八日幕府は佛國使節參府につき宿寺及び道路取締等に關する令を出す

〔尊攘錄皇武令〕

大 目 付に

今般佛蘭西使節應接中受容下真福寺に止宿致し候付通行道筋屋敷々々立番等差出ニ不及往來之者も平常之通通行可爲致尤往來混雜之儀も有之候ハ、取締出役之ものより辻番所に申達調方爲致可申其餘先達而魯西亞使節等出府之節相違候通可被心得候

八月十八日

八月廿六日藩主齊護書を一條忠香に贈り去十五日の内書に答ふ

〔一條忠香日記抄〕

細川越中守使喜悅市之亟來通日内々進候返書持參之事

白木狀寫

一條殿諸大夫申

細川 越 中 守

上包 内府様に越中守様より之御返書

上包 内府様内密御左右

細川 越 中 守

八ツ折杉はら

去十五日之御書拜誦仕候秋冷之節御坐候得共益御安泰被成御坐奉恭賀候然者外夷一件被惱假慮就而者御一同朝暮御痛歎と被爲在候處先般假條約調判相濟候言上有之無餘儀趣ニ者候得共御不審ニ被思召候御沙汰之旨且御營羽翼之人

安 政 五 年

々備等被仰付方今不容易時節被是被備宸襟候付て此節關東へ御沙汰ニ相成候勅諭之趣並御添書水戸家へ之御別紙等御内々爲心得拜見被仰付將又京師御備向御手薄之處近年度々夷船入津先達て浪華へも乗入候儀有之候付警衛嚴重ニ相成候様被仰入夫々被仰付候得共未人數等入込不申警衛相整兼當々御手薄ニも候得者何角ニ御配慮御座候旨御尤之御儀ニ奉存候右ニ付非常之儀も有之節は時宜ニ寄人數等差登候様充決而可有之儀ニは無之候得共當今之時勢ニ付御心配之餘御内密被仰下右等之趣表立候而者御差障ニ御坐候間其旨相含居候様且今度御沙汰之次第御内々心得迄ニ御間柄之譯を以別段御教示被成下候條他へ相洩不申様との儀共委細被仰下候通奉拜承重疊御懇慮之御儀深々難有奉存候いつれ御營より御沙汰之筋可有御座置ニ不容易時節書夜安勞仕候事ニ御座候御内教之通萬一外夷非常之時ニ至候は、御營之御沙汰も可有御座候得共時宜ニ應如何様とも相心得可申と奉存候伊京師御警衛向も不目には段々相整御要書等堅固ニ相成可申候右御請旁先不取敢申上候再拜頓首

八月二十六日

細川越中守

内 府様

御左右

猶々兎角不測之氣候御座候御保護被爲在候様奉存候以上

八月廿六日 本藩政府は尾水越三藩主嚴罰諸藩警備地變更の時に當り我藩獨幕府の優遇を受く恐くは他の怨府とならん宜く朝旨遵奉諸藩協同の方針を執りて國是を定むべき由を在府老臣に通牒す

〔安政五年自筆狀扣〕

内狀を以得御意申候今般尾州様御始御替之一條

此方様御座候御拜頓首其餘一絲之御儀様等吉田平之助書取を以委細被仰越候通工付先便一ト通及御報候通候處其以前御

老中様方御打替通候方三郡御請替之事ニ而さへ餘り難敷御取扱ニ付何程可有之哉と致案勞居候間御替之儀致承知候而之御更替御無申計外ニ深々御子細も有之候ハ、其分之事ニ度候得共亞畢利加使節申立之一件並 西御丸御乗込之儀付而之最前より之御見込 公邊之御處置と之致遠却追々御建議も有之候未内分京都にも被仰進且押而御登城等も被爲在候御様子ニ付究而夫等譯ニも可有之右之必竟 皇國之御爲筋と思召候處より手を替品を替種々御心配爲有之儀と被考左候へ之御見込之當否と暫差置何様御忠告ニ相違と無之筋合ニ候處於 將軍家之無双權貴之御方々右之譯ニ因而却而無比類御重議を被受候而一統之仰天と更ニ不論御當人様方之御意中及御家來之心底如何可有之哉且又三郡御受持被蒙 仰候御方ニも内實ハ公義御願意慮之御建議有之或ハ是迄之御請場御手薄等之御家々々ニ而御隱割之御様子ニ相聞是以御建議之一條之尾州様方に相替儀御受場御手薄と申も御勝手向御不如意ニ而實ニ御心底ニ不被任止不被得處々之御儀と相見候處意外之御難厄ニ而如何計御不平ニも可有之哉右様之折柄此方様御一家而已別段御賞美之御様子ニ而御受場之御動も無之剩 御褒詞を以御屋敷をも御拜領其外萬事 公邊之御都合宜敷非伊様方々各別之御懇話茂有之候由恐悦と重疊恐悦ニ候得共あまゝ雲泥之御取扱ニ而其恐悦却而恨之府禍之端とも相成儀と自然之道理ニ而世間之所仰も何程可有之哉既御屋敷御門職ニ可惡張札を茂いたし候由浮説流言と食着ニ不及殊ニ實否も難計候得共是等之儀御家中一統奉案勞候一ツニ而またも深く研究いたし候へハ萬々一京都より右御不平之御方々には滑ニ御懇慮有之江戸表御隔絶し申時ニも相成候へハ中國四國ニ長州土州有之北陸東海ニ越前尾張有之陸地之通路一切六ヶ敷加之外寇をも打混浦賀之戸間裁切候様之儀も有之候ハ、兵糧之海運之中ニ不及 御方々様之御進退必至度差支可申かし夫之極々未然之事ニ而差寄當時 此方様御事京都之御首尾とあまり御宜敷無之由相唱其上 公邊之御有様之兵器を不動迄ニ而誠之大慮此未如何成行候も難計候間先一兩年之處萬端御差扣ニ相成とへ 公邊之御首尾之少々被欠候而も京都に之御罷并諸侯方之御兵氣受杯ニも重疊御心を被用度勿論求而公義に御戻り可被爲成様も無之此方々御迎被成候様之御取扱を被差止追而之成行を被成御覽候方御良策ニ之有之間敷哉と囑合御一門衆長岡監物方杯も專右之論説有之候内調導中

木下眞太郎大浦彦之允見込之趣内分書達有之今度之御到來後之末々ニ至迄猶更案勞之唱有之先之御家中一統之人心右同様之見込ニ而申迄も無之人心一統之段ニ至候而之容易ニ難擲置旁前紙三通共差進入御披見申候藏人様ニ之此已前も長々御詰有之猶又此節丁度之時分御詰合付而之天下之動靜字内之模様をも御熟知之事候へハ嚙々迂遠之見込共御見可被下候得共御國元一統之人心之又御不案内之譯ニ付彼是御參酌を以往々ニ態々御爲宜敷様御咄合有之度彼土州様御相談筋御役人様之内に御内通之儀杯 公邊に被對候而之無二之 思召ニ相響キ御都合宜敷可有之候へ共諸家様に之御信義何程可有之哉若洩聞候時之直様想を被隨候種共相成其末若ハ 御汚名被爲受候ニも至可申候以後右様之御取扱之無之様得斗御留守居にも御含被置度候猶又越前様被仰付之趣付而之井伊様方御托被成候御事柄茂有之 太守様は茂不一方被遊 御配慮候由其後如何可有之哉右等之儀をも奉伺度一旦之雇飛脚差立可申候咄合候得共自然間違も致出來候而之難相濟御用筋ニ付見合置此節中急キ御飛脚差立申建候事ニ御座候猶其御地被仰談之次第之早々被仰越候様存候以上

付札
本文之通認置候處此度之御到來ニ付而御書方御用有之上々早打之御飛脚今日差立候付本文之御飛脚ハ差止申候
八月廿六日
有吉市左衛門

朽木内匠
小笠原備前
大木舍人
長岡佐渡

溝口藏人様
三淵志津摩様

猶々本文之通一被下りも奉案勞候様子付而之幸去六月廿二日假條約御訓印之節此後之御處置考意之向之被仰立候様被

御出も有之候事ニ付此上御處置之御策略東西上下一致之處を以猶又御忠告被爲在方ニも可有之哉左候ハ、天朝公邊に之御忠節も厚御外間等之懸念も薄相成御國人心も落着可申哉と一旦之咄合候得共御地之模様之熟知不致事ニ而先ッ本文之通申建候事ニ御座候若又 公義よ又々諸侯方御建議之御沙汰有之候ハ、是又右同様之振合を以被差出度願曰急便ニ而被仰越候様存候

一眞太郎書付之内ニ有之候 御方々様御國勝手之儀最寄御役筋に御建議ニも相成居候由此儀之 御方様迄ニ無之列候方之御爲筋ニ而至極御同意ニ御座候何卒御取用相成候様御周旋願申候
一西洋法操練之儀之堀田様より御内意有之候事ニ而先 公邊に被對一ト通江戸表ニ而御取起之事御座候處土豪御備筋之儀之 御傳來之趣等を以御參酌を被加御革制被定置候事ニ而地下より御改革無之候而之人心惑を取候儀申迄も無之其外御役々之被建様又之藝術を以家督相續之御格合等種々様々之當り隨有之候輕卒ニ共出來候事ニ之有之間敷尤足輕備迄ニも御取加申位之儀之出來可申候得共是又西洋法いまた熟知之人少候得共一統人心之向背茂有之候何程可有之哉西洋之仕法之定而節制之精微を究候物ニ而現實試驗之術我國傳來之古法ハ優劣も可有之我國ニ而も炮術渡り候而之弓之變居候如兵道茂變通之道無之而之柱ニ膠スル之類ニも可有之候得共前條之通不容易筋ニ相考候間是又爲御含得御意置申候以上

九月三日閣老間部詮勝諸藩京都手入れの事情を探り且つ之を處理せんが爲めに上京の途に就く
〔夷事輯録〕

江戸來狀

一去月十七日京地之飛脚 公邊并小石川にも御到來前條十八日ニ御役方御招ニ相成候由同日之太田様間部様御越下旬ニ猶御兩所御越其後も間部様猶又御越之由右御事柄相分り兼とふか 將軍家補佐之様 勅諭有之候抔風聞仕候へ共此儀

ハ無覺束束るし小石川御家中に水府公公御示しニ重キ 勅諭之趣有之候間諸事相慣精勤いたし候様被仰渡候由是を以相考候得之何様右ニ類候稜々可有之との趣ニ相聞且小石川公 勅諭之御答如何心得可申哉之段御伺ニ相成引續 勅答延引ニ成り候而ハ如何ニ可有之杯御せり付之處其儀ハ御迷惑ニ不相成様御取計可被成との趣を以御押付ニ成り此義并條約調印之稜とも御申談として去ル三日間部様御上京ニ相成候由此御使ハ中ノノ不容易稜ニ而御申譯相立可申哉重疊懸念之由相唱申候前條 公邊に勅諭之趣手ニ入申候處案外ニ而更ニ御くねり之稜も相見不申然之無事ニ相濟可申哉ニ愚考仕候則別紙奉入御覽候 愚案 勅諭案外との見込何れの處にて(勅諭は八月十日) 見取候誠誠に愚考と相見に附るへし(日の條に出づ)

九月三日幕府佛國と修交通商條約廿三條貿易章程七則を締結す

〔安政五年迄觸狀扣〕
〔文久六年迄觸狀扣〕

佛蘭西國條約并稅則

佛蘭西皇帝と日本大君と信誼を結ひ兩國の人民交易を通し其交際の永くかえらまして兩國の爲利益ある交易の條約を定んと欲して佛蘭西皇帝よりは全權の使節シユワンハベテイステルイスコロノカミを遣し日本大君は其事及水野筑後守永井玄蕃頭井上信濃守堀織部正岩瀬肥後守野々山鉦藏ニ命し双方委任の書を照應して左の條約を決せり

第一條 佛蘭西國と日本國と世々親睦ふるを佛蘭西國の人日本に居留せは其人々を日本におろて懇ニ扱ふを日本國の人佛蘭西に居留せは佛蘭西におろても又懇ニ扱ふを佛蘭西國の人日本に居留せは其人々を日本におろて懇ニ扱ふを日本國の人佛蘭西に居留せは佛蘭西におろても又懇ニ扱ふを佛蘭西國の人日本に居留せは其人々を日本におろて懇ニ扱ふを日本國の人を遣まへし其政事ニ預る役人及ひ獨立たる取締の役人は佛蘭西國の部内を旅行をせし

第二條 佛蘭西國よりミニストルを日本江戸へ差越し并ニ日本の開きある港へ佛蘭西のコンシユル又は其代りのものを差越し

日本に居留せる佛蘭西のミニストル并コンシユルゼネラルは日本國の部内を旅行せる免許あるへし日本國より政事ニ預る役人をハバレースへ遣まへし日本國より佛蘭西の港々へ取締の役人及ひ交易を處置せる役人を遣まへし其政事ニ預る役人及ひ獨立たる取締の役人は佛蘭西國の部内を旅行をせし

第三條

神奈川長崎箱館港及び村は安政六未年七月十七日西曆紀元一千八百五十九年八月十五日佛蘭西人交易の爲ニ開くを一千八百六十開くを一千八百六十開くを兵庫港并村を午八月より凡五十一ヶ月の後より一千八百六十三年開くを一月一日開きある港は佛蘭西人ニ居留を許せし其居留の地は一ヶ所として價を出し地をりり住宅倉庫を建てる事も許といへとも是を建てるに託して要害の場所を取建るを此控及守らしめんか爲佛蘭西人家を建又は普請する節は日本役人時々見改むを佛蘭西人住宅倉庫を建てる地は日本役人と佛蘭西コンシユルと相談の上定むを

港々の定期は日本役人と佛蘭西コンシユルと相談の上定むをし若議定しらたき時は佛蘭西ミニストルと日本政府とへ申立相談の上取計ふを

佛蘭西人居留の場所へ垣塙等の圍を設け出入口自在をすを

佛蘭西人遊歩の規程左の如し

神奈川より六郷川筋迄歩行をへし其川は川崎と品川との間に在 其外八十里迄行を

箱館は十里四方へ行を

兵庫も同様ふりまをし京都の方へは何をの方より參るとも十里手前まで止むを

佛蘭西船々の乗組人は猪名川筋を越るを其川は兵庫と大坂との間

里數は役所又は御用所より陸路の程度より長崎は其町の周圍を御料所を限とす新瀉又は右に代る港遊歩規程は追而日本政府と佛蘭西のミニストルと相談の上定むをし只商賣を致を爲のみ佛蘭西人一千八百六十二年一月一日より江戸へ在留を一千八百六十三年一月一日より大坂へ在留を

又右ニケ所ニおゐて佛蘭西人日本の家賃を出し借るべき一區の場所并ニ散步の規程は追て日本政府と佛蘭西のミニストルと相談之上定むるし

第四條 日本ニある佛蘭西人自國の宗旨を勝手ニ信仰いたし其居留の場所へ官社を建るも妨ふし日本ニおゐる踏繪の仕來は既ニ廢せり

第五條 日本ニある佛蘭西人の間ニ争論起る事おらばミニストル又はコンシユル取計ふるし

第六條 佛蘭西人日本人ニ對し不埒の事おらば佛蘭西コンシユル紀明の上自國の法度を以罰をるし日本人佛蘭西人ニ對し不埒の事おらば日本役人紀明の上日本の法度を以罰をるし但何をも偏頗なく取行ふるし

第七條 佛蘭西人日本人ニ對しもし訴訟の事おらば佛蘭西コンシユル其事を告コンシユル事比次第を吟味し實意ニ取計ふるし又日本人佛蘭西人ニ對し訴訟おらば奉行所へ其事を告奉行所にて事の次第を吟味し實意ニ取計ふるし若佛蘭西コンシユル取計兼候節は日本高官の助をり相談の上取計ふるし

第八條 佛蘭西人日本の開きたる港々ニおいて自國の品物は勿論他國の品物ても商賣いたし事苦しらすといへとも日本禁止の品物は商賣いたしらす日本日本の開きたる港より自國又は他國へ品物を持商賣いたし事苦しらす其節は定めたる通り運上を出さるし

武器は日本政府并ニ外國人の外賣おらば佛蘭西人日本人と何品ニよらず日本役人立會ふくして賣買苦しらす代金を拂ふ節も同様たるるし

日本人は何人ニよらず佛蘭西人と品物賣買且所持する事苦しからず

日本にゐる佛蘭西人日本の賤民を雇ふ事障ふし

第九條 此度定たる商法ハ條約の通守るへし此條約并交易の法を十分ニ取行ふ爲の規律を全備せんと要せハ佛蘭西

ミニストルと日本高官と議定をるし

第十條 日本禁制の品持渡らさるため又ハ偽りて運上を出さる事を防く爲ニ日本政府にて港々へ控を立るし條約又は交易の規則を守らさるものニ過料又ハ荷物とも日本政府へ取上へし

第十一條 佛蘭西船日本の開きたる港々來る時ハ水先のものを勝手ニ雇ふへし

佛蘭西人借財并運上拂濟の上にて出帆の節港外迄の水先案内ハ勝手ニ雇ふるし

第十二條 佛蘭西人持渡りたる品物運上納濟して日本役人より受取書を請取外開ある港へ持行賣拂ふ時は運上出すニ及せず

第十三條 佛蘭西人日本の開きある港へ持渡りたる品物定例の運上拂ひし上ハ日本人國中に持行とも運上取立る事ふし

第十四條 外國の貨幣日本にても通用いたさず其通用ハ日本の貨幣と外國の貨幣金ハ金銀ハ銀と懸合をるし

佛蘭西人日本人との商賣ニ日本の貨幣と外國の貨幣と取交用ゆるし

日本人外國の貨幣に慣えされハ交易の初發ニ當用丈ハ日本貨幣を外國貨幣と懸合せ役所にて佛蘭西人へ引替渡をへし

第十五條 日本通用金銀と外國の金銀ハ持行事苦しらすといへとも日本銅錢と貨幣ニ拵らへさる金銀ハ持行おらず佛蘭西人品物持渡り運上を少く拂之んる爲其價を減したると察せハ日本役人は是を改め相當の價を付るし佛蘭西人其價にて承引せは其價を少しも減する事なく日本役所へ買入るし是を否む時ハ付たる價ニ從て運上を納むへし

第十六條 佛蘭西船難船又ハ難風ニ逢日本の地ニ漂着いたしたるを日本役人承之らハ成丈其人々を救ひ覆懸を加へ最寄の港ニある佛蘭西コンシユルへ送るへし

第十七條

佛蘭西の軍艦に屬しある肝要の品々ハ運上ホク神奈川并ニ箱館長崎の庫に入置佛蘭西番人守るヘシ若其品日本人又ハ外國人へ賣拂ふ時ハ買取たる人より外品同様日本役所へ運上を出をる

第十八條

日本人佛蘭西人よりの借財を拂えずして出奔いたしある節ハ日本役人吟味いたし拂方いたさするし佛蘭西人日本人よりの借財を拂えずして出奔いたしある節ハコンシユル吟味いたし拂方いたさすへし

第十九條

以後何事ても外國人へ免許したる事ハ佛蘭西政府又ハ佛蘭西人へも同様ニ免許あるへし

第二十條

今より凡十四ヶ年の後ニ至リ此取極たる條約の内改むる事ハ日本政府又ハ佛蘭西政府より一年前ニ知らせ置双方談判の上改むへし

第二十一條

佛蘭西ミニストル并ニコンシユルより日本高官へ書面にて懸合ふ事ハ佛蘭西語を以てせし日本にて速ニ解する爲ニ五年の間ハ都て日本語并ニ佛蘭西語にて認むへし

第二十二條

此條約本書ハ佛蘭西皇帝自ら名を記し印を押し日本大君奥印して今より後一年の間ニ佛蘭西使節と日本委任の役人と江戸ニおいて取替すへし

此條約ハ佛蘭西にてハ佛蘭西語を用ひ日本の片かなを添へ日本にて和文を用ひ片かふを添へし其文意ハいつきも同様なれとも本邦兩國にて通する和蘭語の譯文を双方より添たりし條約ニ解らたき事ハその蘭文を以證とすへしこの文ハ魯西亞英吉利亞墨利加條約ニ添たる和蘭陀語譯文と同義なり安政六年七月十七日西曆紀元一千八百五十九年八月十五日至りて本書取替ませ済すとも此條約の趣ハ其日より執行ふへし其證據の爲安政五年九月三日江戸において前ニ載たる兩國の全權此條約ニ名を記し調印するもの也

水野 筑後 守花押
永井 玄蕃 頭同

税則(七月十八日の條に在る税利太泥亞商民貿易章程と同じ但シ文中相當の箇所に於て國號をかへ又英貨を佛貨に換算せり)

井上 信濃 守同
堀 織部 正同
岩 潮 肥後 守同
野々 山 鉦藏 同

九月六日佛國使節品海を退く

〔安政五年筆起萬延元年九月迄 御同席觸寫大目付様御廻狀寫、尊攘錄皇武令〕

太田備後守殿御渡

大 目 付に

今般佛蘭西より使節差越條約取結之儀申立候ニ付英吉利之振合を以假條約爲御取替相成昨六日退帆致し候此段爲心得相達候

右之通向々に可被相觸候

九月七日

九月十四日水戸齊昭謹慎の狀況及び其紀州流謫の企ある事等に關する探索の結果を江戸より熊本に報する者あり

〔夷事輯録〕(午ノ九月十四日附江戸來狀)

一老公ハ駒込ニ而御上下ニ而御慎之由實事との事此儀御本文之通相違無之勿論御上下ニ而晝夜共御正座御居間之雨戸の合目ノを五寸計宛明り取ニ御透しニ相成居候迄之由世上之囁ニ日々一度宛公義之御醫師御容体伺ニ出候由其節

ハざれノ容休見せ申そふとて御立ふから御見せニ相成随分腹共さくられよ如何程探られても此方の腹ニハ何ンも無之と御申聞被成候との事也ハ空言共相聞へ候得共其人御氣象を恐る候事相見へ申候

一駒込ニ而發炮亦之作事有之由の事

此儀前文之通之御慎ニて炮發杯存し懸も無之誠ニ虚言也御作事ハ一昨年之大風後一切御構無之大荒ニ損し候而實ニ雨霽も溜り不申候間此節御伺ニ而御取繕ニ相成候由

一御家中御役人方に押寄せ候由との事

此儀小石川御屋敷内ニ而一端少々宛混雜も有之由ニ候へ共公義之御役人衆に押懸候事ハ決而無之由何を内ニハ餘程御心配事ニ而有之たる由

一御國を五十人計り駈登り候由然る處老公直ニ御押込之由との事

此儀水戸を駈登り候之五十人計ニ而無之五百人計りと承り申候實ニ三百計も有之たる由此面々ハ大臣之無之中以下之士又ハ百姓と老公を守護し奉るとて駈登り候物音相聞候ニ付老公殊之外御配慮ニ而段々御役人を指立金ヶ原邊ニ而御押留ニ相成候由然處是等之響のみならず何様老公御存生ニ而者爾老初氣ニ懸り候餘りニ紀州ニ御立退キ同所ニ而御慎ニ相成候様との儀讀枝様を以中納言様ニ被傳候由然處當中納言様甚以御立腹ニ而老公ニ於ハ聊御不愼之儀無之重疊御謹慎ニ相成居候ニ右様之御指圖ハ如何様之御模様ニ候哉何分難得其意是非共と申儀ニ御坐候ハ、御父子御一所ニ可被成御越と御怒りニ相成候故讀州甚恐懼ニ而引取ニ相成其末内輪大もめ之由是又此節之一亂ハ井伊家之存外罪淺く全く鬼門破りニ被遣候ニ相成巨魁ハ水野土佐守松平讀州杯と相聞へ候讀州太田爾老土佐守ハ都而井伊家之縁者也讀州水府を必至と押付手儘ニして我意を振ハんと之企土佐守ハ歸參之内望有とハへ共根元御付人の由ニ而此願ハ逆も不被行由讀州此節老公御咎を御決之後も猶も手強ク遣り込達ニ害せんとの内存前文紀州流罪をも工ミ出し御慎と申事を頻りに申立ニ相成水戸御末家之松平播摩守様松平大學頭様を伴ひ御老中ニ讒言ニ相成讀州一人して竊ニ周旋之末太田

備後守カ右三方に内狀を被相渡候由其内狀之趣ハ小石川御役人難陸之事ニ而先年不持之事有之於水戸盤居申付ニ相成居候太田何某是ハ備後殿杯を再動申付ニ相成候様との事杯之由然るニ右御三方之内狀を當中納言様ニ持參ニ相成候處是以て中納言様甚以不氣受ニ而是ハ何方カ之御差圖ニ而候哉宰相様ハ未タ御年も不被召候へハか様の事杯御存付可有之様も無之誰殿之存知寄ニて候哉其次御承知ニ相成度との事之由依之三人衆閉口して引取ニ相成何様右之趣備後殿に不申向候而ハ相成間敷明日同道して備後殿に參り候ハんとて別々ニ相成候由然處讀州一人直様右之趣内々備後守へ申通爾々之手都合ニ而有之翌日之不快申立ニ相成候ニ付備後殿ニ而播摩守様大學頭様御兩人のみ御出ニて爾々之儀御申入ニ相成候處備後殿昨日之内狀之趣様子有之候間引戻致し度何分其事を取計被吳候様との事之由因而右御兩方ハ當惑之末引戻との事ニ相成候由然處當中納言様是以甚不快ニ而爾老之一旦差圖致候を引戻候杯と申儀ハ一圓御不承知ニ付御引戻ハ決而不成是非最初御申向之趣明日致し候様との御事の由ニて其末大ニ内輪をまいたし候由右ニ付而ハ中納言様も此節ハ讀州之底意を御存知付ニ相成備後守杯も讀州は少し見限り候由は少し快キ方ニ御座候へ共讀州仲々根強く其後小石川ニ必多通ニ而又々たまし付ニ相成候由暗主いゝとも爲し難し好儀亦可惡恐るへし然る

幕府ハ有志の方々ハ悉く追退け辯候備弱之小人迄引舉幕下藩々ハ義氣を存し忠烈之心有之候ハ貧士以下百姓臥筵而已之由ニ候間今兩三年も次第ニ劣りニ落草臥其末人之妻妾を奪取候杯亂妨憤怨相集り不申而ハ逆も事ニ者相成間敷呼鳴たる事と嘶ス候も有之候

一尾州之事何共不申參御家中少しハ内々申分有之由之事

此儀此元ニ而も一向相分り不申候尤一端ハ餘程混雜いたし候へ共成瀬軍人當年十九歳拔群之人才ニ而論議明白ニ致し忽押付候由迄承り申候

一越前御國元之事ハ云々之事

此儀誠ニ御謹慎御屋敷内整々肅々奉恐感候實ニ一言も無之敢而書出不申候

九月十五日在府本藩老臣溝口藏人等八月廿六日附藩政府の通議に答ふ

〔自筆狀扣〕

被仰聞御端書之趣共逐一致承知此許去年來之見込と之先ツ表裏之違相成深當恐入申候此上兎角得御意候而之非を主張いたし候様相聞可申候得共取扱候此元之形勢一應申試候 王室奉尊崇候儀之申迄茂無之且徳川家御大恩之儀兎角論説を不待候嘉永六年墨夷渡來後 公邊之御處置多之彼申所を被立候儀之定而御深謀可有之外議ハ一人々々之見識有之一定不致閣老段々御替御役人方にも同様ニ有之候得共 公邊御趣意之一體ニ有之御卓説も可有之哉因而去九月以來墨夷使節御論判之上假約定出來御取籍有之當春京地に堀田様御初出京都之御模様御伺取之上之御大沿革被仰出屹富國強兵之儀も被示候御内儀之儀之竊ニ奉伺居候處京地之御模様打替堀田様御初空ク御引取相成候間早速岩瀬様罷出奉伺候處初御出京之上一應御伺之時之已ニ何日 勅答可被爲在と傳奏議奏御時茂有之候處不圖御風替り相成假約定之通ニ而之不被爲叶 叡慮旨被 仰出然者假約定被及御破談候ハ、忽チ兵端と相成初より戰爭之儀之 叡慮不被爲好旨乾御伺取相成候末兩端と相成甚御不審之處關東より突留候向キ有之右ニハ段々子細有之御打替相成候由公家と申之井中之蛙ニ而全世界之事之不及中方今之儀之一向御存無之亞墨利加如何ニ強キと申而も山法師之亂妨之様ニ之有之間敷と申位之事ニ而察候様其上天下之諸侯不服ふと突込候向キ有之御恐懼何之御處置茂無之由種々手を被付候得共一切分り兼候而堀田様御始御會談被仰入京都之御趣意無殘所被仰聞候ハ、御服承被成候儀之素々不待論又關東之御趣茂宜敷筋之御聞上被下度との儀達而被仰立候得共不被爲叶不得止巨細御書取上り候處關東之書付之御取次無之との事ニ而言路塞候而已ふらず書付茂通り不申諸侯方追々御建議盡ク打拂之御論有之を關東ニ而御隠し被置候而右之御取扱相成候様ニ御聞込有之去年來之御建議會而左様計ニ無之右を京都に御覽ニ被入候ハ、御安心ニ可相成候へ共御銘々御封印を以被仰達候儀を被入御覽候而之信を被失候而殘念成物と被 仰聞候突込候向と計御咄有之候得共水戸家より御密訴之儀

之世上顯然ニ御座候廟堂機密之何知候事ニ無之御見込之通ニも可有之哉尤此元ニ而論說承申候得之 御國初以來兩院之御政關東ニ被任候上何事茂關東を被關京都に御直達有之候而之御舊格ニ被戻候而已ならず 公義ニ御内密之御訴達ニ而ハ公然たる事ニ無之老公初度々 公邊に被仰立如何ニも御承諾無之候ハ、京都に被仰上候段御申立有之御免を被受上之兎も角も前條之通ニ而之御不都合ニ有之 皇國御爲筋之御忠告と之被申間敷裁別紙書取茂爲御見合相進申候御請場替之御方々御勝手向御不如意之儀 公邊御不吟味有之候とも夫敷ハ御分別可爲之哉御方々初より御進之事而已御留守居など中立大炮之儀も一向研究無之既御役人方御請場御見置之節放發被出來兼候御方も有之柳川ふとハ土臺三十万石以上之御中ニ御入込ニ而之少無理ふる様ニも被考候へ共藏人井上加左衛門同道御臺場内分拜見いたし候處一人も居不申御臺場ニ登見物いたし候へ共有誰制候者無之且又昨年墨使節登 城之時分御家門家御存意被仰立候儀ハ御尤之御事御座候へとも外様御大名衆御政事係り候事ニ御連り堀田様は御出有之儀之種々説も有之哉ニ承り申候是迄御隱割を被當候儀之因循之事ニ而方今之御時節御改革ニも相成候ハ、宜之可有之候へ共是迄之因循且之手前ニ屆兼候儀有之候へハ御家來 公邊を奉恨候儀如何可有御座左様之事ニ不相成様兼而心を盡候儀臣下第一之職務可有之歟と存候且京都より御不平之御方々に御照應等有之御隔絶之一條此許當時之見耳ニ而之全軀之形勢左様ニ之無之様御座候徳川家御洪恩三百年浴候御方容易之儀有之間敷設併未然之事ニ付慮見及不申候申談候而心を可申候 公邊首尾を少々被欠候而も京地之御響々諸侯方之御氣受ふと重疊心を用勿論 公邊に御戻且御迎被爲成候様も無之との儀夫々承知仕御尤御儀ニ而候處此境現事ニ臨殊之外六ヶ敷たとへ一事起來御切切ニ相成候へハ御戻之形御同意ニ相成候得之御迎之形と相成諸事先ツ其鹽梅有之必ず御迎と申儀ニ之無之候得共勢不可止子細茂有之甚以難事ニ御座候併 御禮有之諸侯方に御助勢人御内々被仰進向々有之由之儀公然と井伊様方に御付答有之たる由承込候段今日清山新兵衛御 御次ふとも得斗申談深心を用城方罷歸内意申出候此許之形勢實ニ不待時宜ニ至諸侯方も右之御取扱ニ相成候事と相見申候事 御次ふとも得斗申談深心を用候様相含可申候土州様御相談筋一條御内通と申譯ニ之無之候得共其時分之勢甚難儀之御取扱ニ有之候得とも御論説之通事理當然有之是又得斗申談置可申越前守様御事ニ而井伊様御托之一條之御直ニ被仰談又ハ御書中ニ而被仰進候而六

ケ敷御氣質自然御逆怒ニ御觸被成候而之勇姫様御爲ニも御宜無御座候付藏人ノ中根親負に得斗熟談いたし候様被 仰付御小屋に招喝合上よ御酒肴など被下同人儀 御趣意殊之外奉感服段々實情を囁き此上之公邊向御開ケ只々御主人様御家之爲ニ相成候様熟願ニ有之何事も無遠慮申聞吳候様可成丈 公邊之御安心ニ相成候様心配可仕越前守様にハ如何様共思召之被爲在聞敷御謹慎且御中屋敷御引移等諸事穩ニ相濟親負初難有カリ申候御安心候様存候且又六月廿二日假條約御調印御渡之節ニ 御存意無之候ハ、被仰立およひ不申趣ニ而別段御建議不被差出候此後たり共寛ナル節之勿論及御取遣申候得共此後四月廿四日御沙汰ニ五月朔日迄被差出候様被 仰出御國通議之日無之右様之節ハ不得止此元限伺取可申と存候御一門衆監物方ふと專論説有之候趣委細承知仕以往之處猶更復考仕可申調導中書付被遺熱覽仕御國元一統之御模様等相分申候處木下眞太郎書達之内 御方々様御國勝手之儀 此方様迄ニ無之列侯方之御爲ニ而至極御同意ニ御座候堀田様御上京何事もすらりと相濟候へハ右等之處も十二七八之被行候勢御座候處 徳川家國初以來之禁向京師御直訴之御向ニ有之十分御疑い致出来已ニ爰元ニ而之左迄存付不申候得共御許ニ而之京地御照應之江戸表隔絶之御心遣有之位ニ而中々急ニ相調筋之相見不申其餘書中其本を存不申論ニ有之候へハ實事一々被行候儀如何可有之哉 御參勤御弛之説も 徳川家を一ツ御押立有之其上ニ而京都之方如何様共被奉安 叡慮御大策有之候ハ、却而天下之動搖無之方職ニ被考左候へハ御大沿革等速ニ可被 仰出何分ニも内輪混雜ニ而日々被押移世之日々下り行遣恨千万ニ御座候猶又西洋流操練御備之主臺よ改革被申儀之如何之間違候堀内彈右衛門に御聞被成候ハ、明白可仕既ニ同人方 公義ニ而も御取用 此方様ニ茂御取起ニ付殿ノ方ニ一手西洋組ニいたし候而加勢等ニ出候而之如何哉と相談有之候付先ツ取まらへ見候様申聞候事有之候得共是以夫迄之事ニ而打止申候素よ堀田様御内意も有之且諸藩之有様不得止勢も有之且之現實之處近年外夷往來且内輪ニ之共御元よも御心遣被成候通 御兩殿様御出馬之不及申上上々様御立除等中々一通之心遣ニ而之無之去ハ逆差迫り不申内多人數被召 呼候茂 公邊之御響キ又御國力も有限事ニ而心ニ任せ候儀ニ無之仍而万一兵端之萌も有之豫々相分候ハ、早打を以御人數被召登候得共火急之變茂難計兼面目

白臺ニ而略調練催之節藏人儀追々見習ニ罷遣候處是輕とも之内ニ之引返ノ之江戸詰之者多鉄炮打方不得手甚敷之手ニ持火皿ニ吹付候位ニ御座候而片時も安兼候而昨年来申談候處ニ而之逆も今之儘ニ而之難相濟是輕之不及申小役人も鉄炮精古致せ 御馬先を初 上々様御立除之節銘々炮器相携候ハ、可也御間茂渡り可申火繩筒ニ而ハ第一火繩大造之事ニ而求も出来兼持越之天ニ他所者急速ニ駈付候哉茂難計第一之雨天之節打方出来兼雷擊銃ニ有之候得之夫事之難無之付札、玉響火繩等日數十日分之持夫三百七拾六人之内 既先々月強風雨之節猿島ニ而打方兩人を初御役々立合見分いたし候處打方何之支も無御座候實ニ利用之器ニ咄合いたし候得共御備土臺よ取崩し申儀夢々無御座候御門ニ可惡張札之事御聞込之由御紙面ニ而初而承知仕万一之御門番出し惡キ稜も有之押付置候哉茂難計三御門番人呼出精々承せ候處素よ右様之事有之候得之一々差出候得共一切左様之儀無之段申出候如何之間違候哉此元ニ而も難説區々有之御明察可被下候藏人儀天下之動靜宇内之模様等素よ然知可仕様も無之折角詰感をも被 仰付諸事屆兼候儀而已ニ而三百里隔居候得之事情之双方貫キ兼御心配を感只々恐懼仕居候迄ニ御座候不遠發足仕管御座候間下着之上萬端御相談可仕前件稜々不惡様御被見可被下候多端之儀も御座候得共先一ト通貴答仕置申候

九月十五日

九月十七日閣老問部詮勝上洛して妙滿寺の旅館に入る

〔夷事輯録〕

問部侯上京之事

京都方來狀

一九月十五日出京仕翌十六日春日講岐守に罷越委應接申候九條様應司様御役御免近衛様御攝政人善ニて廣橋様久我様中山様万里小路様御病氣ニ而御役御斷ニ而御引入粟田口様ハ自然之御備とて御用心ニ而御廟議に御加り無之山風聲承申候春日咄ニ此節問部様十七日 供廻帶刀十七八人位上 京ニ付而ハ 勅許之方ニ相成可申哉と案勞之山賢不肖用捨ニて

安 政 五 年

卜候様全休海防并此節之儀ニ付應對并對話一切相斷候へ共右迄ハ及咄候由ニ御座候柳川^星當月上旬病死梅田源次郎十日比ニ被召捕手結足結ニて拷問之由是ハ様々取沙汰御座候へ共與黨を集と申候處實説之由外ニ儒者一人醫師一人板屋父子同様之由ニ候宿々ニも不審成者ハ吟味之上追拂之由今少し靜謐ニ相成候ハ、打廻可申候

〔公書〕

薩州西郷某咄之趣

- 一 間部様去ル三日上京之様子關東方御威勢甚敷由左ニ大略を聞取記申候
- 一 水戸様之京師御留守居何某父子^{鶴岡父子}被召捕候との事
- 一 諸國之書生餘計ニ被召捕候由御國松田某も被召捕薩ノ西郷北條も立退候を伏見迄追手懸り候由
- 一 柳川青眼之流行病ニて果候由^{青眼ハ有名之儒醫ニ}
- 一 九條様ハ京方御役御免ニ而席下り被仰付候由其跡近衛様被 仰付候由ニ候得共右關東之勢ニ而ハ九條様再動ニも相成可申哉之見込之由
- 一 先般 留慮之趣御出格之御書付幕府へ被 仰進候處土州様方へハ御寫被差廻候ニ付土州様方幕府に御懸合ニ相成候由阿波長州杯近來余程御張込ニ相成居候由
- 一 水戸ハ正義方御役人ハ惣而退役ニ而結城方之ひまり候由御末家讀岐守様御城方ニ付右之通相成候との事
- 一 老公杯之死を給り候様後道成行可申幕府之勢ニ有之候へハ 京師も 御威光等此末甚々奉氣遺居候由右等之謀主ハ水野ニて^{水野土佐守紀}有之候由
- 一 此節穩便晴候付此後ハ種々之珍事も出來可致見込之由 午十月四日熊本通懸ケ承候事

九月廿七日幕府蝦夷地開發守衛の爲め之を仙臺秋田會津盛岡庄内津輕の諸藩に分領せしむ

〔神庫文書人御密書官輯録四百五十印〕

蝦夷地開發守衛之儀陸奥守様領分ニ被成下

(袖書) 九月廿七日被 仰渡之

書付寫

松 平 陸 奥 守

蝦夷地開發守衛之儀當節之時勢專要之事ニ付別段之譯を以領分ニ被成下候松平肥後守佐竹右京大夫酒井左衛門尉茂同様被 仰付候間諸事申合守衛開墾等格別行届候様可被計候尤箱館表松前地御警衛向之儀是迄之通可被心得候且又南部美濃守津輕土佐守持場之儀之只今迄之通相心得陣屋有之場所ニ而相應之地所可被下候間是又申談一同入精相勵可申旨被 仰出之

佐 竹 右 京 大 夫

同文言

松 平 肥 後 守

同文言内海御警衛者 御免被成候

酒 井 左 衛 門 尉

南 部 美 濃 守

津 輕 土 佐 守

蝦夷地開發守衛之儀當節之時勢專要之事ニ付別段之譯を以蝦夷地之内割合松平陸奥守松平肥後守佐竹右京大夫酒井左衛門尉領分ニ被成下候其方并南部美濃守持場之儀ハ只今迄之通相心得陣屋有之場所ニ而相應之地所被下候間一同申談入精相勵可申旨被 仰出之

安 政 五 年

内海御警衛被 仰付二之御臺場御預被成候防禦之手筭兼而嚴重可被申付置候小笠原右近將監茂同様被 仰付五之御產場御預被成候尤内海御警衛之向々可被申合候

小笠原右近將監

同文言五之御產場

松平肥後守酒井雅樂頭御書院溜其外者お御白書院縁類老中列座下總守申渡之

十月八日長藩吉田寅次郎返書を伊藤利輔後のに托して我藩藤木武兵衛に贈り添ふるに時勢論其他書數通を以てす

〔吉田松陰傳〕

六月念五芳嶺以八月下旬達承老臺東上之議有所抵牾遷延不果慙々何止日下時勢切迫幕府不特違 勅調印復將發私使於夷國正議幕議一覽不見再起之色所頼者 天朝元氣凜凜不據公卿亦皆寒寒匪躬是可賀也而在下之士梁星巖病歿梅雲濱就幕捕繫伏獄使人驚胆耳士生此間欲爲楊柳則楊柳矣欲爲松柏則松柏矣排霜凌雪枝折幹摧無陽春之回哉老臺社中長者性素沈毅今日之務必有至當不易之論僕願預聞焉僕之屑見誠謂觀望持重今正議人比比皆然是爲最大下策何如輕快抽速打破局面然後徐占地布石之爲勝乎囚室慮度時勢論以下數通寫致一一垂教宮部永島二君近日何如情態併此書及所致數篇示之何幸如焉俱機密一事僕雖平日同志不敢輒告今突然示三君諒僕困苦幸有處于此實爲望外奇幸焉來原此次蒙命往崎中村近進政府白井坪并無異舊日幸放念多事卒卒萬未既

又曰

此生稱伊藤利輔者吾徒未役反好從吾徒遊才劣學賤質直無華僕頗愛之向因事上京數日而歸此行從良親往崎枉道出貴藩幸辱一聆兼有所教焉嗚呼

時勢論

其竊カニ時勢ヲ觀察スルニ實無窮ノ大八洲之存亡誠ニ今日ニ迫レリ誠ニ恐多キ事ナリ上ハ 主上ヨリ公卿ノ歴々ヨリ下吾吾士民ニ至ル迄中々一通リノ心得ニテハ相濟サル事ナリ抑徳川家征夷將軍ニ任セラレテヨリ以來外夷控馭ノ策着々其宜ヲ失ハレタルコトハ一朝一夕ノ事ニハ非サレトモ中ニ就テ近年墨夷ノ事起リシヨリ以來彌以テ内外失策ノミ行ハレ條約調印ニ至テ極レリ去年墨夷之來ルヤ某長大息シテ云ク神州已ニ陸沉セリ亡國ノ事ハ皇國ニ於テ振古以來斷テ前蹤ナキ事ナレハ何如シテ可ならンカ已むコトなくンは漢土賢哲ノ往跡ナリトモ學ハムカ伯夷叔齊ハ何如伊尹太公ハ何如霍義徐敬業ハ何如ト頻ニ苦惱スル中恐多モ九重ノ 勅諭天下ニ布キ草莽迄モ響渡リ死者再生ノ心地ニテ幕府奉揚諸侯協同天兵一時ニ墨夷ヲ膺懲スルノ事有ムト日夜懇企セシ所豈計ランヤ六月廿一日神奈川ニテノ調印幕府明カニ勅諭ニ違背セリ爾ノミナラス正論忠志之尾張水戸越前等ヲ翻調スルニ至ル某是ニ於テ 天子逆鱗何如程ニカアラント恐惶ニ勝ヘス而シテ今ニ至ル迄何タル御處置モ承ラス尤モ幕府尾張水戸ハ勅諭ヲ下サレ且公卿親姻ノ所縁ヲ以テ二三名藩ヘモ御内書ヲ發セラレシ由ナレトモ又幕幕布事モ承ラス加之水戸ハ奸臣之輩父子ノ間ヲ離間シ内輪甚不協和ニテ近日正論者二人 武田彦九郎 安島帶刀 ナ論調シ奸臣二人 太田丹波守 鈴木石見守 ナ舉用シ 勅諭ノ趣イカ、可致ヤト丸ニ打明ケ幕府ノ困老ヘ謀リシニ困老云此 勅諭ハ傳奏ノ隨意ニ書セシ者ニテ眞 勅ニハ非スト對タル由カ、ル次第ニテハ中中以テ少シモ御爲ニハ成ラス尾張モ元來天下ノ務メニ疎キ國風ニテ竹腰如キノ奸物甚々跋扈スル由サレバ天下頼ムベキ諸侯ハ至テ少ク勤王ノ事ハ思ヒモ寄ラヌ事ナリ

天朝格別ノ御英斷ナサレステハ神州ハ必ス夷狄ノ有トナルヘク 皇太神ノ神勅モ今日切ナリ三種ノ神器モ今日切ナリ豈痛哭ニ勝ヘケムヤ幕府ニハ墨夷トノ條約モ相濟近日ノ内外國奉行目附等ノ吏員墨夷ヘ渡海致ス由然レハ和親ハ益々固マリ幕府ヨリ外夷ヘ許遣ス所ノ諸港モ漸漸開市致スヘク夷官夷民共モ追追占據致スヘク加之魯西亞英吉利佛朗西等モ同様條約相濟殊ニ清國覆轍ノ鴉片ヲモ持來ルヲ許シ二百年來徳川家第一嚴禁ナル天主教ヲモ許シ繪圖ノ良法ヲ改除

安政五年

シ他日ノ忠害已ニ目前ニ備レリ今日ヲ失ヘハ千萬歳モ機會ハ決シテアルコトナシ幕府 天勅ニ背キ案議ヲ排シ其私意ヲ逞フスルハ頼ム所ハ外夷ノ援ナリ然レハ幕府ニハ諸國義舉ノ起ラヌ内ニ早ク外夷ノ和親ヲ厚クスルノ謀トミヘタリ只今ノ勢ニテハ 天朝ヨリ幾百通ノ 勅諭降リテモ諸侯ヨリ何千通ノ正議ヲ建白シテモ幕府ニハ一向遵奉採用ハ無之及ヒ其外夷ノ和親ヲ急クナリ和親已ニ固マル上ハ天下正議ノ者ハ悉ク罪ニ行ハレ又 天朝正議ノ公卿ヲモ賈鋼誅戮ニモ天朝ニ今日ノ機ヲ失ヒ空論ヲ以テ實毒ヲ攘ヒ玉ハントアルコト實ニ恐多キコトナラスヤ

天朝ノ御定算ハ蓋シ諸侯ノ赤心ニテ人心ノ歸スル所ヲ御待ナサル、ナルヘシ誠ニ勿體ナキコトナリ當今三百六十諸侯大抵膏粱子弟ニテ天下國家ノ事務ニ迂濶ニシテ殊ニ身ヲ顧ミ時勢ニ媚諛シ其臣タル者御大事ト申事ニテ人君ヲスクメ勤王之大義ナトヲ夢ニモ説及サス何程聰明果斷ノ人君アリトモ決シテ義舉ヲ企ル事相成ラヌ勢ナリ是尋常ノ諸藩シカリ其奸惡ナル者ニ至テハ幕吏ニ連結シ其逆焰ヲ助長スルノ類少ナシトセス然レハ當今天下ノ諸侯ヲ御待ナサレテハ終ニ幕府ノ議ニ伏セ其末ハ外夷ノ屬國ト相成皇國ノ滅亡實ニ踵ヲ旋ラサルコトナリ直ニ此趣御落着遊ハサレテラハ天下萬民信服仕リ義憤ヲ激發スルノ御處置アラマホシキコトナリ勿體ナケレトモ 後醍醐天皇隱岐ノ出マシアレバコソ天下ノ義兵一同ニ起リタリ加之是ヨリ先キ 後鳥羽順德土御門之三天皇ノ御苦難モ有ラセラレタレバ建武之御中興中一朝一夕ノ事ニハ非ス孟軻カ荷爲善後世子孫必有王者矣君子創業垂統爲可繼也若夫成功則天也君如彼何強爲善而已矣ト申タルモ思合スヘシ某ノ所見ニテハ 主上大ニ天下ニ 勅ヲ降シ有ラユル忠臣義士御招集遊ハサレ又尾張水戸越前ヲ始メ正義ノ人罪論ヲ蒙リ又ハ下賤埋没スル者盡ク闕下ニ致シ外夷擁護ノ正議御建遊ハサレ度コト也某向ニ履取山遷幸ノ事ヲ議ス今前説ノ如ク行レハ遷幸ナキモ亦可也極手トシテ 桓武以來ノ帝都御持守遊サレ幕府ヨリ何程逆焰ヲ震ヒ悖慢ノ處置アリトモ御顧着ナク 後鳥羽 後醍醐兩天皇ヲ目的トシテ御覺悟定メラレハ正成義貞高德武重ノ如キ者果果繼出シハ必然ナリ 天朝ニハ徳川扶助公武一和トノミ仰出サル、故徳川は益々兇威ヲ逞ノシ諸侯ハ悉ク

徳川ニ頭ヲ押ラレ勤王ノ手足ハ出テス其下ノ忠義ノ士モ皆征夷カ諸侯ノ臣下ニ非サルハナケレハ其主人ニ先達テ義舉ヲ企ルコトモナラス終ニ 天朝ニ志ヲ歸スル者アリトモ志ヲ抱ナカラ老死致シ甚シキハ奸吏ノ手ニ入り囚奴トナリ戮死トナリ戀國ノ志モ日ヲ逐テ薄ク成行ナリ是迄ノ寛大ノ御處置ハ誠ニ凡慮ノ及フ所ニ非ス御尤ト申上シモ畏多ケレド今ヨリハ御果斷ノ時節到來ニテ今年今ノ形ニテ御觀望ナサレハ忠臣義士ハ半ハ死亡半ハ挫折シ幕府ハ益々聲威ニ募リ諸侯ハ益々幕威ニ攝レ而シテ外夷ノ忠益々深ク天下ノ事丸ニ時去機失何如共手ハ附中サヌ事必然ナリ此論尤ト思召バ別ニ祕策アリ此論不當ナラハ某最早勤王ノ手段盡果タル故只且ク主家へ機衷ヲ効スノ外致方ナク亡國ノ苦惱適從スル所ヲ知ラス痛恨ノ極爰ニ止リタリ

戊午九月念二

草莽臣藤原矩方謹識

十月某日幕府飯泉喜内日下部伊三次藤森恭助等を江戸に囚ふ

〔江戸自筆狀〕

安政五年十月十八日封廻狀之趣

未二月十三日改揚屋へ遺ス

改宰屋敷預

飯

泉

喜

内

御小姓組酒井登岐守組
曾我權左衛門家來之醫師

飯泉春堂養父

鳥津又次郎家來

日

下

部

伊

三

次

午十一月八日改揚屋入
同十二月六日出奔預ケ
未二月十三日同道人に改預ケ

小普請組小笠原彌八郎組
下田奉行手付出役
大 沼 又 三 郎
宰屋敷預 四 十

未二月十三日改入卒

細川復造と申立候小網町
名主ニ而欠落いたし候
改右同 伊 十 郎
四十四

未二月十三日同道人に改預ケ

二九御留守居古賀謹一郎家來
藤 森 恭 助
六十
藤村權右衛門組
御掃除之者 岩 木 常 助

未二月十三日同道人に改預ケ

林部谷太左衛門御代官所
武州葛飾郡借屋浪人當時病死
山本貞一郎妻 七 十 一
四十二

未二月十三日宿預

右同日同道人に改預ケ

青山鳳閣寺觸下
當山修檢利益院 行 一ニ印トアリ
五十五

未二月十三日町役人に預

神田久右衛門丁貳丁目藏地家持
鉄之助後見彌七召仕 源 助
五十七

未二月十三日同道人に改預ケ

御小姓組曾我權左衛門家來
醫 師 飯 泉 一ニ田トアリ 春 堂
三十八

未二月十三日同道人に改預ケ

島津又次郎家來
日下部伊三次伴 日 下 部 裕 之 進
二十四

未二月十三日同道人に改預ケ

小普請阿部十次郎家來
勝野豊作伴 勝 野 森 之 助
二九五

未二月十三日同道人に改預	右豊作妻	ち	二十九
午十二月六日出幸預ケ	同人娘	が	四十八
右同斷	同人娘	ゆ	二十三
右同斷	小野整三郎組御徒柴山範助		
	地借水戸殿家來		
	太宰清左衛門妻		
右同所未二月十三日改入奉	衆屋敷預ケ	勢	二十七
未二月十三日改入奉	同人方同居	雷	助
右同日同道人に改預ケ	京都町奉行岡部土佐守家來	承	三
	午十二月六日出幸預ケ 算		二十九

右於石谷因幡守御役宅御目付松平久之承立合因幡守申渡之
十月十九日本藩警備地域に於ける外船出入の申報省略の件に關し幕府に稟申す

〔相模國御備場御用付而諸御願御伺等〕

左之御方様に十月十九日御留守居代中根平八郎持參御取次を以差上御落手

外國御用御月番

太田備後守様に

越中守相州御備場御用相勤候付異國船持場乗通候儀出入共御備場詰之者よ、海陸兩道之早打を以申越其都度々々外國御用御月番様に早速御届申上來候處魯墨英佛共和親貿易等御差許ニ相成候上者以來異船必多度可致通帆候得者其時々注進御届等仕候儀彌以繁多ニ相成且ハ彼是費用も相懸候事ニ付平穩之御取扱中異國船持場邊乗通候而已ニ御座候ハ、御届不仕持場内旋泊等仕候節迄御届申上候様被成下度勿論異情を顯候歟不審之體茂見懸候ハ、早速御届申上候様可仕候此段奉伺候以上

細川越中守家來

清 田 新 兵 衛

十月十九日
安政六年五月七日太田備後守様より御呼出ニ付吉弘加左衛門助參上之處本文書付ニ如左御付札御用以御用入被成御渡候

書面之通相心得彌無油斷心附事替候儀者早々届可申聞候尤追而相違候迄是迄之通相心得候様可仕候

十月廿二三日頃下田滯在の米人四五人出奔す次て皆捕へられて其領事に引渡さる

〔嘉永風説帳〕

一午十月廿八日下田廻船問屋御出入西野佐六去ル廿二三日頃下田滯在之ア人之内四五人出奔ハ、候付御吟味ニ相成候處野ニ隠レ居候ニ付召捕コンシユルに御引渡ニ相成候由申來候事

安 政 五 年

一同十一月二日前條之末段左之通申來候事

尙以追々寒氣相増申候折角御厭可被遊奉祈候下田滞在之亞人コンシール并通辯共不相變賣女を愛し候由今般松前
來候コンシールも賣女を見立ニ歩行候由ふれ共餘ニ大之男故賣女出合不申風聞御座候取急亂墨御仁免可被下候
一筆啓上仕候——然者下田表ニ而出奔之亞人之箱館ニ罷在候中よ不埒之儀有之大酒又ハ博奕ふと云ふし且又下田ニ
而茂亂妨等いたし候ものにて船中用金盜取外國同様之積ニ而一旦逃去いつまに職身分有付鯨漁ニ而茂いたし候心得ニ
有之處皇國ハ人物茂相違却而不都合之儀故山野ニ打臥居候處被召捕候儀ニ有之候由ニ御座候
一松前ハ罷越候コンシール者下田ニ相殘居候右者亞國ホーハタン船長崎に來候哉之風聞御座候付右船下田に來次第下田
并松前之コンシール兩人共同船ニ而神奈川に罷越開港取極仕候之由尤神奈川も少々見込違等茂有之哉之風聞御座候且
松前ハ罷越候コンシールハ珍敷大之男にて七尺五寸餘も有之と申事ニ御座候末名前等承知不仕候右爲可申上愚札如此
御座候恐惶謹言

十一月二日

西野佐六

十月廿三日幕府神奈川開港取調係を任命す

〔嘉永七年風説表〕

一午十月廿三日御沙汰書寫左之通之由ニ而江戸表より指
廻來候事

十月廿三日

外國奉行

水野筑後守
水井玄蕃頭

下田奉行 兼帶

外國奉行 兼帶

井上信濃守

箱館奉行 兼帶

堀織部正

村垣淡路守

神奈川開港取調方之儀改而御用懸之不被 仰付候得共

當節指向候急務ニ而不容易大業之儀ニ付一通ニ而ハ行

届中間敷候間何レニ者神奈川奉行兼帶之心得を以万端

引請取扱諸事無伏願申談一同精力を盡し取調方十分行

届候様可被致候

右於新番所前溜備後守申渡之

御留守居上席 大目付 久貝因幡守

御留守居次席 町奉行 池田播磨守

大目付 伊澤美作守

町奉行 石谷因幡守

御勘定奉行 土岐下野守

立田主水正

御目付 松平久々丞

野々山鉦藏

都筑金三郎

加藤正三郎

御勘定吟味役 塚越藤助

勝田次郎

神奈川開港之儀當節指向ノ急務ニ而不容易大業之儀ニ

付取調方一通ニ而ハ行届中間敷候間外國奉行申談一同

精力を盡し引請取扱候様可被致候

右於同所同人申渡之 但馬守侍座

十月廿六日藩主齊護來年在府來々年請暇歸藩の願書を幕府に提出す

〔安政五年江戸機密間日記〕

十月廿六日御用番脇坂中務大輔に御使者御留
守居を以被差出翌廿七日晚御付札御送圖有之候
御書付寫

私儀嘉永六丑年相模國御備場御用松平大膳大夫兩手引受ニ被仰付私儀翌寅年參勤卯年御暇之割合ニ被仰付候全躰寅年

安政五年

之御暇順年之處右之通ニ而御暇不被下置直ニ歸府仕其以來參暇當時之振合ニ相成居中候前々方之順年振替候而ハ國許政事向を初段々無據差障之筋有之重役共追々志願之趣茂申出候得共自由々間敷奉願候儀差憚居中候然處今般大膳大夫儀兵庫表之御警衛被仰付是迄之御備場之當分代之不被仰付由御沙汰之通御座候得之一手持之形ニ相成申候尤向地之丹羽左京大夫請持^一而參暇同様之順年之事ニも御座候間私儀以前之通之割合御引戻被成下候様奉願候左候ハ、來未年直ニ致在府來々申年御暇被下置候様仕度此段も申上候

十月廿六日

細川越中守

十月廿七日脇坂様より本文御願出ニ御付札御用御渡

十一月廿三日藩主齊護特に従四位上に陞叙せらる

〔安政五年 江戸機密間日記〕

十一月廿三日

- 一 今朝五時之御供揃ニ而御登城被遊候事
- 一 御登城被遊候處爲上意從四位上被爲蒙 仰奉恐悅候事

〔公書〕

細川越中守

其方儀家督以來多年精勵廉立候御用數度被相勤國政向之儀申付方宜其上相模國御備場御用格別入精被相勤候ニ付旁今般別段之思召を以從四位上被仰付候條以後之家格ニ者被心得間敷候

十二月朔日德川家茂將軍宣下あり

〔安政五年 御書付并諸御觸達〕

口上書

上様去ル朔日 將軍 宣下被爲濟御當日方 公方様々奉稱候段從江戸申來候此段爲被奉承知申達候條支配方に茂可被知せ置候以上

十二月廿四日

右吉市右衛門 朽木内匠

御日附衆中

十二月十五日在府本藩士池部啓太は先年幕府の咎を蒙りし事件に關する記録を吉田平之助に提出す

〔吉田文書〕

寒中彌御安康奉拜賀候先以前此間者罷出御妨ニ罷成申候段其初先年私御咎メ被仰付候一件ニ付御心得ニ相成申候間事實之趣書記奉入貴覽候様被仰聞候ニ付貴所様御手許限之儀ニ付無服藏有林之趣相認メ差出申候乍此上重疊宜敷様奉伏願候右之段迄如是ニ御座候以上

十二月十五日

啓 太

平之助様

猶々高島書之早速頼置候處昨日之講武所出方無御座候ニ付認メ可申との事ニ付墨摺ニ家來遺摺溜候處折惡來客有之認メ出來兼候由兩三日中ニ之出來可申と奉存候已上

二白私身分之儀ハ本文ニ認メ置候通水津熊太郎逐一承知仕居中候間何卒同人に御聞被下候様吳々奉願候以上

安政五年

三〇一

演舌之覺

私儀先年從 公邊蒙御不審御當地に御呼出ニ相成候一件御尋ニ付内事之趣左ニ相記奉入御見候
被仰渡之大概

其方儀炮術修行として追々肥前長崎に罷越候内國産之雜茸人參持越高島四郎太夫に頼依物役所に賣込買ひ其時々間ヒ
銀受用致シ且伊達五兵衛肥後國産人參買請として罷越候節買集メ方世話致遣候儀畢竟國益を存計候儀と之乍申爲挨拶
反物其外相送候儀如何之儀とも不存附致受用候段不埒之至ニ付押込申付ル
但百日ニ而被成御免

一 雜茸追々持越候儀之商家之業ニ而重疊奉恐入候右内實之無余儀次第炮術執心ニ付毎ニ自勘ニ而罷越候處炮術積古之儀
之諸入費大物之儀ニ御座候處旅用金ニ而も壹兩御國ニ而百拾五六文目丁百ニ八貫文余長崎ニ而之九六錢六貫八百文
位丁百ニ六貫五百文余ニ付金一兩ニ付壹貫五百文計之欠ニ相成雜茸持越候得之一斤御國ニ而凡六匁余ニ而金壹兩ニ
付拾九斤位長崎ニ而壹斤四匁拾九斤ニ而銀七拾六匁錢双場壹匁百四五文先丁錢百文ニ相當候故七貫六百文御國ニ而金
壹兩八貫文之内引四百文之欠ニ相成雜茸持越候而も矢張欠之相立候得共金ニ而持越候得之壹五百文之欠雜茸持越候
得之四百文之欠ニ付旅用金を雜茸ニ而持越申候右様心配仕炮術相學不申候共可被宜敷西洋諸國大ニ炮術相開ケ候趣追
々承知仕候得共炮術師筋家費人として志候人無御座就而私傳習仕度志願ニ而追々長崎に罷越高島方傳授仕候儀勿論一
己之業ニおみ迄ニ無御座實以御國家之御爲と相心得修行仕候段之御賢察可被下候

一 御國産人參之儀私手方之内實之壹斤も賣捌不申候發端之阿蘇産人參長崎方商人阿蘇に參り買受居候山之處長崎表御取
締ニ付頼斗買人來り不申阿蘇谷人參作り込居候向々難澁之由ニ而御郡代附根居^取り物書阿野五郎助が私儀長崎に手寄御
座候ニ付捌ケ方之見込之有之間敷哉右相捌ケ候得之阿蘇方一稜之產物ニ而屹度御國益ニ相成申候間心配相頼候段申聞
候間手本人參ニ代錢附相添差越候ハ、長崎へ頼越見可申段返答仕候處其後左之通

覺

一上人參 壹斤

代錢八拾目

一申同 壹斤

代錢七拾目

一下同 壹斤

代錢六拾目

右之通ニ御座候以上

月 日

阿野五郎助様

坂 梨 會 所

右之三斤各壹斤宛桐箱ニ入代錢附相添五郎助取次を以私に遣申候ニ付高島に頼越置春私長崎に罷越申候處去年手本
人參遣置候得とも人參之儀殊之外六ヶ敷品則自身取締御用懸り被仰付置候ニ付色々心配致居候間追々と之如何様卒取
計之筋出來可申候得共急ニ埒明不申手本ハ次第ニ古ク相成候ニ付先返置候との事ニ付五郎助を以阿蘇に返シ申候跡ニ
而承候得之坂梨御茶屋番何某職之品之由ニ御座候間同人手許且坂梨會所御聞合被 仰付候得之明白可仕と奉存候然處
右之趣御吟味之砌申立候處高島四郎太夫之其方手本として遣候人參之唐方渡之取計致候段申出候との趣ニ付夫レ
之全ク間違ニ而御座候間四郎太夫に御引合被 仰付被下候様願出候處御引合之儀之難被叶定而四郎太夫口裏ニ付申聞
可致了簡ニ可有之との事ニ付再應奉願候處三四度御呼出之上御引合御座候ニ付前文之趣申立候處高島方啓太夫申立之
通相違無御座段申上候處此間之啓太夫手本として送り候人參之唐方渡り之取計致候と申立候ニ而之無之哉○高島方右
人參一件ハ不覺之段再應申上候處不覺ニ而之不相濟段被 仰聞候ニ付左様から唐方渡之取計爲仕ニ而可有御座と申上

必定ケ様とハ不申上候○夫々私に人參之儀は唐方渡し之取計可爲致ト四郎太夫申立候ニ付夫々御吟味相決居候ニ付啓
太申立と相違致候得之御吟味仕直し不被仰付候而之難相成左候得之四郎太夫其方相拷問不被仰付候而之難叶四郎太夫
とハ師弟之間タニ而之無之哉師弟之間ニ而相拷問被仰付候様ニ相成候而之何程ニ可有之哉右人參唐方渡しニ相成候共四
郎太夫役前を以取計候儀ニ付何そ落度ニ相成候儀ハ無之双方申立之趣相違致と申迄之事夫レ等之所得斗勘考致し返答
致候様○ 得斗勘考仕候處私心得違ニ而御座候全ク右人參之唐方渡しニ相成申候○左候得之斤數ハ何程歟○坂梨會所
カ之書附通ニ而御座候○覺居候通申候様書附ニ符合致候哉そこが御吟味ニ有之候○三斤ニ而御座候○三斤ニ而之少し
○三斤ニ而少ク御座候ハ、拾五斤 是ハがふられ申候手木人參ハ三斤ニ相違無御座候強ク三斤と可申 ○直段之○平均五拾目○
國許ニ而之平均七拾目ニ相當候然るを五拾目とハ不審○國許之七拾目長崎之銀ニ而五拾目○然之何程之
中間ヒ銀有之候哉○國許七拾目之丁百四九厘文銀五拾目之丁百五貫文壹斤ニ付百文拾五斤ニ而壹貫五百文中間ヒ銀
御座候○中間銀之其方受用致候哉○受用仕候○人參手木之誰人送り候哉○阿野五郎助當ニ坂梨會所より仕出來候ニ
付誰と申候儀之存不申候○坂梨會所と申候之人參會所歟○左様ニ而ハ無御座大庄屋之宅を會所と申候○會所役人悉ク
呼出候而之御國許甚々御手數之儀ニ付得斗勘考致誰そ登人を差申立候様 會所役人ハ御斗心當無御座悉ク御呼出と申候而ハ
を以取斗候儀ニ付落度ニ相成候儀無之との事ニ付誰ニ而も可般宜と相心得由島市太郎と申候然處同人長崎に御呼
出ニ相成大當惑仕候由右様御呼出ニ相成候儀ニ御座候ハ、坂梨會所へ問合候上御返答可仕段可申置候處願兼申候
一伊達五兵衛阿蘇人參買受一件之儀高島カ添書之趣先年御國產人參唐方渡し之仕法出來兼申候處此節和藥種屋青木屋武平
次大村丹後守様は拜借銀返納相滞候ニ付右完納迄之内右株を差出置候ニ付和藥種屋株内分大村様御持株ニ相成候ニ付
御用達伊達五兵衛と申候者御國產人參買請として罷越申候然處町人相手ニ而之甚々煩敷有之候間御役人相手ニ致御双
方永久之御爲合ニ相成候様御談合相究メ度との事ニ御座候御國產人參唐方渡し之道聞ケ候ハ、往々屹度御國益ニ茂相成
候事故何卒有吉市郎兵衛様は茂被仰達宜敷御取計被下候様との趣ニ御座候間右紙面持參市郎兵衛殿に相伺申候處久兵
衛に談候様と被中間候間相津殿に參内意申入候處五兵衛小島權兵衛方にも參候山ニ付同人カ委承候と被申候間是迄阿

蘇人參買請として長崎カ追々參候者間ニ之密買之交り物等ニ致其末々つを河蘇人參は係候者長崎に御呼出等追々有之
御難題ニ相成候處此節伊達五兵衛願之通御双方御役人同志取遣ニ相成申候ハ、以後混雜不仕屹度御國辨ニ可相成と奉
存候間猶私も直様奉願候と申入置候其後阿蘇人參を五兵衛一手ニ引受被仰付被下候様との儀奉願候節も小島權兵衛并
私方も相津殿に内意申入願書之旅人方は差出爲申と奉存候右之末御郡方カ人參直段合之人參主ト五兵衛相對ニ取究メ
候様尤他所カ買人參候而も賣不申五兵衛一手ニ賣拂候様御座候世話致し遺候様との趣御達ニ相成候山右之通ニ付
買集メ方之儀ハ一斤も私世話之仕不申候尤右等願ニ付相津殿に兩三度庄村一郎助阿蘇御郡代在勤中ニ付兩度歟參り内
意申入候右等私奔走心配仕候儀五兵衛カ頼を受候儀計ニ而ハ無御座發端坂梨會所カ阿野五郎助を以相願候末一稔所柄
之爲就而之御國益とも存候故之儀ニ而御座候將又五兵衛カ爲挨拶相送り候品初度參候節まんとん登着土産として持越
申候滞留中追々拙宅に參申候ニ付酒飯等出候儀も度々御座候ニ付同人中カ戻り之節餞別として水前寺晒相送り申候土
産之見合ニ之答禮輕薄ニ御座候得共前文之通追々酒飯等出候ニ付相當之積ニ相心得居申候貳度目參候節之平安散十瓶
ニ唐筆拾本土産として持越申候此節歸りニ之朝鮮船相送り候覺申候是以答禮輕少ニ御座候得共此節も滞留中追々參候
ニ付酒飯等出申候ニ付前條同様ニ相心得居申候五兵衛一手ニ人參引受願相濟候節身祝として兵庫屋に有之候藤藤と申
酒五本持越申候ニ付不取敢少々肴を設け披露仕申候右土産物等押返可申處受納仕候段之誠以奉恐入候
付紙 本行阿蘇人參之儀佐分利十右衛門殿長崎御留守居在勤中相州御請持之譯を以唐方渡し之儀 公邊に願立ニ相成肥
後人參と申株御免ニ相成屹度御國益ニ可相成と奉存候私心配仕候節之御答メ之一條ニ相成人之幸不幸之無是非次第
併私存念之儀之相違申候事

一御吟味ニ相成候大眼目之米并具足と奉存候先米之儀初度島居甲斐守様御尋問之末御國許被差立候趣意之如何役人カ申
渡候哉と御尋ニ付高島四郎太夫と追々往復書狀之内不容易相見候ニ付御吟味之筋有之候段中間候右不容易儀と申候
之何等之儀ニ御座候哉と相伺候處米送り候儀之不容易儀追而可致吟味先今日之是迄と被仰候其後御吟味與力中田新太

郎は不易儀尋問仕候處此節之御趣意有之御吟味之不被仰付と申候右之通ニ付何等之事歟ハ相分不申候得共必定安東
小左衛門ハ小島權兵衛ハ内密申通候一件ニ可有御座後條ニ相記申候扱米之儀之高島四郎大夫儀長崎市中御救米御用懸
り被仰付置大鹽平八郎一件之時分世上饑饉ニ而長崎大ニ米拂底ニ付御國米願受度尤御奉行様方表立御所望ニ相成候得
共自然御斷ニ相成候而之都合惡敷候間乍苦身私歸國仕市郎兵衛殿ハ内意相伺候様出來候様ニ候ハ、表立御奉行
様方御所望ニ相成候手數可致候間指急キ出立致吳候様との儀ニ付即日日出立罷歸右之趣市郎兵衛殿ハ申達候處御國許之
相應ニ米之有之候間少々之儀之隨分送り方支無之段被申候其節天草之石本平兵衛方茂長崎ハ廻米之趣を以願出候ニ
付願濟ニ相成同人ハ柳川ハ罷越申候ニ付米御渡方之儀ニ付談合之趣有之青山傳兵衛柳川ハ被差越居候間私儀柳川之様
ニ參り傳兵衛へ面會仕平兵衛方幾日比長崎ハ廻米可致哉之趣承合右之趣高島ハ返答仕候様との旨ニ付柳川ハ罷越候處
同日途中ニ而青山と行違申候ニ付直ニ平兵衛旅宿ハ參り承候處下ニ付紙、本行石村平兵衛ハ御米相渡り長崎へ廻方仕候處高
奉懸可申同人ハ長崎ハ而も未納商人と唱へ公邊ハ唐物代余計ニ不納ニ相成居候處平兵衛御出入被仰候ハ、住々太物之御難題
不納を相納夫丈薩州様ハ不納ニ相成居候當時柳川様ハ取入居御同方様ニ而御側御用人格敷ニ被仰付同人を御信用ニ付御同方様ハ御難
處右之趣御役人内ニ内意申入候處平兵衛儀之代官ニ長崎御代官ハ御難題世話をしたし同人身分之儀之得斗承知被致居米一件ニ付
而之奉行澤井ハ左衛門を柳川ハも御難題其外御役々茂平兵衛人柄之儀承知ニ相成居申候定而御米之儀四部大夫手ハ御渡ニ相成不申
平兵衛ハ御難題ニ相成候所ニ平兵衛儀を要請ニ高島ハ申候ニ而可有之儀申立候而之儀太往々身爲ニ相成不申候との趣ニ御座候由右
ニ付已後平兵衛事ニ付何共不申出候儀存候儀而御難題ニ相成申候 自分御國米願受候儀第一ハ天草勿論長崎ハ茂相送候答ニ付
得之大概之趣御難題ヲ候由私儀御爲と存候儀而御難題ニ相成申候 不遠内相廻可申其段高島ハ申通吳候様申候候右之通ニ付米之儀其後之様子存不申候處御吟味之節米之成行精々御尋御
座候得共誠以存不申事故役人共石出平兵衛相渡候儀ニ付存不申段申上候處平兵衛名前を出候而ハ不宣左候得者御吟
味手廣ク相成就而之御國許より懸り合候役人共呼出不申候而之難叶左候得之御主人御手許ニ而不怪御手數之儀其方遙
々御呼出ニ相成候儀ニ付夫等之處得斗勘考いたし腹を居候而返答致候様との儀ニ付私引受御返答不仕候而之平兵衛ハ
懸合候向々御呼出ニ相成候ハ、誠ニ以 上之御難題と奉存候間乍恐御爲と存腹を居私引受申候併實以而不存事故御返
答ニ當惑仕候得共可也ニ間ニ合申候其石本平兵衛御吟味之趣有之御當處ニ而入平
一私儀高島方具足注文を請居候哉申御座 右之起之私高島ハ返り轉書狀を安藤小左衛門作り候と推察仕候右
書狀之一二ヶ條左之通

一私儀高島方具足注文を請居候哉申御座 右之起之私高島ハ返り轉書狀を安藤小左衛門作り候と推察仕候右
書狀之一二ヶ條左之通

此節談合一件ニ付具足數額相送候内締成并卯花おとし之自然之節御着用ニ茂相成可申と存候○自然之節兵糧米之私請
合可申○一方ハ私受持可申○自然之節之一先五島ハ橋籠不成事時之異朝にも相渡可申文牒之由今少シ委ク水津熊太郎
相覺居可申候右締威之大村丹後守様方拜領卯ノ花おとしと今壹領之雲州様方高島父子ハ被下候右先年徳丸原ニ而打方
之節父子共ニ當地に參り居候節御使ハ雲州様御留守居望月兎毛ニ而御座候同人口書之趣之國産人參唐方渡方之儀ニ付
高島方厚ク心配仕候ニ付主人ハ被遣候振合を以重役共ハ茂不申聞私取計を以送り候段奉恐入候との儀ニ御座候私方送
り候と申書狀ハ似書カマ、之儀是ニ而明白仕候且又高島家内之話ニ高島被召捕候後家さが被仰付其後追々與力小山頼
之助と申候者諸向方之書狀吟味として罷越私高島ハ送候密書歟見出候哉ニ而池部啓太と申候之如何成者歟と委敷相
尋申候由不容易書狀迎可有之譯無之必定安藤小左衛門列申談作り書持來候而高島方ニ爲有之振合ニ致候儀と相考申候
小左衛門方私に遺恨之無御座候得とも同人儀此方様方御扶持方を被下置御出入之者ニ付兼而之御恩報之云々密事を
御内通申上候段小島をだま候を信用致御役々ハ申達安藤に御扶持方増被下候ニ付種々謀計を以猶余計ニ御扶持方増
被下度との存念之趣之水津熊太郎深々存居申候小左衛門私欲を以人を讒シ小島儀を信市郎兵衛殿稻津殿ハ相達同人衆
之小島を信用被致實無事ニ而罪ニ落シ事實明白致候而も其儘ニ被捨置候儀誠ニ天道ハ是歟非歟佛家之宿縁と可申哉
一此節一鉢之御吟味之仕方只々押付ニ相成候儀島田治兵衛方内話ニ高島之屹度罪條有之候得共炮術開起ニ付 將軍様方
御賞詞ニも相成候人柄ニ付外事ニ托し被爲罪候との御趣意ニ付何そヶ條無之而ハ難叶由私儀も遙々御呼出此節一件世
上一統ごふノと風評致候ニ付何そ落度を御附可被成と申候

一私歸國身分成行被 仰付候後佐田右平殿方其元ヶ様ニ被 仰付候儀安藤小左衛門ハつが蔭其上小島權兵衛か余り早鐘
を突タ故と被申候右之趣之新兵衛茂能ク承知ニ御座候右安藤小左衛門之極々惡者ニ而高島口書并茂問違江戸へ御呼

返し御吟味ニ相成候筈之處自ラ不喰餓死仕候哉ニ承申候私身分之儀も小左衛門欲心を以小島を以同人人市郎兵衛殿稻津殿に申達兩人衆之小島申立を被致信用候私身分之市郎兵衛殿被殺候ニ付明白之上之今少し之世話可被致筈と申候人茂承り申候水津熊太郎御刑法方根取在動中之儀ニ付私無實之段承知仕居候得共前文之次第ニ付おらぶと聲不立ニ而救候儀出來兼候由其節之一件尋候人有之候ハ、何所々々迄も存居候丈ケハ申開可致と申候間何卒同人に御尋問被成下度奉頼候

一右御不審一件高島四郎太夫根本ニ而同人被仰渡ハ表向之中追放ニ而内實之安部様に御預ニ相成候處事明白仕候而之以前之諸組與力格を富士見御寶番半席ニ而御普代ニ被召抱講武所師範役被仰付追放迄 被仰付候身分之者を以前之格式も宜敷被仰付私儀者流を没枝葉之者ニ御座候處亡父六十年餘之勤功ニ寄り被下置候御擬作高百石被 召上跡式相續仕候故彌一郎儀之炮術算術測量術三藝皆傳濟游水練之目錄段之達之後目錄以上之藝と申達ニも相成天文厩學馬術いつを茂目錄相傳相濟居外々御擬作之部相續之御見合ニ而之過分之藝術ニ御座候得共藝之御用無之御合力米貳拾石五人扶持之御中小姓ニ被 召出候尤私儀炮術精古仕候發端方此節御吟味ニ付私引請打かぶり候儀等勿論 上之御爲と存候末之儀ニ付何如様ニ被 仰付候共所候存念ニ之無御座候得共父亡靈ニ對候而之不孝之罪を請候段之數敷奉存候右等之儀私申上候而ハ重疊奉恐入候得共去年私儀御當地に御呼登之儀も偏ニ貴所様之御丹情御推舉ニ因候儀御禮誠ニ以難盡言語悉々奉存候就而猶ほまへ候儀と可被思召候得共御尋之趣ニ付私之赤心打明し相達申候間深々御没取可然様御工夫を以御執成之程幾重ニも宜敷奉頼候以上

十二月

吉田平之助様

十二月十五日横井平四郎福井を發し歸國の途に就く

〔橋本左内全集〕(十二月在藩村田より)

池部 啓 太

一小橋先生御願歸省の事松大夫北歸之上治定に相成當月十五日頃此表出立に御申候三箇石五郎掃原幸八平瀬儀作三十同道被命候三上有用之人材依て諸藩更歴候は、國家之有益を開き候事可有之長崎佐賀鹿兒島等へも相廻り事情盡し度仍て又有志に結び旁器械製産等之事取調下之關長崎にては能々交易之都合を謀り候々時日を歴可申其内兼て熊藩へ御頼み先生再來福の事成就候は、同道にて可及北歸手筈に御座候佐賀鹿兒島兩侯へは兼て参考生(三箇)始罷出候は、宜敷と申事は初夏之頃か御頼に相成候事に奉存候向又翻斷無之様に願出度此邊一寸雪江君迄御注意可被下候

十二月十九日大島謫居中の西郷三助様書を長岡監物に贈りて自己の近況同志の企圖等を報し且つ同藩土堀仲左衛門をして面議せしむる所あらんとす

〔先哲遺翰〕(子爵米田家藏)

酷寒之御御坐候得共彌以御壯健可被成御坐恐悅之御儀奉存候尙拜調仕候節ハ旁御懇志之段難有奉佩感厚御禮申上候着涯々色々混雜ニ取紛書狀も差上不申甚以不敬之至何卒御海恕可被成下候隨而私事土中之死骨にて不可忍儀ヲ忍ひ罷在候次第早く御聞届被下候半天地ニ耻ケ敷儀ニ御坐候得共今更ニ罷成候而者皇國之爲ニ暫之生を貪居候事ニ御坐候御笑察可被成下候扱同藩堀仲左衛門と申者此節罷出候處關東之事情承り誠ニ越候之御忠誠奉感服候就而之弊國之義何とも残念之至ニ御坐候得共都而瓦解仕連も人數被差出候儀不相調候間同志之者共中合突出仕候外無御坐決心仕居候仲左衛門ニ之又々出足仕候間何卒御達被下度奉合掌候何も御直ニ御聞取被成下度省略仕候越藩橋本ニも捕まを候由御坐候得共此度之儀ニ付而之決而相崩れ不申段も申來候いば此機會ヲ失ひ候而之實ニ 本朝ハ是限り相考居中候仰願くハ天下之爲御伏藏なく堀に被仰付被下度是而巳奉祈居候此度御厚禮旁奉捧愚札候恐惶謹言

十二月十九日

西郷 三 助

長岡監物様御侍史

安政五年

三〇九

追啓上此度罷下候處直様改名仕居候儀被申聞變名仕居候又々幕方御用召申來候儀無相違御座候半其節ハ死亡之筋ニ被申切賦之由ニ御座候間此段も内々申上置候若哉御書共被成下候節ハ權原與三次と申者私叔父ニ而御座候間其方に差向ケ被下度是又奉願候

十二月廿一日水戸藩鶴飼吉右衛門等加州大聖寺藩士に預けられ鶴飼幸吉等高田藩士に預けらる

〔安政五年 江戸自筆狀〕

午十二月廿一日左之通

水戸殿家來

〔本朱書〕 安政六年未二月十三日此四 鶴飼吉右衛門 六十二

右御吟味中松平飛彈守 加州大聖寺城主十萬家來に御預置候間引渡方并手當等委細之儀之石谷因幡守に承合候様可仕候

木屋町三條上ル大坂町

米屋久助借屋儒醫

〔本朱書〕 水戸殿家來鶴飼吉右衛門侍

未二月十三日此四人權原 式部大輔家來に改預ケ 鶴飼 幸吉 三十三

同人侍

字 喜多 一 蕙 六十五

應司殿家來

小林民部 權大輔 五十三

字 喜多 松 菴 三十四

益田 伊 織 三十六

鳥丸長者町上ル町小紅屋

芳兵衛借屋儒者

三國 大 學 五十

池 内 大 學 四十六

右神原式部大輔 越後高田拾五萬家來に御預

右神原式部大輔 石屋敷一欄外

十二月廿七日日本藩脱走松田重助變名を以て大坂より書を弟山田十郎に贈り其近況を報す

〔永島文書〕 (憂國遺音)

未得拜安候得共一楮拜呈仕候時下愈御清安珍重ニ奉存候儀事兼而姓名御間及ひ被下候由御實兄松田君方拜聽仕候不肖之者ニ御座候得共爾來ハ御心安被成下候様宜敷奉願候現天下形勢如何被成御覽候や感嘆之至ニ奉存候

一去九月比より名侯方御縁邊御手續を以御内々御上書有之且尊慮ニ而關東方未御沙汰無之中御決論ニ相成居申候春以來世上之風聞其實半ニ而候可嘆ハ三公已下無禮講之人數ハ久我殿徳大寺殿中山殿迄ニ而御坐候三條殿大原殿杯ハ一統下り申候無事以前トハ大分人物も見違候人も御坐候 帝ト宮ハ非常ニ候萬事 帝之尊慮ニ出候天地革命之時神州復古之機君子可默時候或時僕か哥ニ

降り積し雪の下ニは草も木も之を根さしてもゆるふりけり
おもふまゝとたとへ我よふらすとも跡残三笠の山の月るけり

一諸侯一統ハ上書可被仰付御定論之趣窃ニ拜聽仕虚名之國々恥辱可受ハ此時ト存實ニ心痛致候長州ハ有志も多ク有之事も成し安キ弊ニ候間先ツ此藩ニ依リ而求助力度且各侯方へ献言も仕度又ハ彼ノ大山を動爲後日大道ヲ開置申度籌策有之旁以當正月廿七日京都出歩致木曾路ニ懸信州二三藩立寄二月廿四日江戸へ着致候處鳥山病死ニ付差當り住居ニ困り申候暫旅宿ニ罷在三月月上旬住所相定所々奔走致候御屋敷ニ而ハ字源君に御出會仕及示談候事許多有之候得とも乍憚不學之田舎魂如何とも致方無御坐終ニハ逆論ニ罷成候此事後ニ而悔候事も不少候

一三月上旬比方中旬比迄之間廟堂御混雜言語雜申盡候四月中旬比より西城之御内論紛々として不定付而蓋頭土佐の知略可恐又可惡彼レニ比スレハ君子黨ハ如小兒見エ申候明君越侯之御忠節可感候へ共敵情御盡し不被遊候故惜哉雖有美事姦計之後ヲ逐候様之事而已ニ罷成候間其徒ニ此事甚嘆息致僕雖不肖蓋頭土佐が腹中ニ入り事計見申度と手段相求候處姦黨へ交ヲ入レ候者無之由此言承り愈以感逆ニ不堪獨斷ニ而内々其筋相求居候處五月上旬ニ罷成廟堂之議論内決致候

間最早我黨之力ニ難及依而水近士某ヲ以獻言致候大意乍恐三家御三公爲何等神君被立置候哉如是世にらん事我御慮
被爲在候而之御事と奉恐察候今御眼前天下存亡之機十分明白仕居候何卒御親藩御示談之上益人等ヲ御隠賢被爲在神
宮之尊慮御立被遊度若此一機御遊シ被遊候ハ、天下之有志之心を御失ひ被遊而已ふらす忽チ御一大事ニおよひ候ハ如
見御坐候也其他京師之精實天下形勢等ヲ論候書認入尊覽候兎角仕候中森黨愈得勢京師表之儀も無心元存候筋有之萬事
打捨五月下旬江府出歩致候其時口すさみ

ひさし之昔しは原とふりも勢我大君乃國はさし

途中二三ヶ所立寄六月中旬京着致候思之外此地平穩ニ而梅源輩ハ夢中ニ而大手ヲ廣ケ山子杯相持居候我黨打寄り森賊
之羅網中ニ不落入様覺悟致置七月上旬京師出歩致候然ル處最早山中迄も賊之手廻り申候間同下旬彼地方七八里程深山
ニ潜伏罷在夜分勉勵致居候處十月八日梅源網ニ懸候由同十三日告來其後有志之者五十七人手ニ及ふと申風説ニ付憤遊
ニ堪兼候第一可恐ハ天明年間之隱惡也今日我師ハ子房ト存十一月廿三日出歩同廿五日京着一夜様子相伺直ニ大坂迄引
取申候凡事ハ從此國彼ノ國計彼國ニ居テ此國動ニ而無之而ハ勝利少ク御座候此理非天下之士ハ不可議候大坂滯留今日
迄都合三十日成敗ハ天ニ任セ涯分ヲ盡し申候呼人天を動すの有時天人ヲ不動有時動靜順逆之理ヲ知ル者可當大事候望
歸賦曰

麟鳳既飛去 豺狼猥人咀 窮鳥網羅中 死生懸一舉 吾雖免黨與 友皆在囹圄 古今如是時 英雄爲處女 忠憤義氣
貯 誰向六州禦 一身壓萬兵 方寸吞師旅 諸葛通田壘 弄玉韞篋宮 范增好奇計 空老待賢胥 知時閉門守 讀書
發心腎 臥龍幽谷眠 良馬村里行 此地今何處 似秦又似楚

戊午冬

潜

龍

呼嗚慨嘆々々扱又當春於信州常用櫻井輩ニ出會ス望別示曰
臨カマ、
國隔東西千萬里、一面如舊吐肝肺、山雪雖深全是春、野梅風寒華不美、欲渡波高千曲水、爲越雲味淺間派、一枝先動

万花開、青天白日不盡意、呼□慷慨義烈士、無過國家皆如是、請看天下古今人、得平生志擬屈指、君子進退有終始、
獨道行死而後已

戊午秋有感賦

秋夜思人月淪□、可憐風露寄閑身、誰知隱忠成功志、一片誠心動鬼神

淺間乃嶽見てよめる

わまるまろふくてかふしき我のゐる淺間の山もたへすをへけり

城捨山ニ再び行て

いよしへ我思へる我よみせじとや今宵も曇るさらしおの月

再び吾妻へ下りし春花見て

昔しとて今日とて花乃かわらすハふとる浮世乃さま見すらむ

阿部公へ奉る書のはし

おもふこと積りノて塵ひらの數もたらぬ身をは忘せつ

東城出し時

今も見よ我ふとのほ我おもひ出で東の人乃夢覺るをし

浮世乃禍^{わざ}はらふふんとて京立出し時よみて人よ遺す

きよふ出であすかへるかも白川乃まをしあた波立のるをけ

山よて身残かくす時

うき時は深山かくまと思ひし雪乃奥まですまところふし

よひすむ秋

安政五年

紅葉はのいろ替り行比ふるにおもひてのこそ日送りける

荒園に残る菊のよふれみか人もるを心地こそあれ

戊午の冬難波の里立出んとて唐哥作し席に

命やはホトマは捨てをしらむれしむハ千代の名よみそありけき

巧文麗辭ハ君子所惡也所謂言達已蓋又見誠意有詩哥幸賢察之

一聖賢爲師古人爲友トハ誰も申事ニ候得共自看不脱凡骨不免俗情而論已高者君子所惡也僕物ニ思中人以下之人之病ハ右利害以上之人之病ハ國土之氣臭不能脱却也故已レ雖有思寒天地之間俗人視之所局氣臭之間爲足爲充哀哉大空無盡之天地ヲ不能窺僕或人ニ示哥

天地ニ充ぬる雲とみへしが我里れこ降る夕立

言過キ候得共譬天地ニ如有大小自ラ正義ニ迫者ハ大天地ヲ不知者也ニ高慢氣流ト云者一人之小天地ニ迫之甚キ者也故道六大州中ニ通心ハ寂然大虚ニ止ノ事ハ有萬世後是乃大丈夫之志ト存候如何々々

右之外得御意度儀も許多有之候得共態レ殘置候儀御推察可被下候尙得幸便巨細可申上候其節ハ松田君も御文通ニ相成申答ニ御坐候初而之御文通過言御海恕可被下候恐々不備

十二月廿七日

波多野右馬介

範茂花押

山多十左右衛門様

再曰御同志中未懸御目候得共乍憚可然御傳聲奉頼候

一前文中落候當春東行之節佐久間ニ内々出會致候從演幕及曉天事三日被人茂豪傑之士也併東地ニ而交渉候故思ヨリも弱敵ニ而候學廣ク氣剛ニ候得共論ハ群論而已也付而思半ハ性質也半ハ當時如是之身上思過見過多候故歎歸山老人之事

思出し老人も亦如是有シ歟ト當時之天下大海ニ船懸致タル心持ニ有之度候乗合之者何程あへき立候而も船頭ハあらぬ貌して相手ニ成不申是乃眞知有ルカ故也へく者未タ船乗之道ニ昧キ故也古エノ知者黙而不動ハ此船頭之其道ニ明ラナル意ト同し事歟ト存候書中口號

心驚く船路ホもともいへせん人乃力ニおよふ風か

一宮本大輔列之事老人權略可有之歟爰元兼而其用意致置候禍ヲ轉而幸トスルハ知者之功也必無過權會ヲ無失嗚呼

一山品繁之助既網羅中ニ爲落入誠ニ危事候因而爾來暫誰も不立寄答ニ御坐候

一御藩中若遊歴之志アル人も御座候ハ、御見合有之様御取計有之度候併醫業躰之人歟又ハ閑人ニ而御坐候ハ、此方も相待居申候何分用事多端助力之人無之付而ハ機會ヲ逃し大事ニ後レ候事不少候御賢察可被下候

一已來ハ要用密事おはくろを以書白紙ニ而差出可申候間裏より薄墨及引御披見被下度候

一子房白浪沙を逃遁之術得共妙候間孤島之小兒可恐事更ニ無之候必々何事も御懸念被下間敷候草略不具

十二月晦日幕府來年五月より神奈川開港につき同所に出店又は荷物運送取引希望の者は町奉行番所に届け出つべしとの旨を達す

〔風説書等〕

安政六年正月十六日

一左之書付御城より清田新兵衛持歸候由

御觸書寫

今度神奈川ニおきて亞墨利加魯西亞英吉利佛蘭西阿蘭陀右五ヶ國に貿易御差免相成來ル未年五月より同所御開港ニ相成候旨被 仰出候付此上自國商民共右國々に直商賣仕法筋并御制禁廉等ハ追々可觸示候得共差向御府内諸問屋諸商人

安政五年

三一五

共之内神奈川表に出店差出又ハ荷物差送り取引致度者者早々播磨守番所に申出差圖請候様可致候右之通町中不殘様可觸知者也

十二月

右之通從町奉行所被 仰渡候間町中共筋渡世之者之勿論家持借家店借裏々召仕等迄不洩様早々可相觸候

十二月晦日

町 年 寄 役 所

安政六己未年正月二日菊池源五西郷は大義の一舉に關する策略につき大久保正助利通よりの照會に答ふ

〔勝田孫彌著 大久保利通傳、水戸藩史料〕

大義の一舉に付御策略之趣幾度も承知仕候得共小生儀士中之死骨にて武運に拙く殊に大義を後にいたし端島に身を逃候儀譬へは破軍の降卒にて起て御斷り申上候儀に御座候得共敢ならずも先君公の朝廷御尊奉之御志親く奉承知如何にもして天朝の御爲めに不可忍之儀も相思ひ道の絶はて候迄は可盡之愚存に御座候間不顧汚顏拙考之儀も御返事申上候間必御親察被下御用捨奉希候

一堀より肥藩の決心一左右到來云々

按するに彌々決心候ても越え一往之返事不承届候て事を舉候儀は決して仕間敷越と事を合て繰出可申儀と相考申候夫而巳ならず筑、因、長の一左右も必ず見合可申儀と奉存候就ては事を舉の機會十分相調候はゞ兼々格護之事急に御突出奉願候其節疑仕候儀は忠義之人に無之候併機會を不見合候て只に死を遂さへいたし候へは忠臣と心得候儀甚以て惡敷御座候間是非御潜居被下候處奉合掌候

一堀若や幕下に相掛候節盟中之憤激云々

按するに盟中之人難に相掛候節無謀之大難を引出し候事有志之可爲儀に御座候哉大小之辨別を不分事と相考申候依人成程殘念之至に御座候得共堀も何の爲に奔走仕候哉其心志を御取被下度死を決して天朝の御爲めに盡すに非ずや左候得は其志を受續ことは盟中の盟たる大木と相考申候餘り理屈ケ間敷御座候共楠公の正行を歸したるは子々孫々までも朝廷の御爲めに忠義を遺したる被の大親切後世迄も仰き慕ふ所に候其節正行も共に戰死仕候ハゞ大孝子にて御座候や遺訓を守て忠義を盡し候所不論して明明なり能々御助考可被下候千騎か一騎に成候迄も我黨之忠節を盡候所肝要に奉存候必ず□□に不可移儀に御座候

一三藩へ暴命之云々

按するに三藩え暴命を發候はゞ彌破れ可申奉存候もふ此上は死を賜ふの外に暴は有之間敷其節は必ず彼方よりも應授之儀可申遣候事速に候はゞ其儀も間に合兼候半敷乍併盟中之儀は三藩と死生を共に仕度儀に御座候如何となれば先君公右三藩と共に天下之大事を被爲談朝廷之御爲に盡させられ候御事に御座候間同しく決心仕度儀と奉存候三藩動立候はゞ共に動立可申儀と奉存候

一堂上方に恐多くも難を掛奉候節云々

按するに堂上方に手を掛け候はゞ定て勤王之諸藩空見して罷在中間敷候間必ず疎忽に動立不申諸藩と合體いたし候て是非共御難を奉救儀肝要と奉存候憤激之餘りに事を急ぎ候ては益御難を可奉重候間能々御考可被下儀と奉存候

一陽明殿へ添書之儀間々御評議も有之候儀にて若や吟味不届候て異議之儀共に相成候ては却て不宜御座候間伊知地え考付候處得と相觸置候間御談合可被下候□□之儀同斷申置候間左様御納得可被下候

一諸藩之有志見當に相成候人云々

水戸 武 田 修 理

安 島 彌 二郎

越前	橋	本	左	内
肥後	中	根	毅	負
長州	長	岡	監	物
土浦	増	田	彈	正
尾張	大	久	保	要
田	宮	彌	太	郎

右之外御意見之趣難有感服仕候必御頼案被下間敷奉願候頓首

正月二日夜認む

正 助 様

正月某日薩藩堀小太郎我藩の形勢を視察し其意見を探らんが爲めに來りて津田山三郎等と會見す

〔勝田種彌著〕大久保利通傳所收大傳山格之助より山川港碇泊中の菊池源吾へ贈りし書

〔前略〕肥藩へ堀立寄候處彼方當時長岡杯嫌疑甚敷旅客等立入毛頭不調山坂津田宅に於て社中四五輩會談屢及事談候處彼方より申立候には我々其議論は御藩とは少々相違御見限りも右之管候へども迎も此節出勢の處も容易に六ヶ敷殊に主人は御國とは引替全く近衛家杯之様御親睦も無之本より同盟中京邊之時情全く不相通急速に突出は猶更不容易場合にて肥藩に於ては變を待つより外に異論は無之との様子に御座候由〔中略〕右次第御座候付迎も方今物興之處六ヶ敷未天時不至故職何れ今一機を相待申外無之儀に御座候何分御安慮可被成扱又堀生入京之處も今通にては迎も參り兼候様子に御座候

正月九日梅田源次郎等小笠原右近將監家來に預けられ頼三樹三郎等阿部伊豫守家來に預けらる

〔安政五年〕江戸自筆狀

安政六年未正月九日

〔本朱書〕

西園寺殿家來

御預中病死

藤井但馬

三十五

〔本朱書〕

有栖川殿家來

此四人二月十三日

飯田左

六十二

小笠原右近將監家來へ改預

三條殿家來因幡守替

森寺若

二十六

〔本朱書〕

鳥丸口地吉町々中借地浪人

御預中病死

梅田源次

四十五

右小笠原右近將監 豐前小倉拾五萬家來に御預

石屋敷昌平橋内家來に御預

正月十二日英船一艘品海に入り幕府に書翰を呈す

〔尊攘錄皇武令〕

大 日 附に

安 政 六 年

〔本朱書〕

鷹司殿家來

此四人未二月十三日阿

高橋兵部權少輔

部伊豫守家來に改預

青蓮宮家來

伊丹藏

三十四人

山口勘

二十六

河原町三條上ル町

てる借家儒者

頼三樹

三十五

右阿部伊豫守 備後福山拾一萬家來に御預

石屋敷昌平橋内家來に御預

覺

去ル十二日英吉利船一艘品川沖に入津いたし書翰可差出旨申立候尤此度者止宿者不致候得共運動之たま歩行ハ可差免候間諸事先達而外國人取扱方之趣ニ相心得候様向々ニ可被達候事

正月十五日

正月十六日幕府近々神奈川長崎箱館の三港を開き出稼又は移住を許すべき旨を達す

〔尊攘錄皇武令〕

大目付に

神奈川長崎箱館三港追々御開相成候付而ハ右場所々々に出稼又ハ移住いたし勝手ニ商賣可爲致條望之者ハ其港々之所役人に引合候様可致候右之通可被相觸候

正月十六日

正月十九日幕府軍艦旗掲用法並に紋章帆色等の制を定む

〔尊攘錄皇武令〕

大目付に

大艦ニ者御國總印日の丸職相立公儀ニ而者中帆之柱に白紺布吹貫引揚帆者中黒相用候積先年相達置候處向後御國總印者白地日の丸之旗幟綱に引揚帆者白布相用ひ公儀御軍艦者中黒之細旗を中帆柱に引揚候間諸家ニおるても大艦出來次第家々之船印公儀御船印ニ不紛様取調難形を以可被相觸候右之通可被相觸候

正月十九日

正月十九日英艦品川海を退く

〔御同席觸寫大目付様御廻狀寫控〕

〔正月廿日太田備後守渡〕

大目付に

覺

去ル十二日品川沖に入津いたし候英吉利船昨十九日退帆いたし候此段爲心得向々ニ可被達候事

正月廿日

正月廿六日日本藩池部啓太に江川太郎左衛門の囑により西洋砲術書翻譯に従事することを許す

〔安政六年 江戸機密間日記〕

口上之覺

去安政五年舶來ニ而コイタと申候西洋法之砲術書江川太郎左衛門様御買入ニ相成大鳥慶助と申者には和解御頼談ニ相成申候處右慶助儀算數不知之人ニ付彈道之ケ所ニ至解兼候儀多御座候由然處ニイマンと申和蘭人先年長崎に來候節志築忠次郎万動一貫之矢位算法傳授同人より同所末次忠助に傳同人方私傳を受申候尤右之私甘藏之比ニ而今方四十三ヶ年前之事ニ而西洋も未不聞と相見迂遠之法ニ而御座候間私之工夫を加万動一貫矢位槽梯三冊砲玉着丁着壹冊砲彈行道圖說一冊萬動一貫砲彈編三冊私著述仕候間遠國ニ懸私門弟も出來仕候付而江川家も彈道法私數苦心仕候儀ハ御承知ニ相成居候由之處江川様には算法未熟之儀ニ付御鉄地方附安井清之助且御熱長藤澤藤助及神保直吉杯私へ御頼稽古仕居申候間前文ヲ書大鳥慶助と申談初學之向茂解易々様著述仕候様との儀被仰聞候右之書ニ依而著述仕候得之右積年構思之御術是非之研究ニ茂相成右成就仕候得之私門弟中ハ不及申公邊を初諸藩砲家一統爲合ニ相成申候間著述仕度奉存候尤

安政六年

志築忠次郎御通と
號十、末
次忠助は
郷土也

出來仕候ハ、御巡覽ニ差出候後江川家其他に出可申テ奉存候間此段宜敷被成御達可被下候様奉願候以上

正月

書面之通可爲勝手候以上

正月廿六日

池部啓太
藤本津志馬

二月十一日幕府本藩に武相兩國に於ける管轄地の變更を命す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

二月十一日海岸御掛り太田備後守様より今日中御呼出ニ付御留守居代長尾安右衛門參上之處左之御書付御用人を以御渡

細川越中守
細川越中守

其方御預處武藏相模國之内高堂萬三千石餘最寄替被仰付相模國三浦郡鎌倉郡之内高堂萬九千石餘引替政事向私領同様御預所被仰付候委細之儀者御勘定奉行可被談候

〔令書〕

二月廿三日御勘定所に御呼出左之御方帳御勘定伊藤九左衛門殿より御渡有之候由ニ而同廿五日吉田平之助添書を以被差出

ツマニ張札
細川越中守渡

是者小林藤之助別康當分御預所之内可請取分

同國三浦郡

相模國鎌倉郡

一高堂萬四千七百六拾八石五斗九升五合五勺

野比村	長澤村	津久井村
上宮田村	菊名村	金田村
松輪村	毘沙門村	宮川村
二町谷村	向ヶ崎村	城ヶ崎村
三崎村	中町岡村	原村
東岡村	諸磯村	小網代村
三戸村	下宮田村	赤羽根村
本和田村	入江新田	長井村
林村	大田和村	萩野村
長坂村	佐島村	菅名村
秋谷村	下山口村	一色村
長柄村	堀内村	逗子村
小坪村	大矢部村	池上村
下平作村	武村	櫻山村
山野根村	久野谷村	木古庭村
上山口村		

是者右同斷

高合堂萬九千七拾四石壹合貳勺

右者此度最寄替被仰付候付書面之通其御預所相成候間

安政六年

得其意小林藤之助に相違從當未年物成郷村請取之御仕置可被申付候存寄之儀於有之之重而可被相伺候以上
安政六年二月

美	七右衛門印
森	國太郎
菊	大助印
高	平作印
五	與五兵衛
小	登一郎印
福	八郎右衛門印
設	八三郎印
勝	次郎印
塚	藤助
立	主水正印
大	豊前守印
土	下野守印

細川越中守殿

御預所役人中

二月某日幕府講武所懸池田長顯久具正典に劍槍砲の三術に亙り講武所規則整理調査を命ず

〔風説書等〕

安政六年三月十一日

一左之書付御城使御城より持歸候由

備後守殿御渡講武所御懸り池田甲斐守様久具因幡守様へ御達之由

講武所御創建之節劍槍砲三術演習致候様被仰出候處劍槍二術之一定之法相立候得共砲術操練等之暫西洋規則を專演習致候様被 仰出此節ニ至候而ハ銃隊訓練之儀茂略相整候趣然處西洋ニ而茂兵制之各國異同有之旨相聞候就而之本邦人情形勢を辨せず一圖ニ和蘭操法ニより候之却而偏固ニ陥り可申條其趣意厚相心得彼ノ所長を採り武勇ニ氣を勵し夷狄之陋習ニ陥らず御國粹を不失様取調講武所之御規則御軍制ニ相成候様相心得長槍短兵之接戰射藝步騎隊之制ニ至る迄講武所之御規則宛々相整候様精密ニ取調可被中間候

二月

二月某日閣老間部詮勝鷹司太閤以下四名に願の通り辭官落飾を許されんことを朝廷に上申す

〔魚住文書〕

從關東御差向候書付

鷹 司 太 閤 殿

右水府方御積柄之儀殊老聊ハ別而御親敷先年來外夷之事情等折々被申越候儀有之由將又小林民部を以水府家來方申出候事ハ尋常之内願とも違天下之重事ニ有之對關東候てハ急度御教示御取合被成間敷候處 假慮ニ事寄右府殿被取持候て去是迄差歸候次第ハ勿論三公方諸藩浮浪之妄説ニ惑兩被致候譯柄猶太閤殿不被存譯ハ有之間敷多年御在職之所

計慮最ニ被入 假覽候御心中何とも相分兼候儀ニて御老年御健忘之御所爲也トハ更ニ不相聞彼是以御不行届之事共ニ相聞候

同 右 府 殿

右水府家來方小林民部を以内願申出候事件ハ豫め老聊方申付有之周旋致候儀ニて右ハ御積柄とハ乍申自分之内願筋とハ違天下之重事ニ候へハ被對關東候而も急度御教示御取合被成間敷處 假慮被爲在候旨 勅諭等奉催促候儀遮而御諭論ニて 假慮ニ事寄内願筋御取持ニ相當り第一公武御合葬之御趣意ニも相悖加之朝義之趣等狼ニ民部を以水府家來へ被相違候段隱謀ニ關係可被致之御所置ニ無之其上被妄説を被信候義實ニ御心得違之事共ニ相聞一辨右府殿ニ之返覆之御性質ニも御油斷難相成御人辨ニ被心得候段民部御吟味之節申立居候事

近 衛 左カマ、 府 殿

右外夷御所置之義薩州御積柄も有之同藩及ひ歌道之門人抔之内方水府家來を伴ひ竊ニ罷出天下之人心居合方ニ事寄關東御所置如何之旨入願入説等致し候右之何レも不容易次第ニ候へハ急度御教示御取合被成間敷處内願之趣等御思慮可被成置御答被成候義共公武御合葬之御趣意ニ相悖乍暫内覽御委任三公御先途之所詮も無之一辨御處置之儀ニ付而ハ始終三條内府殿方御因循被成水府家來等之事共相聞三條家へ循因循之義鷹司殿家來小林民部近衛老女村岡義も申立罷在候間御引合御堅考可有御座候事

三 條 内 大 臣 殿

右外夷一條評議筋專ニ被取扱東武之形勢等御心得置配慮可有之見込トハ乍申水府家來とも外浮浪之者抔度々面謁被致天下之人心居合方ニ事寄内願筋又ハ關東之御所置如何之旨品々入説致事件何をも不容易義有之就中 勅諭御差向之儀ハ實以重大之儀ニ候處都而尤ニ之聞請譬其儀相整不申共去年八月 勅諭御文意之内ニ前願入説等之氣味御差含書綴候

安 政 六 年

三三五

と相見候草稿營中へ被差出候儀實以不輕義既ニ御決定之上水府家來へ御渡被成候儀共夫是公武御合躰之御趣意ニ相悖殊ニハ前官在任中々重立引請疎密會得之上之尙更之義水府家來共ニ隱謀筋荷撥被致候哉ニ相聞彼是妄説を信候方今度之次第ニ及候儀ニ而重々心得違之事共ニ相聞候事

間部下總守上書

應司大隈殿近衛左大臣殿應司右大臣殿三條前内大臣殿辭官落飾被相願候義ニ付 勅翰之御寫等拜見被仰付委曲酒井若狹守を以被仰下候別冊之通有之就而之共外彼是見合參考勘辨仕候處夫々附台委義も有之御心得違之事共相聞尤右之猶京師一通及吟味候義故關東何等白狀之廉も可有之職ハ相心得不申候へ共先荒増別紙之通ニ御座候然ル處御自身方御心得違奉恐入辭官落飾被相願候段御殊勝之御義ニ付夫々被相願候通御濟被爲在候方可然奉存候依之別紙之通帳面四冊相添此段申上候以

未二月

三月朔日本藩は異船渡來の節儉閱若くは斥候として派遣すべき船舶の帆印を變更せしことを幕府に申告す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

三月朔日溝口讃岐守様には御差原田十兵衛持參御用人を以差出候處被成御落手云々

異國船渡來之節越中守檢使斥候船是迄白帆相用候處此節別紙雛形之通相改申候此段御届仕候以上

細川越中守内

原田十兵衛

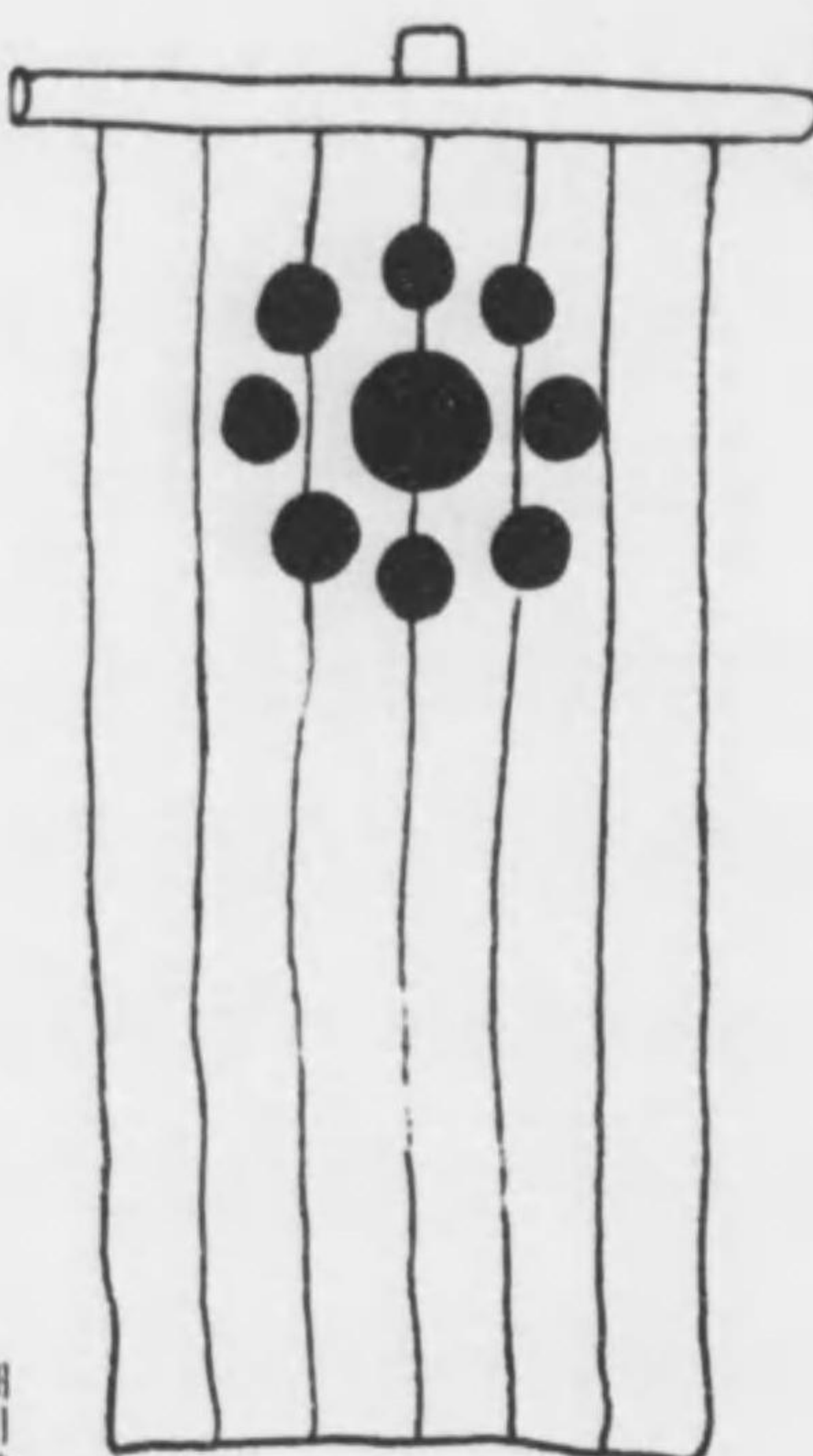
三月朔日

(別紙)

程村一枚 堅四折 横二折

越中守檢使斥候船帆印雛形

地白紋紺



細川越中守内

原田十兵衛

未三月

三月十九日在府本藩士水津熊太郎幕吏の進退志士の搦致及び土佐藩主山内豊信隱居の事等を在藩萩角兵衛に報す

〔萩文書〕

(前略)去秋より小國御詰切之由寒候別而被爲成御氣削たるに奉察候安許之儀御咎之親藩方去冬以來彌以無事何之唱も

安政六年

三三七

無御座京都緝捕之面々追々ニ御呼取先月中旬ニも一條様二條三條様諸大夫十人餘被差下右之内ニハ久我様御内之春日
 讃岐守も加り居當時専ら御吟味と相聞申候右之次第ニ付京都ハ當時靜穩ニ御座候由岩瀬殿外國奉行ハ退被申候得共御
 作事奉行ニ而閑散ニハ無御座堀堀部正殿ハ不相替箱館奉行ニ而御座候岩瀬殿右之通轉役ハ致被候へ共亞墨利加行ハ定
 而同人ニ而可有之との風説御座候何程ニ可有御座哉當時來船之墨艇ハ御約定之迎と申事ニ御座候即今之勘定奉行土岐
 下野守殿當時秀之内と相見右御同役之佐々木信濃守秀之處此節都一件之御吟味懸ニ而些不出來ともニ而ハ無御座哉同
 懸之寺社奉行板倉周防守様杯一同御役御免ニ相成申候右佐々木氏ハ元小身右様小祿之方より祿上千石之御役ニ成被申
 候へ共其節直ニ五百石之御知行被下候儀御格程之儀ニ而既ニ河地殿迄ハ五百石頂戴有之候處井伊侯御存寄ニ而右之御
 格被改御試之上五百石可被下置之儀ニ相成候付佐々木氏ハ頂戴無之此節御免ニ相成候へハ元之祿ニ戻り候由殘念ナ
 ル事ニ御坐候去秋御大變前後之事ニ付而ハ段々承居候儀茂御座候得共懸と言上不仕候私杯下着仕候比迄ニハ公論も定
 り可申其上ニ而委御斷可申上候土州杯久々御引入之處先月御隱居御家督相濟申候阿州杯御願ニ而時候御引上此間御參
 府有之如何様之譯職殿と承不申候(下略)

三月十九日認

水津熊太郎

萩角兵衛様

三月廿日久我家々臣春日讃岐守近衛家老女村岡等泉州岸和田信州松本等の諸藩士に預けらる

〔風説書等〕

封廻狀

近衛殿老女

一ト通尋之上松平丹波

村

七十四歳

一ト通尋之上加藤出雲

三條家々來 丹波豊前守 三十六歳

御藏小舎人 安藝守伴

一ト通尋之上加藤出雲

山村出雲守 五十歳

大覺寺門跡家來

同部筑前守家來

久我家々來

六物空萬

は預け差返す

春日讃岐守 四十九歳

一ト通尋之上伊東修理 大夫家來に預け差返す 右於評定所松平伯耆守久員因幡守石谷因幡守池田播磨守松平久之允立合伯耆守申渡之

三條家々來

三月廿日

一ト通尋之上伊東修理

富田織部 四十五歳

三月廿一日幕府閣老間部詮勝の京都に於ける周旋の功を賞す

〔江戸自筆狀〕

未三月廿一日左之通

間部下總守

領分越前國之内高堂万石村持被仰付之

別段御連之趣今度京都御使之儀之御用柄各別致心勞永々之在京雜儀之趣連御聽候處領分越前國之儀之別而薄地之場所
 して收納少之趣ニ茂被聞召動柄格別之思召を以今度村持之儀御沙汰ニ被爲及右於奥備後守殿被申渡

三月廿一日幕府大老井伊直弼に慰勞として金二萬兩を貸與す

〔江戸自筆狀〕

一右同日(三月二十一日)

安政六年

掃部頭儀大老職被仰付候以來御用向格別多端之御時節日々登城致し候付而者彼是物入多ニ茂相聞可爲難儀思召候依之御手許之御金貳萬兩拜借被仰付雖有被奉存候此段御咄合申候
右之通若年寄衆に御沙汰之由也

三月廿五日幕府一條家々臣入江雅樂頭三條家々臣森寺因幡守等緇紳家諸大夫以下數人を泉州岸和田豫州大州等の諸藩士に預く

〔風説書等〕

封廻狀(抄)

一ト通尋之上岡部筑前	一條殿家來	一ト通尋之上加藤出羽	一條殿家來
入江雅樂頭		若松奎權頭	
守家來に預け差返す		三十九歳	
未四十一歳			
三條殿家來		右於評定所松平伯耆守久貝因幡守石谷因幡守池田播摩	
森寺因幡守		守松平久之丞立合伯耆守因幡守播摩守申渡之	
六十九歳			
三月廿五日			

三月廿五日幕府は騎馬練習に託して遊行の弊を生ずるを虞り遠乗制止の令を發す

〔御同席觸寫大目付様御廻狀寫控〕

大目付久貝因幡守様方今日御呼出ニ付參上仕候處太田備後守様被成御渡候別紙御覺書寫登通御用人を以被成御渡候付則差上申候右之趣御同席中様方に通達之儀茂被仰聞候付例之通廻狀仕出申候

三月廿五日

清田新兵衛

覺

遠馬之儀去々辰年中より乗試之主意を以諸向届之上達方迄も罷越候様相成候儀ニ而近來之時勢武備勵之一端ニ而相當之様ニ者相聞候得共其實者左迄之筋合ニも無之當年者遠方迄度々乗試之儀諸向より届茂出候儀強而差止候程之儀ニ者相聞不申候得共餘り盛ニ至り候者内實者遊參之姿ニ相成可申終ニ者一體の主意を失ひ却而不取締之弊を生間敷とも難申候間老中若年寄ニ者遠馬之儀先者容易ニ不罷出候方ニ申合候間相合向々にも程能遠慮候様可被致候事

三月

四月朔日蘭船一艘品海に入る

〔尊攘錄皇武令〕

覺

一昨日和蘭船一艘品川沖に入港いたし候諸事先達而中外國船從船中之趣ニ相心得候様向々には可被達候事

四月三日

四月二日日本藩池部啓太をして大森に於て射撃練習をなさしむるにつき大砲借用の願書を幕府に提出す

〔安政五年四月御記録〕

〔萬延元年六月迄御記録〕

御用番間部下總守様に
越中守家來池部啓太と申者西洋流砲術免許之者ニ御座候今度於大森村地先町打場打方爲稽古門人召連兩度差遣申候右ニ付御据筒之内八十八凡度二十四凡度御筒附屬之品共拜借修行為仕度奉願候此段申上候以上

細川越中守家來

四月二日

清田新兵衛

安政六年

三三一

四月六日下總守様御呼出ニ付吉田平之助參上之處左之通御付札御用御用人を以御渡可爲願之通候日限等之儀之御日付承合候様可仕候

四月六日蘭船品海を退く

〔御同席觸寫大目付様御廻狀寫控〕

覺

去ル朝日品川沖に入津致し候和蘭船同六日退帆いたし候此段爲心得向々には可被達候事

四月十一日

四月七日水戸藩原田八兵衛書を長岡監物に贈り昨年内勅降下以來自藩の變狀を報す

〔先哲遺翰〕

〔田家藏〕

都築氏歸西ニ付呈一書候時下不順之候御座候處起居益々御勇壯被成御勤行爲是道雀躍欣慰之至奉存候次ニ小生與家累皆無異乍倅御故念是祈候昨春中より度々御文通も被成下候處其時々御返翰相認置候得共好便無之指出し兼候處一朝不料も去七月中奇禍ニ罹り一藩臣民之苦心いふ之かりなく不容易折らるらる而書類等不殘破融氏ニ投し候事ゆへ心ならず貴答も不仕たとへ貴答指出し候而も様之有様ニ而ハ途中紛失之憂も難測不本意ニハ候得共旁御無言ニ罷過候段心事何分御深察可被下候扱道々御見聞之通り時事悲憤痛恨之事のみやまし大息之至奉存候間も去月十二日歸府相成候處未々何等之事も發し不申候得共上國之方も餘程御模様變易致候職も承り此上如何成行可申哉幕中之模様ハ御承知之儀と存候間相略し申候弊藩之儀も道々模様相變り八月申武田修理岡田信濃守兩人も隱居國勝手被申付安島關次帶刀尾崎豐後等表家老ニ轉し政事へ携り候事ハ不相成いづまも幕之内命ニ出候儀ニ御座候一體昨年 勅諭御下ケ相成候處種々評議も有之同廿七日一日申ニ諸藩へ廻達ニ相成候治定ニ相成 勅書之寫並ニ幕君直書も添相廻候書ニ而寫等も出

來廻達候様まで相成候處不圖一二奸人事を公議ニ托し支候もの有之忠義之士百方建論スレモ事甚た六ヶ敷相成憤激切齒其夜終夜之議論未明廿八日ニ至り廻達ハ先ツ扣へ關老へ一應示候上と申事ニ相成俄一關老を弊邸へ招候處江懸川二關被參候ニ付 勅書之寫拜見爲致候處誠ニ恐入候御儀公邊へも御下ケニ相成候是と大同小異之旨ニ而いつま同列一同相談之上いつまとか御挨拶可申上候間夫迄ハ御廻達無之様致度旨申置引取其後御三家御三卿へハ弊藩より廻達相成申候二關も公邊より諸藩へ廻達之儀ハ不相成勿論水藩より諸藩へ廻達之儀ハ決而不相成いづま之道中合參上可致とて引取申候其後ニ相成候而も是非廻達致度評議にて幕府へ度々催促いたし關老を招催促いたし候事も數度有之候得共一旦々様相成候上ハ如何とも六ヶ敷模様不得已廻達も不相成其儘打過候事千載之遺憾此事ニ御座候心中千變萬化筆頭ニハ盡し難き事情も有之此時ニ至り候而ハ幕議頗ル 勅書信僞之浮説を申觸し途中之拵ものニ而全く水藩より頭候而勅命を觸し候杯申跡らたもなき妄言浮説を出し申候弊藩ニ而何も因循姑息一日之苟安を論 勅命を奉せざると申儀ハ決而無之眞ニ不可言不得已之情實も御座候具ニ相認度候得共文略仕候早々御火中可被下候

八月朔日ハ不空易儀相聞御城付より申來老寡君を紀公之邸へ御預ケニ相成嚴重守衛致候様内評有之上使直ニ駒込屋敷へ被參候而即日紀へ移し候旨朝四ツ半頃極内々ニ而相ひゞき候由ニ而申來同志一同最早是迄と存候間必死を極め斃而後已之時と存し詰罷在候處寡君よりもたとへ上使來り右之公命を傳へ候而も決而御渡し申候而ハ不相成一同必死之覺悟ニ而守護いたし候様君命も有之駒込屋敷へ家老始め五六百人相詰切り死之覺悟ニ而今やおそしと上使之來を待居候處其日八ツ半頃ニも候半御城付より先刻之儀ハ如何之譯ニ候哉先ツ御沙汰止ニ相成候旨申來一同少しく安堵之思をなし申候要スルニ此方之勢ひゞき候儀ニも可有之哉何事ニ而右之儀止候處ハ不相分候右之儀同二日夜水戸へ聞候ニ付水戸之騒ぎ大方ならず出府いたし候ものも不少候得共事止み候上ハ一同引取候處同月晦駒込へ付き居候君側をハ不殊引戻し譜州之家來を以老寡君を嚴重ニ守衛いたし尾紀之御家老竹腰水野兩人立入水府之政事向譜州申合取扱候様可致内命有之趣ニ而譜州へ傳へ候間是儀ニ於てハ決而不相成祖宗以來無之儀當寡君ニ至り右様之儀ニ而ハ祖先へ對し不

相濟候間御受ハ相成兼候旨ニ而幾度も押返候ゆへ好策行はれ不申御沙汰止ニ相成申候得共餘程六ヶ敷約合ニ相成候處
 右之趣九月朝日水戸へも聞へ候ニ付士林ハ勿論神官百姓町人僧侶盲者等ニ至ル迄憤發致し追々出府水戸城下ハ三千人
 餘も押出し居り小金驛江戸をさ迄家老番頭を始め士林五六百人押出し居 勅諭廻達並讃侯等家政向へ立入候儀ハ祖宗
 へ對し決而不相濟候との儀ニ而上書ハ勿論此地執政等へ建論日々夜々小金驛より此地へ往復止時なく右之儀ニ而餘り
 動搖ニひとしく相聞候ニ付夫々下知有之指留候得共更ニ承知不致此地より監察方等口々へ手配たし登り候ものを指
 留候ゆへ道路も指塞り木道を通り候儀不相成間道を経此地へ致出府候もの貳百人餘有之實ニ以容易之儀ニハ無之然ル
 處讃州等立入候儀數千人ニ志も相貫き候歟御沙汰止ニ相成候ニ付不殘引取候様號令も有之候得共 勅諭之儀も有之中
 々引取候様子無之家老立場ニ而夫々引受候ものも有之先ツ一旦引拂候處こゝかしここ潛伏たし居候もの不少尤此節
 ハ過半引取候得共未タ不殘引拂候譯ハ無御座候七月來之曲折委細御運ひ申度候得共書取兼候間全く大略相認候事ニ
 御座候

一先達而御惠投被下候宮木武藏氏之書早速老寡君手元へ指出候處珍敷御品ニ而甚た被悅御厚意之程深く感謝被致候尤右
 ハ弊藩先代文公之時分尊藩之君公と不一方御懇意申候ニ付色々御贈り被下候御品も今ニ珍藏被致候處其中右武藏氏之
 書も御贈り被下候事有之様被覺候處若其品庫中ニ藏し居候ハ、此度御贈被下候御品ハ御珍寶ニ付貴君御秘藏被成候方
 可然若此方ニ無之候ハ、弊邸へ永く秘藏致度其段よろしく申上候くれ様ノ内意有之候得き右之儀も昨年中之書中ニ
 認候處丙丁ニ附候ゆへ事由申上候其後俄ニ駒込の別邸へ引移り候ニ付庫中せんさくも此節不行届ニ候間後日可申上候
 一菊池氏千木槽之儀先達申度々御書中ニ被仰下其後木原氏へも御傳言之趣委細承知仕り御深志奉拜謝候其時ニ申聞置候
 ニ付右様之儀ハ老寡君ニも度々御被申出候事ニ御座候木原氏へ御傳言之趣ニ而ハ全備之御品も無之との事ニ御座候處
 何も全備之御品ハ及不申素より千古忠臣義士の製作致され候品ゆへ其人を欣慕致候けニ而品之善惡ハ拘り不申
 事と奉存候是非共御懇望と申譯ニ而ハ指支候得共萬一御惠ニ被下候様ナレハ何程か大慶ニ被存候半と奉存候老寡君ニ

も去七月七日夜首ニ駒込屋敷へ被引移一室ニ籠居置重ニ被相宿書夜就寝之外禮服ニ而端坐被致筆硯も坐右ニ不指置昨
 年之委署ニも一室ニ兩戸二三寸位ツ、明け候而日影を拜み候事も無之位蒸熱難渡程ニ候得共一向意とも不被致幸ニ一
 度之疾病も無之至極壯健ニ而是のみ安心罷在候間庭杯殊之外ニ荒れ居候ゆへ月の夕雨の夜などハ菅公筑紫之配所も
 かくやあらん杯思ひ出され候事ニ而いと悲憤たへぬ事御座候小生も依然同所付ニ而晝夜側を不離罷在愚誠を盡罷在
 候昨年中八十日位ツ、詰切居候事も御座候毎度貴君之御贈被申出肥後の長岡ハ如何たし候哉近來便も無之哉云々度
 々被申出候事ニ御座候御幸便之節貴書被下候ハ、大慶奉存候

一近來薩藩如何ニ候哉御聞及之處相伺度奉存候
 一佐賀近狀如何ニ候哉何か參府御免ニ無之候ハ、長崎警衛御免願出候沙汰も御座候處如何ニ候哉眞情何度其外彼藩之様
 子尙又御近國之様子相伺度御内示奉願候種々御運ひ申度儀御座候得共筆頭盡し難く且明朝都築氏御發途之趣ゆへ何か
 倉卒ニ認甚た見苦しく何分御推覽可被下候前文之儀申迄ハ無之候得共必ずノ御他言等無之様仕度歴聞覽候後御投火
 奉願候此段草々頓首再拜

四月七日 認

成

徳

再行

長 岡 君 玉 案 下

向々津田氏へも此度ハ書狀も問ニ合兼候間御面晤も候ハ、宜敷御致意奉願候早々以上
 一先日横井氏の儀内々被仰示委細拜承仕候越藩大抵ハことノ信用其中橋左ハ少しく取捨斟酌たし候様子ニ候得共
 要之殊之外深醉たし候様子ニ而是迄開候と違ひ稀ナル人物之由屢賞譽も有之候ニ付貴書之意味も先ツ相扣へ候事御
 座候此段御承知可被成下候
 昨秋以來いつまへも一切書通も不仕候得共兼而御懇意ニ任せ情實吐露仕候且ハ此度好便ニ付途中之憂も無之ゆへ御運

安 政 六 年

三三五

ひ中候事ニ御座候くれノ御覽後速御火中可被下候此狀儘ニ着いたし候や否之處此節之事ゆへ被仰下候様仕度奉存候
 國産乾浮龜微少ムハ候得共進呈仕候用ひ方ハ水へ一夜もひたし細かにきざみひじき等を交せ汁ユ煮候而よろしく下劑
 いたし候節用ひよろしきもの御座候又醬油ニ而煮染候而よろしく御座候
 一 弊藩弘道館記文石本御所持御座候哉相伺候
 御直披貴覽後御火中

四月十六日外國奉行水野忠徳我藩外三藩留守居を召喚して外國船渡來の節浦賀明神崎邊より江戸への注進請續に關する所見を問ふ

〔相模國御備場御用一件〕

一 外國船渡來之節浦賀明神崎邊より江戸に之注進請續方見込外國御奉行様方御尋之事
 外國御奉行水野筑後守様より四月十六日四時 御城中之口に御呼出ニ付清田新兵衛罷出候處松平阿波守様松平越前守
 様松平隱岐守様御留守居々々茂一同御呼出ニ相成組頭白石忠大夫殿同調役并杉浦竹三郎列座ニ而別紙御書取壹通被相
 渡一兩日中可及御返答旨も被申渡候由添書を以差出候付差上候
 惣躰之調ハ御役所に達込御備場にも申向候由物書致候
 覺

外國船渡來之節浦賀明神崎邊方江戸に之注進請續方之見込銘々可被申聞候事

四月廿六日水戸藩老臣安島帶刀攝州三田藩士に預けらる

〔安政五年 江戸自筆狀〕

未四月廿六日封廻狀

三萬六千石屋敷數ヶ關
 九鬼長門守三田家來に御預ケ

水戸殿家老

安島帶刀 四十八歳

一ト通尋之上同道
 人に預ケ

同家來

大竹儀兵衛 三十七

茅根伊與之助 三十六

右於評定所三奉行より申渡之

四月廿七日全廿八日日本藩管轄地の交換授受を了す

〔相模國御備場一件、相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

一 清田新兵衛より左之通書上候事
 當二月御預所最寄替被仰出御代官様に御引渡ニ可相成
 分左之通
 武藏國 久良岐郡 都筑郡 多摩郡
 一 高壹萬六百壹石壹斗八升五合九才
 相模國 高座郡
 一 高貳千四百八拾貳石壹斗六升九合三勺九才
 都合高壹萬三千八拾三石三斗五升四合四勺八才
 右者御代官江川太郎左衛門様小林藤之助様に郷村諸書
 物去月廿七日引渡相濟申候
 相模國 鎌倉郡
 一 高四千三百五石四斗五合七勺
 同國 三浦郡
 一 高壹萬四千七百六拾八石五斗九升五合五勺
 都合高壹萬九千七拾四石壹合貳勺
 右者御代官小林藤之助様より郷村諸書物去月廿八日御
 請取相濟申候以上
 五月二日 清田新兵衛
 右吉市郎左衛門殿
 長岡與三郎殿

四月廿九日鷹司准三后落飾す

安政六年

〔魚住文書〕

御廻文之寫

鷹司准三后

今日落飾自今之稱入道准三后此旨右大將に被申渡候由柳宰原相被演說候尤番々且小番所未勤之輩へ之從親族中可申傳候由仍而申入候也

四月廿九日(公卿補任には四月廿七日落飾とあり)

安政六年未十二月朔日寫之

奈賀山幾

同七年申正月廿四日寫

五月三日朝廷鷹司大閣外四名の落飾墊居を發表せらる

〔安政五年 江戸自筆狀〕

同月(五)三日京都ニ而如左

法名拙山	被稱	鷹司大閣殿
同隨樂		同右大臣殿
同翠山		近衛左大臣殿
同澄空		三條右内大臣殿
		東坊城殿

右落飾之上永く墊居被仰付候

五月十六日水戸藩茅根伊豫之助濃州岩手藩士に預けらる

〔安政五年 江戸自筆狀〕

未五月十六日封廻狀

五千石屋敷西窪

竹中圖書助 交代番合家來に御預ケ

水戸殿家來

茅根伊豫之助

五月廿一日日本藩管轄地の年貢米は總て守兵の非常手當役夫の食料及び村民の救助費に充て貢米之制を變して代金納を許されんことを幕府に稟申す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

五月廿一日左之御方様御勝手は吉弘加左衛門持參以御用人差上候處被成御落手候段右御用人を以被仰聞候

御勝手御月番

間部下總守様に

越中守御預所御年貢米之儀異國船渡來之節夫役飯米並陣屋詰人數非常之手當且村方取救等之備米ニ仕度仍年々陣屋元は買入冬御張紙直段ニ金三兩増を以皆石代納之儀安政元年七月奉願候處願之通被仰付其後増御預所被仰付候分度都度々々奉願同様ニ被仰付候依之當二月武藏相模之内高壹萬三千石餘最寄替被仰付相模三浦郡鎌倉郡之内高壹萬九千石餘引替被仰付候村々之儀茂前條同様御年貢米陣屋元は買入年々冬御張紙直段ニ三兩増を以皆石代上納被仰付候様被成下度奉願候尤右村々松平大膳大夫殿御預所中伺濟ニ而年々冬御張紙直段三兩増を以皆石代納仕來候趣御代官小林藤之助様に申送有之當未年より村々前々仕來等相糺御廻米可相成場所者正米納之積取調可相伺處鄉村引渡差懸調方不行屆候間可然取計可申旨此節藤之助様より申送ニ相成候得共右之都合取計申候而者下地陣屋元備米手薄之處人蓄相増彌以及不足候間無據前文之通奉願候儀御座候間御備場御用別段之譯を以何卒追々之通御聞濟被成下候様奉願候此段申上候様

安政六年

三三九

申付候以上

細川越中守家來

清田新兵衛

五月廿一日

下總守様方六月廿四日御勝手迄御呼出ニ付御留守居代渡邊一郎左衛門參上之處本文書付ニ左之御書取御添以御用

人被成御渡候

當末年より以來年々冬張紙直段三兩増を以石代金相納御勘定組之儀者御預所に掛置役人より御勘定所に相伺候様可仕候事

五月廿二日朝議對外の處置は暫く幕府に一任し徐に時局の趨勢を察すべしと決し昨年來の慰勞として參列の朝臣に金を賜ふ

〔神庫文書十三印五番〕

當末ノ五月廿二日被仰出

夷國一件ニ付昨春堀田備中守上京段々言上之處假條約之通ニ相成儀者何共御許容難被遊ニ付彼是御懸合ニ相成關東之所置等如何之儀共ニ而御不審ニ被思召候處問部下總守上京追々言上之次第有之於異國之儀者微慮之趣於關東茂御尤ニ被相伺役々茂追々微慮相立候様可取計偏ニ公武御合休ニ而外夷を相退ケ是迄之御國法ニ引戻御安慮被爲在候様可致旨言上有之然處他ニ入組候事件茂有之公武御間柄ニ茂可相拘哉ニ付微慮之趣を再三被仰遣置方今之處暫御猶豫關東之所置世間之事情御覽之思召ニ而候間各沈靜ニ可心得候且又昨年来以來忠憤苦心之面々實ニ神妙之至深微慮被爲在候御事ニ候猶又赤心報國之儀相勵乍聊被慰苦心此品被下置候事

別紙之通列參之奉へ申渡ニ相成勤之人ニも定而苦心之事と被思召候間聊此品被下之事

關白殿表向黃金拾枚御内々同貳拾枚

三公 右全貳枚宛

議奏方

傳奏方

職事方

列參方

小番被免方

當番參勤一同

千種少將

岩倉侍從

大原三位

黃金 壹枚宛

金貳兩宛

同五百疋

同貳百疋宛

表向

金貳拾兩宛

右同斷

御内々

銀二拾枚宛

私口右三位様ハ昨年京都を忍び出姿を替大坂ニ御下り乾し御咎ニ相成候御方先達而

應司 准后

近衛 左府

鷹司 右府

右御落飾ニ付被下之

宛ノ字 金 三枚〇 錦 十把〇

落字賦 右攝家方御落飾之節御見合

三條 前内府

右御落飾ニ付被下之

金貳拾兩 卷物 五卷

右清花方ニ之御例無之處此度格別之御事之由女房衆奉

書ニ而被遣之

五月廿二日田中宗輔本藩管轄地各村石高調査書を提出す

〔相模國御備場御用付而諸御願御同等〕

最寄替村々之分小前高とも相分居候得ハ何角之御用辨ニも相成候付御預役所申談置候處安政六年五月廿二日左之通田中宗輔差出候

相模國三浦郡

- 一高三百六拾八石四斗壹舂
- 一高五百三拾壹石四斗
- 一高七百貳拾四石四斗四舂五合
- 一高六百拾七石三斗四舂五勺
- 一高貳百貳石四斗壹舂貳合
- 一高四百三拾石壹斗貳舂
- 一高貳百拾石九斗六舂
- 一高貳百九石四舂貳合
- 一高百四拾四石壹舂貳合
- 一高五拾七石壹斗八舂九合
- 一高三拾三石五斗壹舂
- 一高貳拾壹石壹斗壹舂五勺
- 一高四拾七石六舂
- 一高百六拾六石貳斗貳舂六合
- 一高百五拾七石三舂九合
- 一高百拾八石九斗貳舂六合
- 一高百七拾六石四斗九舂四合
- 一高貳百七拾七石七斗五舂四勺

- 野比村
- 長澤村
- 津久井村
- 上宮田村
- 菊名村
- 金田村
- 松輪村
- 毘沙門村
- 宮川村
- 向ヶ島村
- 城ヶ島村
- 三崎町
- 中町岡村
- 二町谷村
- 原村
- 東岡村
- 諸磯村
- 小淵代村

- 一高三百六拾四石壹斗九舂
- 一高六百三拾石七合
- 一高三百九拾九石貳斗壹舂五合
- 一高三百七拾三石九斗六合
- 一高貳拾四石壹斗八合
- 一高九百七拾石八舂四合
- 一高五百三拾貳石四斗八舂九合壹勺
- 一高四百三拾八石貳斗四舂五合
- 一高百貳拾貳石四斗四舂九合
- 一高七百八石壹斗壹合
- 一高百七拾石八斗貳舂四合
- 一高貳百八拾三石七斗九舂三合
- 一高三百五拾七石貳舂九合
- 一高貳百七拾八石九斗五舂壹合三勺
- 一高三百八拾壹石三舂五合
- 一高三百三拾石三斗七舂壹合
- 一高四百石貳斗三舂九合
- 一高貳百七拾九石五斗四合
- 一高貳百四拾六石四斗三合

- 三戸村
- 下宮田村
- 赤羽根村
- 本和田村
- 入江新田
- 長井村
- 林村
- 太田和村
- 萩野村
- 長坂村
- 佐島村
- 芦名村
- 秋谷村
- 下山口村
- 一色村
- 長柄村
- 堀内村
- 逗子村
- 小坪村

- 一高貳百八拾五石六舂貳合
- 一高貳百七拾三石七斗三舂八合
- 一高四百四拾貳石貳斗貳舂壹合
- 一高三百拾五石壹斗壹舂三合七勺
- 一高四百八拾四石六斗七舂七合
- 一高九拾九石壹斗貳舂七合
- 一高三百五拾四石貳舂五合
- 一高三百貳石貳斗壹舂四合
- 一高四百貳拾八石壹舂九合
- 合高壹萬四千七百六拾八石五斗九舂五合五勺 三浦郡

相模國鎌倉郡

- 一高八拾五石五舂九合
- 一高百拾貳石三斗五舂八合
- 一高三拾四石貳斗九舂五合
- 一高六拾四石壹舂三合
- 一高四拾五石九斗七舂九合
- 一高貳百五拾壹石四斗八舂九合
- 一高百九拾八石九斗五舂五合
- 一高貳百四拾貳石壹斗六舂壹合

- 大矢部村
- 池上村
- 下平作村
- 武村
- 櫻山村
- 山野根村
- 久野谷村
- 木古庭村
- 上山口村
- 鎌倉村
- 材木座村
- 長谷村
- 同村
- 坂之下村
- 極樂寺村
- 津村
- 片瀬村
- 腰越村

- 一高貳百七拾九石七斗七舂七合
- 一高三百八拾五石
- 一高四百六拾四石六斗七舂五合壹勺
- 一高貳百六拾七石五斗四舂五合
- 一高四百三拾貳石七斗四舂六合
- 一高壹石貳斗九舂九合
- 一高六拾三石三斗八舂
- 一高貳拾九石三斗六舂七合
- 一高拾五石貳斗三舂七合
- 一高三拾壹石貳斗貳舂五合
- 一高九石貳斗八舂九合
- 一高貳百八拾九石七舂三合
- 一高貳百七拾四石九斗壹舂貳合
- 一高貳百五拾石五斗九合
- 一高貳百五拾七石六斗七舂
- 一高貳百拾九石三斗九舂貳合六勺
- 合高四千三百五石四斗五合七勺

- 川名村
- 手廣村
- 笹田村
- 常盤村
- 梶原村
- 同村新田
- 大町村
- 小町村
- 雪之下村
- 谷合村
- 扇ヶ谷村
- 宮前村
- 小塚村
- 彌勃寺村
- 寺分村
- 上町屋村
- 鎌倉郡

五月廿三日池部啓太歸國を命せらる

〔安政六年 江戸機密間日記〕

覺

井上加左衛門に

池部啓太

一郎助嫡子

庄村助右衛門

右者來ル廿九日此許被差立候條此段可被達候尤添狀可相渡候間前日晝之内御殿に罷出候様可被申間候以上

五月廿三日

五月廿四日幕府は外國貿易開始につき外國金銀其儘通用すべき旨を達す

〔安政五年筆起萬延元年九月迄 御同席觸寫大目付様御廻狀寫控〕
〔太田備後守渡五日廿四日大目付より廻狀〕

大目付に

外國交易御開ニ付而者彼國之金銀其儘通用可致候尤金者金銀者銀と量目を以取遣いたし候筈ニ候條此度吹立被 仰
付候新小判壹分判貳朱銀目方割合ニ應し無差支可致通用候

右之趣御料私領寺社領共不洩様早々可觸知者也

五月

右之通可被相觸候

五月廿六日英艦一隻品海に入る

〔安政五年筆起萬延元年九月迄 御同席觸寫大目付様御廻狀寫控〕
〔開部下總守渡五日廿七日大目付より廻狀〕

昨廿六日英吉利船一艘品川沖に入津致し候付諸事先達而中外國船候泊中之振合ニ相心得候様向々に可被達候事

五月 英國公使オールコック
〔此艦に搭乘して來朝す〕

五月廿八日在府本藩重臣は水戸藩の内訌及び同藩士江戸登込の状況を藩政府に報告す

〔尊攘録櫻田並東禪寺一件〕

安政六年未五月廿八日江戸立宿繼同六月廿日着

水戸藩中一件

以別紙申達候水戸様御家老を御預ニ相成候由ニ而御藩中些懸立追々ニ江戸に登込六七百人ニも及小梅御屋敷にも餘程詰り居候由御藩中不取締ニ而主立而取鎖ノ候人も無之御家中四鼻ニも分り居候由此節登込候ハ番頭杯ハ一人ニ而山伏或ハ仲元又ハ郷士跡之もの、由色々ニ取沙汰有之候付聞籍之儀清田新兵衛へ申聞置候處此間井伊様公用人に模様承合候處成程段々登込畢竟御家老を御預ニ相成候處方懸立罷登り候と相見候得共去ル十八日ニ職一刻も引取候様自然此儘罷在候ハ、御法之通り可被 仰付と屹々 公邊より御達ニ相成候間無程引取可申段噂仕候由申達候内外御横目へも聞籍之儀御奉行方申談置方々聞籍候へとも寸斗分り兼小石川御屋敷へ之人の入込も出来兼小梅御屋敷ハ片々輪在家ニ付一向様子相分不申追分御屋敷之近來一方口ニ相成餘計之出入有之候得其他方入込候儀出来兼小梅御屋敷方日々二十人計も大股引ニ而出る候付引取候職と見候へハ幕比ニハ又罷歸り候由尤五人ハ鎗を持せ彌引取候様子ニ相聞候由諸家様よも餘計ニ見聞ニ罷出居候由ニ而市中料理屋杯ニ而も却而聞籍出来兼候様も有之小倉宿ニハ宿を不爲致候付野宿ニハ罷在候と之評判もいたし候由ニ而一向取留メたる様子相分不申段相達候由右取沙汰ニ付而ハ御用人杯方ハ此儘ニ而ハ御手薄ニ付御備組を御呼登有之度段内意も有之候へとも前條新兵衛聞取候趣ニ候へハ 公邊方御世話有之事

ニ付左迄之儀ニハ成行申間敷近來新兵衛御右筆頭衆へ承り候へハ末引取候時ニハ到り兼候之噂も有之候由左候へハ又懸念之至御座候得とも近來登込候様子ハ相聞不申浪人躰之もの市中にも餘計ニ罷出居候付而小石川御役人方方々吟味ニ相成追返し之世話も有之との囁も承り何様當時之模様ニ而之各別之事ニハ成行申間敷見込居申事御座候右之一件之方々より御國許へ注進も可有之此後相變候儀も承り申候ハ、以急便御意可申候間先左様御間置可被下候以上
安政六年也
五月廿八日
長岡與三郎
有吉市左衛門

惣連名様

有吉市左衛門

五月廿九日幕府は來月二日を以て神奈川長崎箱館の三港を開き露佛英蘭米五國との貿易を許可する旨を達す

〔尊攘錄皇武令〕（間部下總守渡五月廿九日大目付様御達）

大目付に

魯西亞佛蘭西英吉利阿蘭陀亞墨利加五ヶ國交易御差許相成候間當未六月より神奈川長崎箱館於三港商人共勝手ニ可達商買候右之者共舶來之品々賣捌候者勿論居留之外國人共見世賣之品諸人買取候儀も是又勝手次第たるべく候
右之趣御料私領寺社領共不洩様可被觸知もの也
五月廿九日也

五月廿九日幕府外人に賣渡禁制の品目を定む

〔安政五年筆起萬延元年九月迄〕

〔御同席觸寫大目付様御廻狀寫控〕

大目付に

一官服之類

一御法度之儀認候書籍并雲上明鑑武鑑其外官位高等記候書類

一兵學書并板本ニ無之寫本之類

一城郭陣列之圖

一甲冑刀劍并都而附屬之小道具

一銅

右之品々相對ニ而外國之者共ニ賣渡候儀不相成若心得違ニ而賣渡候もの有之候ハ、其常人ノ勿論五人組迄可被處罪科候

右之趣御料私領寺社領共不洩様可觸知もの也

五月

右之通可被相觸候

六月八日幕府は神奈川開港につき外人居留散步區域取締の令を發す

〔安政五年筆起萬延元年九月迄〕

〔御同席觸寫大目付様御廻狀寫控〕（間部下總守渡六月八日大目付より廻狀）

大目付に

神奈川港御開有之外國人共同所に居留且六郷川筋を限り其餘最寄十里之内歩行御差許ニ相成候ニ付而之同所奉行支配向々者爲取締相廻候間都而外國ニ拘り候儀之支配向之者打合取計支配向不居合節外國人ニ付而不都合之儀出來候ハ、早速同所奉行に申出差圖請候様可致候右十里内領分知行有之分者勿論往來旅人等ニ至迄右之段相心得不取締之儀無之様可致候

右之趣神奈川最寄領分知行有之向々は可被相觸候

安政六年

六月

六月十日ハリス下田より江戸に到り麻布善福寺を以て米國公使館とす

〔秘新日米外交の真相附録〕

日米條約調印の重荷を卸したるハリスは直ちに下田に歸臥し次て多年の心勞を慰せんが爲めに支那漫遊を試むること數旬再び下田に歸來すれば計らずも本國上院に於て一千八百五十九年(安政六年)一月七日滿場一致を以て彼を日本駐紮米國全權公使とすべきことを決定し時の大統領ブカナンより任命の通知書到着し居たりき
茲に於てかハリスは六月三十日下田出發神奈川に赴き七月一日始めて公使館旗を同港に掲げ次て七日(我六月十日)更に廿一名の部下を拉して江戸に來り麻布善福寺を以て米國公使館となし始めて星條旗を江戸の天に翻へしたり(善福寺は高僧惠澄の西曆一千二百三十二年建造せし所にかゝる)

六月十一日幕府露佛英蘭米五國條約書寫を我藩に交附し之を同席各藩に通達せしむ

〔安政五年四月より萬延元年六月迄 御記録〕

六月十一日九半時間部下總守様外國御用より御呼出ニ付清田新兵衛參上候處外國條約寫五冊并左之御書取下總守様御直ニ被成御渡御同席様に御通達之儀も被仰聞候

大 廣 間 席に

魯西亞佛蘭西英吉利阿爾陀亞墨利加に條約爲御取替相成候ニ付右條約寫相達候條約之譯家來を始領分末々之者ニ至迄相心得候様早々可被申付候

六月

(備考) 我藩ハ六月十三日を以て五國條約書寫を長藩外廿七藩に通達せり)

六月十七日幕府は英國と通商條約を締結したる旨を達す

〔尊攘錄皇武令〕

大 目 付に

今般英吉利國より使節差越條約本書爲御取替相濟(十五)候此段爲心得向々に可被達候

六月十七日

六月十九日日本藩は外人途上に於て藩主父子の通行を妨害する場合の處分につき幕府に稟申す

〔安政五年四月より萬延元年六月迄 御記録〕

六月十九日

一外國人御府内致辨御候付御行列參懸候節之儀御小姓頭方内意申出有之候歟御家老より清田新兵衛に沙汰ニ相成候趣同人方口達有之候依之致草稿新兵衛に相渡置候處(中略)昨十八日奥御右筆組頭原彌十郎殿に案文入御内見候處何之御存寄も無之大分此節諸侯方右伺書御差出ニ相成候由尤外國懸り御用番間部様に被差出候様ニと御返答ニ付今朝御同方様御勝手に吉弘加左衛門持參御用人を以差上候處被成御落手候段右御用人を以被仰聞候

近來異國人共御府内を茂致辨御候處於途中自然越中守右京大夫列ニ參懸候節者供先見繕之者方異人付添之役方に及懸合成丈不差障様取計可有之候得共右等之間合無之行逢萬一異人不作法之儀茂有之無據節者時宜ニ應供方取押役方之向に引渡候心得ニ御座候此段奉伺候尤可成丈者穩ニ取扱候様可仕勿論家中末々ニ至迄取締方之儀者精々申付置候事御座候以上

細川越中守家來

六月十九日

清 田 新 兵 衛

安 政 六 年

三四九

〔六月廿四日指令〕

書面之趣ハ外國人共市中等歩行之節諸大名始に行逢候ハ、不作法無之様可心得との儀者外國奉行より得と長官之者に申談置候得共素より御國法も不辨もの共ニ候間万一心得違致し候者有之候ハ、可成丈穩ニ取扱右之次第ハ早々外國奉行之に相違候様可仕候事

六月廿一日幕府は廣く舶來武器の購買を許す

〔尊攘錄皇武令〕

大 目 附に

各國舶來之武器類開港場に見本爲差出置候間萬石以上以下諸家陪臣ニ至迄買受候儀不苦候望有之而々者勝手次第最寄開港場運上役所に罷越承合候様可致候

但芝生町新道より南横濱町迄之場所は混雜いたし候間馬上又ハ馬牽入之儀者無用ニ候

右之通可被相觸候

六月 廿一日

六月廿五日幕府は外國貿易開始に關し地方人民の外人に對する注意の件を布達す

〔尊攘錄皇武令〕

大 目 付に

外國交易御取開有之外國人開港場に船を寄共最寄居留をも御差許相成候付而者其所之者ハ勿論海上又者途中いつまの場所ニ而も外國人ニ出候節書狀届方等頼を或ハ品物等贈り候とも堅く斷ニおよふべく若無餘儀請取候儀有之者右品持參委細之儀早々其筋に申出へし暨し置後日相顯るゝよおるてハ吟味之上可被處罪科もの也

右之趣御料私領寺社領共不洩様可觸知候尤天保十三寅年被仰出候浦々建札者取拂可申候
右之通可被相觸候

六月 五廿日

六月廿九日在府我藩老臣は水戸藩の形勢を藩政府に報告す

〔自筆狀扣〕

以別紙申達候水戸御藩中々大勢江戸表に罷登候儀付而之先便得御意候通御座候處段々世之上取沙汰も穩ニ相成候得共小金宿より小梅御屋敷に詰代杯いたし候様子相聞居候處近日猶外間差出候處見聞之趣書付差出候を速有之候間右之寫差進入御披見申候近日ニ至候而者段々引取彼方御役人被差出江戸に罷出候儀を堅制止ニ相成候由ニ而出府いたし候之ハ絶而無之由御座候様ニ大勢出府いたしたる趣意ハ彼方御老公を御國御隠居を願之ため之評判も有之候得共取留候趣ニハ無之何様當時之模様ニ而ハ彌以平穩ニ相成可申と見込申候事御坐候以上

六月 廿九日

長 岡 與 三 郎
有 吉 市 左 衛 門

惣 連 名 様

〔神庫文書人印密書輯録 二十七番〕

〔卷込〕 水戸御屋敷開繕書
水戸人數屯集開書〔此八字本朱書〕

御内意之覺

私共儀水戸様御屋敷之御模様内々伺取候様被差越候處左之次第ニ御座候先月初比より御家中士分ト相見晝夜ニ懸御上屋敷を初メ小梅御屋敷兩所ニ大勢登込候由就中十八九日比大勢參候由小梅御屋敷に者假小屋拵居候を窺見申候ニとム

安 政 六 年

んぶたにして至而ひたぐ外向より目立不申様ニ相見申候極々物靜ニハハし居候様子有之候得共ごよめきハ強ク相聞申候承り候得之ニ千人計茂有之候由燒出等之目數承候ヘハ一日四斗依拾八依程燒出候由味噌醬油等ニ至迄御國元より船仕送り之山ニ承り申候勿論門外不出風呂ふとも御屋敷内ニ所々ニ相立居候由是迄御出入之諸町人と茂一切差留候由此節蚊屋ふどの御買上ケ目數承り候得之千貳百張枕拾兩貳步程御買上之由是ハ以前相動居候仲間之囁ニ御座候此者ハ此砌も御出入仕候職と相見申候水街口新宿を窺申候處居酒屋水茶屋ニ至迄御家中三人五人宛入込居申候支度之躰ニ而伺候處隨分風品茂宜敷者茂有之候所ニ而者迷惑ニおもひ居候由ニ御座候御上屋敷之儀者外之見懸何そ相替候儀も無御座候當時者御長屋内御作事共有之候様子見請申候前段御屋敷御人數者去ル廿五日ニ承り候ヘハ少々宛罷歸り申候趣ニ而追而逐日承り候ヘハ最早引取候趣ニ御座候當時之處ハ小梅御屋敷までと相見申候一日所々ニ登込候御人數凡三千人も有之候職右御人數共も歸國ニハし候様被 仰出有之候ヘ共御模様黑白相分候迄強而罷居候趣ニ取沙汰仕候本郷御屋敷之儀之平常ニ相替り不申候其外區々之風説ニ而是と雜取究精々窺聞候處前文之通ニ御座候此段御内意奉申上候以上

六月

池 永 作 助
内 山 傳 太

六月廿九日在府本藩老臣は外人徘徊して往々不禮の行爲ありとの風聞あるを以て藩主外出の際に於ける儀仗に多少の斟酌を加ふべき旨を藩政府に通報す

〔自筆狀扣〕
安政六年

以別紙申達候外國之者共白金御近邊之寺院に逗留いたし居所々徘徊高輪品川邊最出歩行無作法之事も有之或ハ御大名之御行列を切り候杯之取沙汰有之候ニ付而 妙解院 御參詣之節甚心遣ニ有之候付取扱様之儀御小姓頭方伺出ニ相成候付 公邊之御模様伺ニ相成御返答之趣等他筆を以申達候通御座候右御返答之趣些不取締ニ付猶又伺ニ相成度之

説も有之候得共當時外國一件付而者 公邊殊之外御紛雜ニ而右様之事迄ハ御手ニ難被及趣ニ相聞夫ニ被是ト伺出ニ相成候而ハ 公邊之趣も何程ニ可有之哉ト囁合今少居合候ハ、程も相分可申今暫之間ハ妙解院 御參詣杯ハ被遊 御見合度段御用人に茂囁合右之趣を以 御内慮奉伺候處成程少シ被遊 御掛念茂候得共左様ニ御見合ニ相成候而之御際限茂不被爲在何方 御出茂不被爲出來候間萬一之儀有之候ハ、成丈ケ穩ニ取扱候様ト之 御沙汰ニ付強而茂難奉願去ル廿六日妙解院に被遊 御參詣何そ相替候儀も無御座候得共御小姓頭中之甚不安意ニ而段々申談御丸内井伊様迄位之御廻動等之節ハ是迄之通ニ而白金井石小田等 御出妙解院 御參詣之節之歩御使番五人歩御小姓五人御供立外ニ而御行列之前後ニ參り異人參懸り候節 御駕之脇ニ付々自然之儀有之節之右之者共取扱御行列ハ無御淀御通拔ニ相成候様有之度尤重疊穩ニ取扱候様ト之儀者精々申聞置可申之事ニ付囁合候處右ハ御行列之人數増杯ト申儀ニも無之爲念御留守居に茂打合候處何そ 公邊ニおゐても差障候儀も有之間敷ト之見込ニ付 御内聽ニ茂奉達候處不被爲在 思召候付共通取計候様及差圖申候 若殿様御出之節も勿論右ニ准シ取計申答御座候兎角異人共色々之事ニ差障こまり候世上ニ成行申候以上

四人持之宿繼仕出(此八字書込也)

六月廿九日

長 岡 興 三 郎
有 吉 市 右 衛 門

惣 連 名 様

七月九日幕府は外國商人より直接賣買の洋書を檢閲すべき旨を布達す

〔尊攘錄皇武令〕

大 目 付に

西洋書籍之儀ニ付而者兼而被仰出之趣も有之候處今般神奈川長崎箱館開港之上ハ右場所々々ニおゐて外國商人共より

安 政 六 年